

## 「路傍の地蔵」の宗教史的考察

著者	清水 邦彦
雑誌名	平成25(2013)年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書
巻	2010-04-01 2014-03-31
ページ	43p.
発行年	2014-05-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/46560">http://hdl.handle.net/2297/46560</a>

# 「路傍の地藏」の宗教史的考察

(課題番号 22520060)

2010 年度~2013 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) (一般)

研究成果報告書・冊子版・翻刻編 I

## 『地藏菩薩利益集』翻刻

2014 年 3 月

研究代表者 清水邦彦  
(金沢大学人間科学系准教授)



## 翻刻の凡例

- ・二字を示す踊り字は、前の二字を繰り返した。
- ・字体に関してはなるべく旧字・新字・異体字で記すようにしたが、全体で統一は取れていない可能性がある。
- ・漢文体の箇所は書き下したが、經典の引用などではそのまま記した。
- ・「ハ」は「は」とした。
- ・□は、印刷不鮮明及び清水読解不可能な文字である。
- ・△▽内は小字

以上、本翻刻は完成にほど近いものであるが、内容紹介として、発刊するものである。『地蔵菩薩利益集』に関しては、既に渡浩一『『地蔵菩薩利益集』の世界』（『仏教民俗研究』6号 一九八九年）として、詳細な紹介と翻刻の一部があり、その成果を本書でも活用させていただいた。

## 地蔵菩薩利益集并序

過ぎ卯のとし予地蔵菩薩の利生記六巻を撰ず。時に和漢古今の靈驗記もとむるにはなはだ得やすからず。それよりこのかた都鄙の感應の目にふれ耳に入るもの。濱の真砂のかずかずに。硯の海のかはくまもなし。その間わずかに数年にして。かく靈瑞のおほき事はなんぞや。これあに地蔵菩薩末法當化の時いたり。有縁の男女皈依得益の機うめるにあらずや。所謂時をばうしなふべからず。よろしく早帰敬し奉りて。まづは現世の災難をはらひ。一切の善願を満じ。悪鬼をしりぞけ。魔障をのぞき。病苦を止て。寿命をのべ。怨霊呪詛のたたりを滅し。身心安穩の福樂を得て。しかも又臨終の知識と頼。浄土の導師と仰奉べし。これらのたぐひ。皆是地蔵菩薩の本誓にして。行者信願の得ところなり。其事具に集の中にのぶるがごとし。よつて今見聞に随てしるしをける感應をあらはしてはやく世に行はんとす。故に僧俗を序ず。古今を撰ず。記のままに梓にちりばむ。なお又ふかはばかりありて。載ざるあり。或はたしかにきくにいとまあらずして。まづ筆をさしたくあり。わずかに積五巻と成る。名て地蔵菩薩利益集とい

ふ。翼こひねがはくは同志どうしの人。拾遺しゅうい後撰ごせんのたえずして。菩薩くどくの功德くどくを称揚せうやうし。世尊じそんの慈恩じこんを報謝ほうしゃし玉たまはん事を。我又また世々しやうじやう生じん々みらい尽さい々さい未来みらい際さい。地藏ぢざう菩薩くどくの眷属けんぞくとなつて。上のぼりは上くた。下くだりは下くだりて。その大願ぐはんの網あみを張はり。かの弘誓くげいの舩ふねを棹さおとす。此所こゝ請いはゆる蚬ひ蚌ふ大樹じゆをうごかし。精衛せいゑい巨海こかいをうめんとするに類るいせるものか。漫みだりに所願しよくはんをのべ。他の笑謗わらひおとしりに一任じんす。ねがふところは間又ま我くみに与くみする人あつて。共に菩薩くどくの眷属けんぞくとなり。斉ひとしく菩提ぼだいの願ぐはんを成じやうぜん事を。是併これしかしながらわがちから我力われぢからをもつてなすにあら。偏ひとへに菩薩くどくの心護念ごねんに由よばなり。然しからば則すなはちあえて難かたしとすべきに非あらざる歟や時。

元禄四辛未年七月吉祥日

沙門妙幢淨慧謹序

地藏菩薩利益集卷之一

一 洛陽壬生寺の地藏菩薩横難を助玉ふ事

洛陽壬生寺の地藏ぼさつは。縁起殊勝にして。靈驗多瑞なり。諸書にのするところ。人口のつたふる事。都鄙にあまねければ。わきてしるすにおよばず。しかれども今しばらく新聞の数件をあぐるにいはく。去延寶のはじめつかさ寺中の一院におろかなる下司男ありけり。しかるにこの本堂に地藏ぼさつの御まへに。毎年正月にかがみもちを。そなふる事あり。洛中のあきびとこれをてうだいして。まもりとなし。次のとし。もち米壹升。料足十二銭をもつてつくなひとなす。かくすれば他の債をかうふらずといへり。時にかのおとこ。諸人こそつて。此のもちをうけたうと見て。これまことにならびなき守なるべし。我もこひえてはだにつくべしとおもひて。わづかばかりをこひもちひて。よろこぶ事かぎりなく。いそぎ袋に秘入て。これをむねにかけ。且も身をはなたず。たうとみ信じけり。そののち寺をいでて。江戸にくだり。蜂須賀阿波守殿の家中。何がしのもとにみやつかへせしが。やがてぐせられて阿波にくだりぬ。いかなるゆへにやありけん。無実の難をかうふりけるが。もよどりおろかなり。ければ理えいひわかたずしてそのつみまたくひとりの身にかうふりぬ。主人いきとはりふかくて。明日にぞ首を刎べしとさだめおかれし。その夜のゆめに錫杖をたづさへたる沙門の入来て告玉ふは。我はこれ都壬生寺のぢざうなり。汝が下部それがし。またまたおかせる罪なし。しかるを汝はんだんおろそかにして。無実の罪におとし。卒爾にいのちをたたとするでう。きはまりなきひが事なり。枉てかれをつみしうしなふにをいては。汝が身にも

横難あるべし。その時かならず悔事なかれとの玉ふ。主人夢さめて大におどろき。いそぎかの男をめして。おのれいかなるめでたき守をもち。又はいかなる行のあればか。かほどまで地蔵ぼさつの加護し玉玉ふやととふに。男申けるは。かかるあさましき身が。いかでさる御守などもち奉らんや。殊に行する事にいては。さらにおもひもよらず候と申。主人聞て。いかさまにもゆへ玉うして。かかる冥助のあるべきかは。よくよく思惟せよとありしにぞ。此男はじめてころつきて。ありしもちの事をかたりて。もしはかやうのゆへにてや候らんと申。主人聞て扱さぞかし。うたがひもなくそれが守となりて。かくぼさつのおうどをかうふるなるべし。此うへは汝たとひ実に科ありとても。かくぼさつの守護し玉ふうへはすでにぢざうのけんぞくたれば。我いかんともすべきやうなし。いはんやことに無実ならんをや。ぼさつなんぞ妄話し玉はん。さりながら世法なればとて。よくよくとひ明るに。無実に極りければ。いよいよ信感をこらして。身のあやまりをくひ。かれが死罪を宥けり。さるにてもおもふ子細のあればとてやがていとまをえさせ。めぐみいとねんごろにして。他におもむかせけるとぞ。又過し寛文中に遠州濱松のものこれも壬生のかがみもちをうけたうとみけるが。後に江戸へくだりて奉公しけるにいささか主人の心にたかふ事のありて。明日誅せられるべきにきはまりける前の夜。主人の夢に洛陽壬生の地蔵ぼさつの来せ玉ひて。此のものは我に物をかりたる事あり。この度のいのちにおゐては。是非にたすけたべかしとのたまはせ玉ふと見て。ゆめさめぬ。かくあらたなる靈夢にうちおどろきて。忽瞋恚のほむらもきえぬ。一旦の戒にこそ。かくは思たちつれ。その身さして重つみをおかせるにもあらずとて。やがてゆるしぬ。かくてかのものを近付て。そのやうくはしく聞とどけて。いよいよ武ころも和つつ。地蔵尊の悲願の程。感涙たもとをうるはしけり。そののち此男を都へのぼせて。かの償をつくはせけるよし。かの男壬生寺東坊へきたりて。自これを語。歡喜の色眉に溢。信敬のころ身にあまりて見えしとぞ。凡此鏡のもちを。頂戴受持して。その利益をかうふるものすくなからず。今且此二事をあげて。いささか自他の信門をひらくのみ。惟に本願經に。毎日地蔵菩薩の御名をとなふる事千返つ。千日にいたらば。菩薩のけんぞくをつかはして。これを守護せしめ現世には衣食ゆたかに溢。もろものやまひくるしみなく。乃至横難その家にいたらしいかにいはんや。その身におよばんや。此人ひつきやうじては。菩薩のいただきをなで。愛し護。成仏の記別をさづけ玉はんと。説玉へり然るに此男はさして宝号をとなふる事をもきかず。ただわづかに少餅信持のいんえんをもつて。しかも御けんぞくにはあらで直に大ぼさつの尊臨して。かくすくはせ玉ふ事。いはゆる仏法の中におゐて。なすところの善事一毛一滯一沙一塵或は毫髪斗もあれ。我やうやく済度して。大利益をえせしめんと玉へる。御ちかひの程おもひあはせてありがたけり

## 二 同地蔵ぼさつの御茶湯を戴て瘡落事

下京井本町といふところに。さるわび人ありけるが。剩久瘡をふるひしに。いろいろ療養するといへども。すべてそのしるしもなく。身心しだいつかれて。世にあぢきなく打ふしつともすしけるところに。むかしの友のふと入きていひけるは。又條坊門壬生の地藏菩薩こう。分て靈驗もあらたにましますとて。京わらんのうやまひをも日々にかく。参詣の袖もたえやらざとこそききし。いかでおことやまひをいのらせ玉はぬぞや。急おぼしたち参詣し玉ひ。御茶湯などいただき玉へしと。ねんごろにすすめければ。病人けにも同じて。やうやく杖にすがりつく。かの御堂へまいり。すなわち御茶湯をこひうけて。至心にいただき奉り。祈願のかうべをかたふけてかへりけり。かくておこりもさだめておちぬべしと。たのみをかけて居けるに程なく例の刻限になりしかば。おもひの外にさむけ立てたえしのぶべくもなければ。やがてふしぬ。かくて熱氣いたくせめて。例よりもなをくるしきやうにおぼへをれば。こは地藏菩薩の御利益もなかりけりとかこちてうだうだとね入たりけるゆめに。さしもやんごとなき御僧のきたらせ玉ひて。汝我茶湯をいただくといへども。やまひのいへざるはよな。さきの夜汝虱をとりてつみたる科なり。ゆめゆめ我をうらむべからず。あすのあさ今一度我もとにまうでて。茶湯をいただけかしとの玉ひてかへり玉ひぬ。病人ゆめさめおもひあたりて。あさましくかたじけなき事いふはかりなし。かくて夜明けければ。いそぎ壬生寺にまうでて。又御茶湯をこひおろし奉りて。至心に頂戴してぶくしぬあんのごとく次の日おこり影もなくをちけるとぞ。夫いはゆる良薬を服すといへども養生おろそかなれば。その甲斐なきがごとく。たとひ佛神をたのみ奉るといふとも。邪見に落て。因果を撥無し。日々罪をつくりなば仏慈神力ありといふとも。これをいかんともし玉ふ事かたし。ただよく因果をやぶらずしてつみをおそれ。ふかく他力を信じて。三寶をおおぎたてまつるをこそ。正見の人とはいふべけれ。殊にはんや諸仏ぼさつは。慈悲をもつて心とし玉へるなれば。ししんなくして。もののいのちをとらんもの。いかんぞかの御ごころにかなふべきや。今世に放生してよくおこりのおつるをみるに。せつしやうして。そのくるしみのます事。それしからざらんや

### 三 同地藏の引導に依りんじう目度人の事

下京に高野堂の町。藤本町とてありけり。その町内に壬生の地藏ぼさつを信じて。としごろあゆみをはこぶふたりの俗士ありけり。おなじ御法の友といひ。しかもならびの町なりければ。たがひにちなみふかうして。つねにともなひてまうでけり。みちすがらの言種にも。もし此ふたりが中ひとりさきだつてりんじうせんをいでは。よろづよろしくさたして。こころよくおうじやうをとげしめんなど。ともにちぎりて。おぞうぼさつにもただひとへに極楽引導し玉へとぞいのり奉りけり。ある時藤本町の人。高野堂の人をさそひけるに。俄にわづらふよしにて。呻ふしけり。かの友おどろきちかづきて。いかがし玉ひぬるにやとひなぐさめけるに。この男いふやう。我とし月壬生へあゆみをはこびしに。今はかぎりとなりけるにや。すではや。しぬべきこころちし侍りぬ。せめてはちぞうぼさつの御前にて。ともか

くもなりなんなどおもひ。入侍れど。身心くるしければ。一足もひかるべきとおもはれず。今はひとへに御へんをたのみたてまつるなり。いそぎ壬生へ御まいりありて。我日ごろのねがひのごとく。あやまたず極楽浄土へみちびかせ給へといのりたべかと。双眼になみだをうかべ。掌をあはせて。誠におもひ入たる様なり。かの友も。おもひもよらぬ俄事なりければ。ゆめのごとくにおもひつつしきりにあはれをもよほし。ひそかに袖をうるほしけり。かくてあるべきにあらざれば。いそぎまうでて。やがてかへり来なんとて立いでぬ。かくて道すがらも。さだめなき世のならひ。電光朝露のあだなるたとへなどとおもひつづけて。あはれ幻の色。かりなる聲に心をとむべきにあらずと。ひとりとしてゆくほどに。程なく地藏堂にいたりぬ。すなはち香花などまいらせて。ねんごろにまづかの友のぼだいをいのり奉りて下向し。すぐにかのころへおもむきて。いとねんごろにあつかひけり。かくて夜もやうやうふけ。やまひもすこしおこたりてみえければ。さだめてこよいは子細あらじとて。旦我屋へかへり。かりにまじろみいたるに。ゆめともなくうつつにもあらで。門をたたく音すなり。たそこたへければ。妙なるこゑして今高野堂の町のにがしこそ。りんじうちか付たれ。我も引導にゆくぞ。御辺もいそぎまいられよかしといひすててすぎぬ。むねうち噪つつ。いそぎはしりいでて。とぼそをひらいて。四にかへり見るに人なし。さてはうたがひもなき。地藏ぼさつの御告にこそ。猶豫すべきにあらずとて。やがてはせゆきて。かの病人を見るに。そのけしきはる事なし。おもはずの事かなとまもり居たるに。病人のいふやう子細侍ばこなたよりこそ申入め。いかに夜ふけて。かくとふらひ来玉ふぞ。まづかへりいらせ玉ひて。つかれをやすめ玉へとありしに。かの男。今はつつみかねて。件の事どもかたりつつ。日ごろの清ころざしをぞんじつれば。かくはばかり申侍るなり。御ころへあれかしとすぐめれば。病人これをきいて。よろこぶ事かぎりなく。さてはそれがし。日ごろの所願を地藏ぼさつの御納受まして。かく冥加あらせ玉へるにや。このうへは浄土往生うたがひなし。まことにありがたかつたのもしき事なりとて。くわんぎのなみだをながしつ。ころしづかにりんじうの用意をぞしたりけり。かくて半時ばかりもすぎて。病人いふやう。いまはやりんじうの期いたりぬとおぼゆとて。端座合掌し正念すこしもみざれず。地藏の寶号をととなへながら。ねふれるがごとくに往生しけり。それより見聞の男女いよいよ信をおこして。壬生日参のあとをまじへけるとぞ。此事は承應年中のよし。ある僧のたしかにしろしおかれしを見侍りて。ここにうつし入ぬ。今世後世能引導の金言。あにそれ虚妄ならんや。

#### 四 同地藏菩薩火難をすくはせ玉ふ事

下京猪熊錦小路上町大工某。つねに壬生の地藏ぼさつを信じて。あゆみをはこびけるが。ある夜いぬる時に燈臺の火けさんとおもひながら。つかれしままにおぼへずふせり入けるに。いつの間にかはもえさがりけん。灯臺のくもでの木半ばかりやけて。事すでにあやうくみえしころ。壬生の地藏の夢にきたらせ玉ひて。ただ

いま出火せんとするに。いかでかくゆたるにふすぞと。あらかにおこさせ玉ふと見て。うちおどろきて夢さめぬ。あはてておきあがるに。火のひかり煙々としてあたりも昼のごとし。いそぎうちけして。事ゆへなかりき。又四条岩神あたりの女人。これもこのぼさつに信心をかたふけるが。或夜ねいりし中に。火燵より火いできんとしけるを。地蔵ぼさつのむ中にきたらせ玉ひて。ややとおこさせ玉ふと見て目さめぬ。焼臭にほひの鼻に入しにころ付て。いそぎおきて見けるに小児の襦をこたつにかけおきたるが火におちいりてふすばりぬるを見ておどろきてうちけしぬ。本より水火の難をのがれしめんと。の御ちかひあれば。かかるしるしもいちじるしきにこそ。されば愛宕権現の御本地も勝軍地蔵ぼさつにてわたらせ玉ふよし。大慈大悲の御方便。かへすはへすもありがたくぞ侍る

##### 五 同地藏菩薩の加護によつて正念に往生する事

上京春日とおりの堀川に。大坂屋市郎右衛門といふもの。さのみ後世のころざしはふかからねど。よのつね。柔和にして。ころざまよき人なりき。過し貞享三年冬。のころ。おもく煩て今はたのすのみすくなくみえけるに。その母つねに壬生寺のぢさうぼさつを信じて。とし月歩をはこびけるが。此たびは昼夜のかんびやうに。みずからまうづるにいとまなければ。代参をもつてねがはくは我子それがし。定業いまだ来らずは。早病苦をまぬかれしめ。但命運かぎりあらば。かならず浄土へおくらせ玉へと。一心に祈請して曰くおこたらずまうでさせけり。しかるに此病人のおとうと。いもうとにはじめより出家したるありけるが。ともに来てあつかひけるに。事すでにきはまりぬとみえざれば。とかくいひすめて。我師なりける知識の鳴瀧に在けるを請じまいらせて。御教化をねがひてれば。上人機にのぞめて。いみじく勤化まし。すなはちち十念をさづけてかへり玉ひぬ。それより病人信心ほつきして。又二心なく念佛しける。折しも極月十二日は。亡父の正當なれば。今宵は一夜別時の念仏を修せられよといひければ。ふたりの僧尼も。かくまで信心のおきたりけるをよろこび。且は孝養の為なれば。いかでか辞べき。ころよく領承して。すなはち十一日の夜もすがら。念仏をつとめけるに。その夜病人母にむかひて。あれあれ見玉へ。かなたにさふらうはおとうととそれがしの僧。こなたなるはいもうとの尼それがしなり。又そなたに見えさせ玉へるは。まさしく。地蔵ぼさつにてましますぞや。あらそうとあらいまいまし。あなかしこたれたれもころし玉へ。御そばへよりてけがし玉ふな。それそれ御房。ぼさつをば佛壇へ上申されよといふ。そのさま謔言とは見えず。もとより母の壬生寺へのり奉りし事は露しらせざりけるに。かくいひければ。げにぞぼさつの来現あつて。加護し玉ふにこそと。おのおの目とめを見合て。随喜のなみだをながしけり。とばかりありて。又目を見上てあれあれおがみ玉へ。ぢさう尊のただいま床のうへにあがらせをはしますなりとて。すなはち掌を合て。実もまのあたりみたてまつれりとおぼしきありさまにて。教禮の躰いとふかくぞ見えける。かくて夜も明ければ。念仏満数のゑかうもとげぬ。その日もいよいよ心正して。あくる千三日にいたり



て。辞世の歌など讀つ。念仏相續して正念に往生しけるとぞ所謂地藏ぼさつは。有情の親友なり。衆生の生ずる時は。その身命となり。滅する時は導師となり玉ふと。吁随順衆生の御慈願のほど。頼母しかりける御事なり。

#### 六 同地藏のあはれみに依信女難をまぬかるる事

下京邊に。或女人中年のころより。宮仕にいでて。物ぬふりざなんどつとめけるが。人のすすめによりて。おきふし地藏の寶号をとなへけり。分て壬生の地藏尊を信じていとまの日は。かならず拝趨の袖をひるがへして。離苦得樂をいのりたてまつりけり。或時たのみたる人の一るの中に。よろこび事のありしに。主人より。其のもとへ産衣をつかはすとて。此女にぬはせけるが。明日は七夜なれば。そのいわぬの間にあはすべしとおほせける程に。夜ふくるまで。ひとり燈をかがけて。やうにぬいおはりぬ。いそぎ火熨をかくるとて。かの産衣の肩前より。袖の下までこがしけり。はつとおどろき。もしやと白粉などぬり付すりつけ。さまさまこしらへ見れど。もとよりいたくこげたる事なれば。そのいろかつてしろまず。あかく筋立て。目もあてられぬ様也。今はすべきやうなれば。心いとのごとくみだれて。取つ置つ。ひとりかなしみて。只なきになきけり。夜もすでに明なんとす。あまりやるかたなきままに。折しもとしのくれにして。しかも暁がたなれば。さむきだに。はだへをとほしけるに。自こほれる水をくみて。垢離をとり。壬生のかたへむかひて合掌し。南無地藏大菩薩あはれ此難をしくはせ玉へと。一心にたのみたてまつる。水をあびて皈命し。皈命しては水をあぶ。かくする事あまたびなれば。今は身もこほり。いのちもたへなんとす。かくて夜も明ければ身をやすめ心を静て一向に寶号をくりいたるに。すでに主人より使をたてて。産衣はいかがとたづねられける。此女むねうちさはぎて。せんかたなく。まつかの産衣を出し見るに。ふしぎやかか焦たるところ。露ほどもあかみなくて。餘のところと一様に白合てうるはしかりければ。あまりの事に此女ただ惘然とあきれて。歎喜のなみだせきかえる程なれど。さらぬいて。いそぎ主人へまいらせけるに。各とりわたし。うちかへし見られけるに。なにのとがめもなく。かへつて賞美せられけり。やがてさきへつかはされて目出たく事すみけり。そのうちなにのさたもなく過けるが。いよいよつしみて。人にもかたらず。ただおのれのみ。ますます地藏ぼさつの深恩を感じたてまつりて。暗に皈依のまことをかよはしけり。その後年へて。此女かの家をいでて。今は他家にあるなれば。ぢうさうぼさつの御恩報謝のためとおもひて。かく人にもかたる也といひしよし。ある人したくききぬるとしてしおくりけるままに。のせ侍りぬ。仏法の不思議を信ぜざる人は。かかる事なんきひては。かへつて邪疑をおこす事もあるべけれど。此只いはゆるこの詩人にむかつて詩を説耳。あにきかずや本願經にその時世尊。金色の臂を挙て。又地藏菩薩摩訶薩の頂をなでて。しかもこの言をなし玉ふ。地藏地藏。汝の神力不可思議なり。汝の慈悲不可思議なり。汝の智慧不可思議なり。汝の辨才不可思議なり。たとひ十方の諸仏。汝の不

思議の事をさんだんし。宣のべとき玉ふとも千万劫しうの中にも。えてつくす事あたはじといへり。仏だに地藏ひみつざうぼさつの秘密藏ひみつざうをさんだんして。唯ただ不可思議ふかぎと耳みみの玉へり。これをもつてしんぬべし。仏菩薩きやうかいの境界きやうかいは。凡慮ぼんりよの議ぎすべきにあらず。言語ごんごの道絶みちぜつする事を。只ただあふひでこれを信しんずべし

#### 七 同地藏菩薩の引接いんげつをえて辞世じせいの歌うたよむ童子だうじの事

壬生村かんざきむらに神崎氏かんざきうじそれがしの子。いかなる宿善しゆくぜんのありけるにや。いまだ幼稚ようちのころよりも。つねに此地藏堂ちぢざうだうにまいる事をよろこびたるが。かりそめにまうでも。かへるさをわすれてあそびけり。かくて五歳さいになりけるに。おもきやまひをうけぬ。父母ちちははふかくかなしみて。手てをかへ薬くすりをもちゆといへ共。さらにそのしるしもなく。次第しだいにつかれて。今はやたのみすくなくみへけり。ことに愛々あいしき男子おとこなりければ。ふたりのをや。かたわらをはなれず恩愛おんあいのなみだ。眼まなこをくらし。哀傷あいしやうの思おもひ腸はらわたを断たつ。いかがはせんとまかり居ゐたるに。此子目ここめを見あげていふやう。我われは地藏さまのよきところへつれゆかんと仰おほせらるれば。更になげく事はなれけれども。おやたちのなき玉たまふをみれば。かなしきなりとて。一首しゆのうたをよみけり

なげかじなしばしば雲井くもゐにかくるとも やがて生むれん花はなのうてなり

と詠あじていきたえぬ。両親りやうしんゆめうつともわきまへず。此子ここにとり付。ともにきえ入いるやうに。なきとだゆ。外よその見目みるもあはれなり。かくてとむらひくる人々も。此よしをきいて。これは只地藏ぢぢざうぼさつのかりにかたちを現げんじて。無常むじやうをしめし。諸人しよじんを引いん導だうし玉たまはんとの大悲だいひの方便はんべんなるべし。さらではいかに東西とうざいわきまへぬほどのみどり子こにて。ためしすくなきりんじうするのみにあらず。かく世よにありがたき歌うたよみてんやと。をのをの感嘆かんとんして。泣々なく野辺のべのけぶりとなしぬ。かかる哀あはれをきいても。穢土えどをいとふころも切せつならず。浄土じやうどをねがふ信しんも増さうせずは。いつの口くちを可期きせんや。吁あ菩薩ぼさつの善巧ぜんぎやうさまさまにして。かくまでしめし玉へども、松まつを時雨しぐれのそめりぬる。人の心ぞうたてけれ

#### 八 同菩薩の告つげによつて咒詛しゆその難なんをまぬかるる事

ちかきころ上京間あゐの町二条ふたじょうわたりにすまひするものの妻つま。常に壬生みぎの地藏ぢぢざうぼさつを信しんじけるが。或時あるとき平産へいさんしけるに。産後ご七夜しちやもたたさるころ。なやましうなりて。

身体苦痛しけり。醫治品をつくせども。曾快験のいりもなく。今ははや時をまつばかりに見えけり。眷属をのをの囲坐して。或はひそかに愁嘆の袖をしぼり。或はよそなからすめの念仏などとなて。せんかたもなく。見あたるに。かの女。目をひらきていふやう。あらありがたきやただ今すこしまどろみたるうちに。壬生のぢざうぼさつのおはしつるが仰らるは。かくおはぬ苦痛をするよな。扱々不便のいたりなり。これは汝をのらふものありて。壬生の本堂のひだりの柱に釘を打。又同寺の井の中へも。水神へ祈誓して。竹釘二本入たり。かかるとがめのあるゆへに。汝今の苦痛をうけたるぞ。いそぎ人をしてとらしめよ。さあらば汝が病苦すみやかに平愈すべしと。新に示現をかうふりしなり。誰にてもいそぎ壬生へゆかせ玉ひて。件の釘をとりすて玉はれといひければ。きく人あまりの事にこれはただ血の上の譚語なるべし。いかでさる事あらんと。信ずる人もなかりけるに。病人手をすりて。しきりに頼ければ。をりふしその座に佛陀主水といへるものつらなり居たるが。このありさまをよく察して。人々にいひけるは。世にはかかるふ道の例もあるなれば。一涯に譚語ともさだめがたし。いざまづ行て見んとて。壬生寺に縁ある人をともしなひて。ともにかの御寺にいたり。をしへのごとく本堂の柱を見るに。ふかくうち入りたる釘二本有。兩人はつとおどろきて。いそぎ釘抜やうのものともいひだして。やうやうにぬき出しけり。これを見て。いよいよ信をとつてげれば。うたがひもなく井の中にもあるべきぞとて。兩人さまさま方便して難なく。二本の竹釘をとり上たり。これひとへに地藏ぼさつの御はからひなりとて。感喜のまゆをひらき。恭敬の掌を合て。至心に禮謝し。かの釘を取もちて。いそぎ病家にかへりけるに。病人身心の苦悩たちまちにやみて。悦事かぎりなく。当座の面々。舌をまいて。をのをの信服しぬ。延命地藏經に。未来の衆生。發心する事あたはずは。ただまさに一心に延命菩薩を礼拝し。供養すべし。刀杖もくはへられず毒も害する事あたはず。厭魅。咒詛。起屍鬼等も。かへつて本人につかん。天に唾をはき。風にむかつて。灰をなぐるに。かへつて其身をけがすが如しといへり。謹按に菩薩平等の大慈悲なれば。咒詛の本人たりといへども。あに害を加事をほつせんや。然るに遷本人につくとはいかん。夫知禮法師のいはく。をよそ咒詛。毒藥。起屍鬼神等の法を用て。人を害せんとするに。もしさきの人。邪念あれば。まさにその害を受。もしよく正念なれば。遷本人に着といへり。今や此婦人常に地藏尊を念ず。正念の功ここにあつまり。地藏尊又この人を擁護す。慈悲の雲やうやくおほへり。これその難をのがるゆへなり。又其咒詛するものは。いまだ誰人といふ事をしらせれども。いはゆる己よりいづるものは。終に己にかえる理。顯然たれば。あにその科をのがれんや。菩薩は只此有縁の人を擁護するのみ。害を本人に推にはあらず。もし夫此女人はじめより。深心相續して。しかも宝号を唱事無間ならば。正念常に現前せん。たとひ咒詛ありといふとも。あにその便をえんや。然に今數日苦悩をうける事は。此正念間斷して。邪念雜起すれば。かく窺る所有にや。此後車のいましめとすべきゆへなり。抑又定業を転重輕受せりや。

九 同地藏菩薩に福を祈示験をかうふる事

ちかきころ磯氏某の息女。父のわびしきを嘆て。ひそかに壬生の地藏尊にあゆみをはこびて立願しけるに。往辰の正月廿八日のあかつきのゆめに。黒衣の御僧。浅黄のはなの帽子をかぶり玉ひしが。きたらせ玉ひて。徳つきてうれしやうれしやとの玉ひて。この句をうつしもて。壬生へまいるべしとの玉ふと見てさめぬ。又そのとしの八月廿八日に。かの御僧はじめ見たてまつりしさまにて。夢中にきたらせ玉ひつつ。汝うたよむ事をしらは。一首つらねよと仰けるに。我いまだうたよむ事ならひ侍らずと申けるに。まずいかようとも。よみてみよとの玉はせたれば。とりあへずなにごとも心にかける心もなし

かすみだてぬ高砂の松

と詠じければ。御僧よに御ころよげに。うちえませ玉ふとみて夢さめぬ。又或夜きたらせ玉ひて。汝父が富貴をねがはば。且艷陽の春をまてとてかえり玉ふ。かかる霊夢しばらくかうふりたてれば。ゆくすえたのもしくおもひて。倍信心退轉なく。まうでつるとぞ。まことに幼き心にて。父の身のうへをおもひわずらひて。かしこも地藏ぼさつをたのみたてまつり。孝心といひ信心といひ。あはれにたうとく侍は。その行衛いかにとしるしをまつにいとまあらで。かく載はべりぬ。脚氣のとがめあらんも。さる事なれど。地藏菩薩十種の福をあたへ玉ふ中に。財寶盈溢の御ちかひ。いかで虚妄なるべき。いかに況かくさきだつて。示験あるをや。これもうたがふべくは。はたなにをか信ぜんや。これ今のするゆへなり

十 了蓮寺の地藏菩薩不浄行の僧を追出玉ふ事

洛陽三条新町のあたりに。信濃屋宗安といふ人あり。生国は。信濃国飯田庄の人なり。式時そのさまあさましき法師の入来て。この御主は。もし信州飯田の人にておはすやと問。折ふし宗安出合て。しかなりとこたへければ。その郷になににがしといふものをしろしめされずやとどふ。宗安それは我わりなき友なりとこたふれば。かの法師大によるこる気色にて。我とかれが弟にて候。かく様をかへて。京都にすむといへども。衣食とほしうして。修行もなりがたし。しかるに今表に信濃公と書付ありしを見て。もしやと推参しけるに。不思議に値遇し奉れり。同国一郷の縁といひ。そしてゆく衛しられまいらせぬ身にしもあらず。あはれみ玉へと打くだきければ。宗安もそのありさまを見て。さすがあはれにおもひけるが。兄御歌にてしる人なれ。御身は初對面にて何人ばひとまづ飯田へ音信て。御身を申条相違なくは。何とぞはからひまいらすべし。宿はいづくにて誰ぞ。かさねてこなたよりあんない申さんといはければ。法師よにうれしげに。栗田口その

ところに住候なり。相かまてその身奉るなりとてかへりぬ。かくて件の趣飯田へいひおくられる返事に。御名のやう疑もなき我弟にて侍るなり。たよりもなきものにて行へば。ひとへにその身入候なりと申おこせられたれば。宗安たれよりころとけて。いそぎかの住家を尋て萬に付て。情にてぞもてなしけり。後には自頼寺の京極綿の小路なる了蓮寺へ更て。件の法師と三寶供養する役に預おかりたり。此法師しぜんと愛敬ありて。寺衆檀那。ともになれ睦ける程に。やうやく利養にうるほひとし月ふるにしたがつて。なにかとぼしからぬ身となりゆきけり。かくていつしかむかしにくるしみをわすれて。いろいろおごりの心ぞつきにけり。あまりの事に。ひがし山あたりの遊女のもとにかよひて。たはしきわざなんいふはかりなし。ここにかの寺に。定朝の作る金色の地藏尊まします。世にかくれなき霊像にて。いにしえより感應いとおほし。或夜此法師のゆめに。この地藏尊おはしまして。汝不浄を行じながら。この霊地にあらん事かなふべからず。すみやかに出去べしとの玉ひて。はなはだ憤玉へる御さまなり。法師ゆめさめて。大いにおどろきおそるといへども。さしていづちへとゆくかたをもおぼへねば。心ならびに日をおくりけるところに。ある夜又夢中におさうぼさつの来せ玉ひて。汝出よといふにいかで出ぬぞ。疾出ずは。目に物見けんずるぞとて。持玉へる御錫杖の柄にて。右の眼をつかせ玉ふとおぼへけるが。さめて後。右の目はなほだしいたみ出で。つねにつぶれて隻目になりけり。それより寺の住居もなりがたきやうになりければ。ひそかに忍出て。北野かたはらに。すこしあひしれるものありしをたよりて。かくれ住ふかくさんぎさんげして。勇猛の念仏者になりけるとぞ。此事このころ道盛法師の集られし。善悪因果随聞記にも載られき。その尾に論じてはいく。御法師もと道心ありといへども。或は貧苦のやまひにせめられ。或は利養の順魔に誑て。ぼんなうかたよくおこり。悪行やうやくかさなりてさだめて三途にをちなんとす。受がたき人身を受。逢がたき佛法にあひ。おこりがたき道心をおこし。出がたき恩愛の家を出て。今かへつてかくごとくならば。實にこれ寶の山に入て。手をむなしくしてかえるがごとし。ぼさつの慈眼これを見玉ふに。いかぞかやすき事をえ玉はんや。このゆへに大悲をもつて呵責し。すばらしきの苦難をあたへて。多年の科をあらため玉へるなるべし。兎にもかくにも慈悲深重の御方便。むなしく説玉ふ事なし。罰をこうむるもなをたうとく。益にあづかれれば。いよいよたうとしとかられたるは。理ふかしく感心せらる。惣じてかの随聞記には。ひろく三寶の靈驗ならひに善悪因果の報をしるさま。中について地藏菩薩の靈驗数條をえて。此書にあみ入ぬ。いはゆる混淪山にのぼらずして。自玉を得。錦官城に趣ずして。坐にしきを着がごとし。あに他の勞をぬすんで。己が莊とするの責をまぬかれる事をえんや。しかりといへども無尽燈を昏衢に分。有主財を窮民に施の例。なきにしもあらず。唯冀は地藏ぼさつの廣大不可思議の功德をして我々に告。世々につたへて。ひとしく無量の善願を満ぜしめん事を。これ我收拾するゆへにして。蓋又随聞記者の本懐ならんか



十一 同寺の住持非梵行によつて地藏菩薩擯出し玉ふ事

むかし此寺に悪僧の住持する事ありき。ひそかにかくし妻をかたみひてかよひけるが。ある夜本尊の阿弥陀如来と。件の地藏ぼさつと夢中にきらせ玉ひて。汝不浄行となしながら。當寺に住持せん事かなふべからず。速に出さるべしと。もつての外に呵責し玉ふとぞ見ける。ゆめさめて大におどろき。心おだやかならねど。出もやらずして日をおくりしに。そのちは夜な夜な地藏ぼさつ耳。きたらせ玉ひて。なにとてはやくさらねぞと催促し玉ふ。終は忿怒の相を現じ玉ひて。争かくく永居するぞ。□されよやよとたせ玉へる錫杖にて擯出し玉ふ。住持ゆめごちにせんかたなくおもひて。なくなく門外へ出ける。菩薩なをあとより追打玉ふ。あまりおそろしさにはしりにぐるとて。門前の石橋に躓たふれぬ。身少々うちやぶれ。つよくいたむとおぼして目さめてげり。さてかのやふれたみしとおもふところ。まことにいたみありけり。今は堪て住べくもおもはれずして。急寺をおられけるが。身の中瘡毒のごとくになり。後には熟柿などのやうに膨脹して。こみちながれ出。くさくけがらはしけるなりとてゆきけるほどに。いたくくるしみてやがて死にけり。まことに自業自得果の理。おそれつしまざるべけんや。夫本願經に又無間地獄の因果をとき玉へる中の第三に。もし衆生あつて寺の常住物をおしそなひ。僧尼をけがし。或は伽藍の中に。ほしいままに淫欲を行じ。或は殺害するのともがらと。又は第四にもし衆生あつて偽沙門となれども。心は沙門にあらず。常住物をやぶりもちひて。白衣を欺てぶらかし。戒律にたがひそむきて。しゅじゅに悪をつくり。かくのごときのもがらは。ならびにまさに無間地獄におちて千万億劫いん事をものとむとも期なかるべしといへり。又立世阿毘曇論に出家して破戒しながら。伽藍の中に行住坐臥すれば。熱灰地獄におちて。皮肉焦爛等の苦を受ととき玉へり。今此住持皮肉のごとく爛壞す。これあに生ながら熱灰地獄の苦をうくるにあらずや。現報すでにかくのごとし。後報の重苦。為にかなしむにたてたり。最我ともがらの鏡とすべきところにして抑止の法門かたくまいらずんばあるべからず。しかりといへども諸仏菩薩等慈悲の室□居して密に摂取の門をひらき玉ふなれば。たとひ重障悪業ありといへども。すてはて玉ふにはあらず。故に延命地藏經に。世尊地藏菩薩に告て。曰。我滅度の後。未來惡世の罪あり。苦ある衆生を。汝に付嘱す。今世後世良能引導せよ。彈指する頃だも。惡趣にをとさされ。いはんや無間阿鼻地獄にをとさんと。時に地藏菩薩佛にまうしてまはく。世尊。慮玉はされ。我まさに六道の衆生を拔濟べし。もし重苦あらば。我代苦をうけん。もししからずは。正覺をとらじとの御ちかひあり。されば此住持も御呵責の錫杖にすがりけり。前非を如法に懺悔し。一心にたのみけりなば。いかでか摂取の門に入玉はざらん。あにきかずや。地によつてたふるものは。地によつて起るといふ事を惜哉。この僧自をもあらためず。又他をも頼たてまつらず。むなしく接收の網にもれて。ながく業海の底に沈事をや。涅槃經にいはく。かの放逸のものは。仏をよび佛の弟子にちかづく事をうるといへども。猶名づけてとをしとすと。此これをいふか

## 十二 又同寺の地藏菩薩鼠をふまへ玉ふ事

近曾此寺の地藏ぼさつの御足を。鼠のすこしかぶりし事ありしを。寺の小僧これを見付て嘲ていはく。あらおかしや。自の難をだにえさせ玉はで。かくねずみにくはれ玉ふうへは。ましてよその願をば。いかでかなへさま玉はんやといひ。罰けるに。その夜かの御堂のかたにて。いたるねずみのなくこゑしけり。人々あやしみおもふ所に。夜明てこれを見るに地藏ぼさつの御あしの下に。鼠をひとつふまへさせ玉へり。目さめきてうづくたりいたるを。すなはちとりてはなちけり。衆僧も舌をふるひ。小僧もふかくおそれてさんげのかうべをたれ。信敬のおもてをあらためけり。まことに種々引入の御方便。たつとかりはる事どもなり

## 十三 三福寺夢見の地藏菩薩利益の事

洛陽寺町草堂の南。三福寺の地藏ぼさつは。人皇六十八代の御宇。後一条院の御母公。上東門院法名清淨覺尼の造しめ玉へるなり。その濫觴を尋に。皇后常に三寶に帰依し。分て地藏ぼさつを信じ玉ひて。寶号おこたらずととなへさせ玉ひける。然ども忍土八苦のならひなれば。玉□たちまちやまひにそませ玉ひつつ。紅綿繡のよそほひも。かえつて熱悩のくるしみをそへ。玉芙蓉の露も。むなく清涼の功をうしなへり。一人宸襟をやすんぜさせ玉はず。百官手足をおくにところなし。然るに皇后よのつね地藏菩薩を造立して。自他の結縁となさまほしくおぼしめされけるに。かくおもき御不例なれば。御願もむなくなるべきやと。御くるしみのうちにも。御ころにかけさせ玉ひて。すこしまじろませ玉へる御ゆめに。端嚴殊勝なる御僧一人きらせ玉ひて。后に告てのたまわく。我はこれ地藏ぼさつなり。后我を念ずる事ひさし此ゆへに今こに來現せり。もし我がすがたをうつさんとならば。すみやかに佛工に命じてつくりしめ玉へ。しからば后の病もいゆべきなりとてかへらせ玉ひめ。后ゆめさめてよろこびおぼしめす事かぎりなく。いそぎ佛師定朝に仰付られ。御ゆめの中におがませ玉へる尊容にかたどり。御長三尺の延命地藏の尊像をつくらしめ玉ふ。定朝すなはち尊命に應じてつつしみて雕刻しけり。をよそ二月半の日かずをへて。相好圓滿に出來させ玉ひめ。かくて後の御遺例も。もとかへらせ玉へば。御よろこびのあまり。諸人に縁をむすばせんが為に。東山宮の地とかやに安立し玉へり。かくて都鄙の男女ききつたへつ。随喜の信をおこして。結縁の袖をつらね。合掌の花をひらいて利益の雨にうるほへり。やふと微縁をもつて。巨益をかうめれる一事をあぐるに。そのころ安朝といへる名ある侍ありしが。もとより罪惡無道にして。專獵漁をこのみけり。式時獵のかまるさに。この堂にやすらひけるに。をりふし尊前の燈明きえうりたるを見て。なにとなくかかげたとをりけり。そのち安朝頓死して三日をへたり。眷屬圍繞して。なきかなしむといへども。さのみはいかでおくべき。いざはうむりな

んと議しける時。たちまちよみがへりつなみだをながしてかたりてはいく。我すでに冥使にとらはれ。是非なく引立てられてゆくところに。何共もなく牛頭馬頭の鬼卒ども。そのかずあまた現じ来て。此の罪業ふかき中にも。ことに殺生の罪ふかし。このゆへに。閻王我等に勅して。直に地獄へおとさしむ。決断所へつれたまふにおよばず。こなたへいたし玉へと。あらたにいひ叫て。角をふるひ眼をいからして。にらまへたるありさま氣も。魂もきゆるばかりなり。さすがの安朝も娑婆にの勇力利口もいで合ず。ただ前非を悔てこうべをさげ。手をすれどもかなはず。終に獄卒に引立てられてゆくに。呵責の聲。雷のごとく。十方にくるをりふし。後より錫杖の音をおぼへて。かすかに耳にひびくところに。獄卒この音をきひて。おそるるけしきあり。時に忽然として。比丘一人あらはれ玉ひて仰けるは。此のもの娑婆にありし時。我前にありし灯明を挑たる功德あり。我この微縁に乗じて今こに來れり。たとひ罪業おもくとも。般若の智火にて焼滅すべきぞとて。持玉へる錫杖にて追拂玉へば。繫繩の索もたちまち断。獄卒もあとかたなくけしうせぬと見てければ。かくおぼへず。蘇たるなり。まことにありがたきばさつの御慈悲なり。いかでまのあたり。かかるおそろしき事を見ながら。あだなるうき世のたのしみに着し。身口意の惡をほしめままにして。永劫のくるしみをうけんやとて。やがて發心して。剃髮染衣のすがたとなり。それより西国方を行脚して。ところどころにて。地藏菩薩の尊像を勧化し。造立して。皈信の心をかたふるも。これもとこの地藏尊に結縁せしゆへなりき。むかし仏弟子の阿那律は過去凡夫たりし時。かりそめに佛燈をかがげし功德によつて。遂に仏在世に出生して。あまつさへ天眼通を得られぬ。今本朝の安朝偶然として。其曲を同す。これ我鼓吹して讚嘆するゆえんなり。扱この地藏尊。いつのころにかありけん。今のところにうつされさせ玉ひつつ。ますます慈悲の手をたれて。迷狂の人を度し玉ふ。貴かりける事どもなり。

#### 十四 長栄寺の地藏菩薩賞罰厳重なる事

洛陽西陲一条大宮の通。長栄寺の地藏菩薩は。昔役行者の作とかや。もとより石像にてましまして。そのいにしへは道路のちまたにたたせ玉ひて。生死不淨の淤泥にまじはり。順逆結縁の深悲にくだらせ玉ふ。靈驗ひびきのごとくなれば。願求の人まあることなし。中にもそのあたりに住居せるものの妻。ふかきやまひにしづみて。服藥鍼灸その益なかりければ。さいはひこの地藏尊はまうで。偏に冥助をぞいのりけり。かくて日をかさね月をこえけれども。そのしるしもみえざれば。或時此尊にむかひけりて。はかなくもうらみ申しけるは。世間の人の上を見き侍るに。みなみねがひをかなへさせ玉ふ。しかるに我かくくるしき身をもつて人にもおとらず。あさゆうあゆみをはこび。一心をしたでいのり奉るに。いかでしるしを見せ玉はぬぞ。もし業病にてかなはせ玉はずは。片時もはやく命をつづめ玉ひて。極楽浄土へ引導し玉へと。両眼よりなみだをながして。又餘儀なくぞうつたえ申しける。かくてそのあけの日。かの女そのあたりなる糸屋町へゆくとして。

道にてあえなくたふれふしぬ。その心ねいれるがごとくにありし時。かの石地藏着来玉ひて。汝我をたのむ事切に。日月をかさねてつかふる事人にこたへり。我いかにもして。汝が病苦を抜て。壽命を延とするに。業障重ければ。おそかりつるに今は汝引かへて浄土往生をねがふ事しかるべき縁の熟せるにや。好此うへは汝がねがひのごとくに。浄土へ引導すべきなり。汝が命もけふ入相かぎりぞ。こころえよと仰らるるとおもへばゆめのさむるがごとくよみがへり。道行人も驚こちかふて。とかくいひあつかふうちに。ふとおきかへりていそぎ我屋にかへつて。はじめおはりの事ども。くはしく夫にかたりて。娑婆の名ごりもけふばかりなり。くれなば浄土の蓮臺にのぼらん事。まことにありがたきばさつの御はからひかなとよろこびて。世の中など心しづかにさたしをいて。くりをおそしとまちゐたり。かくてそのころになりしかば。沐浴して身をきよめ。佛前をかざりて供養し。端坐合掌して地藏の宝号をとなへ。入日とともに西にゆきぬ。まことに例すくなき往生人なりければ。諸人あつまり結縁して随喜の袖をうるほしけり。此事いまだひさしかねば。そのあたりにしかたるひと多とぞ。所謂即得往生の日輪は。信心清浄の寔に朗に。業事成辨の蓮花は。歡喜勇躍の浪に開とは。これをぞいふべき。誠に浦正しきりんじゅうなり。その後この事かたりつたへて。その女こそこの地藏ばさつの御告によつて。希有の往生とげたりと披露ありければ。諸人我さきにけちえんせんと。まいりつたふ事市のごとし。ちかきあたりのもの。はじめの程こそはあれ。後にはあなしかまし。この地藏ばさつをいづかたへかおくりけれとて。こころざしなき若ものども一黨して東賀茂河辺までにないもてゆきけるがここにて人のしるにこそとて。それよりふかく吉田山のうしろの野辺にすてかへりけるは。まことにあさましけりたる事どもなり。然れども梅の熏かくすところなく。月のひかりおほひとげざるならひなれば。人よくこれを尋て。したひまうで奉けるほどに。四季の花たゆる事なく。数逕の叢にも分たり。いつのころたれのしわざにてもありけん。又もとのところにかへりていまそかりける。人々ふしんしあひひて。とかくいひたりけねば。そのあたりにころある人これをみてそのままここにをこさたてまつりなば。無道の若もの。又いかなる曲事をかし出さんとおもひたれば。自身のやしき前栽のきよらかなるところに守入奉りてあがめをきぬ。そのうち或伝者あつて。ぜひに此者をこひたてまつりて。今この長栄寺に安置しぬ。その前の夜。かの寺の住持のゆめに人石像をもち奉りて。きたるよし見られたりしが。翌日はうらざるに寺へ入せ玉ひしかば。霊夢これなりけりと。大いによるこびて。請じ奉らる。はじめ此石像を吉田へおくり奉るといかがはしたりけん。道にてとりおとし奉りけるが。御むねにあたりすこしかたそんじさせ玉ひぬ。かくてそのうちおとしたる男のむねに。くさのやうなるもの出来て。灸治のあと程くさり入。それよりうみ血ながれて熱種のごとくになり。ひさしくなやみける後にはぢぎうばさつをそこなひなりけりたる御とがめにやと。くやみおもふうちに。長栄寺へ入せ玉ふよしきいてしけ□ば。いそぎかの寺へゆきて合掌恭敬して。至心にざんげし奉り。ひとへに御あはれみをこふ。かくする事かねて一七日を期するに。いまだその期のみたざるうちに。かのむねのかた。あとかたもなくいへにけり。見聞いよいよ耳目もおどろかす。誠に賞罰の嚴重なる事。それ尊信せざらんや

一 蓮台寺の地藏菩薩僧の病をいやし玉ふ事

洛北千本上 品蓮臺寺の地藏菩薩は。むかし聖徳太子諸人のそりかみをあつめさせ玉ひて。自香泥に相和して。結縁濟度のためにつくり玉へる尊像なり。さるによつて。靈感掲焉として。感應の月あまねく信心清浄の水にやどり。悲願の華。すみやかに福智圓滿の菓を結。誰か尊崇し奉らざらんや。ここに俊證といへる法師。元禄二年きさらぎのはじめより。癆症のごとくにわずらひつかれしが。身体日々にをとろて。藥物その功をうしなへり。中にも法のむすび。ことにしたしき錢海法師つねに入來てとひなぐさめけるが。御ありさまを見て。いたくあはれにおもひ。ひそかに此地蔵尊にまうでて。快復の慈愍をいのりてけり。かくて五月廿五月初夜のころ。北野天神へまうでて。法施などささげ奉りて。俊證のやまひすみやかに給ねはれと。祈願してかへりぬ。しかれども。これぞ感驗ならんとおぼしき色もなくて。ただしだいに焦悴して。今はたのみすくなく見えけり。かくて七月二日のあかつき錢海のゆめに。とある宮地にいたりぬ。木立ものふりていとしんしたり。これぞ天神の社壇にてあらんとおもひてければはしたなく願望のかなはざる事をうらむる心出來て。日ごろはつねにうたよむ事もなきに。ふともひ出てかくなん

このたびはぬさもとりあへず手向山

神のちかひもくちやしぬらん

と詠じけるに。たちまち前にうかれる御簾のうちより。蓮臺寺の地藏尊とおぼえしが。現じ出させ玉ひて。けたかき御聲にてたからかに

このたびはぬさもとりあへど手向山

かぎりある身をたすけたすくる

とあそばされて。汝神明をうらむる事なかれ。かの僧は家に縁のものなり。このゆへに我かれを守護して。すつる事なしとの玉ふ御まなごさし。つねにおが奉りしよりは大にして。ますます威靈に見えさせ玉ふ。錢海ふかくおそれ入ながら。よのつねころにおもひこめし事ども申あげんと。御袈裟のすそにとりつき奉らんとするに。はや御簾のうちへいらせ玉ひぬ。心肝にそみてありがたくおもひて。礼拝し奉るとするうちに。やがてさめぬ。これより俊證日にそひてころよくなりもてゆきて程なく本腹しけり。錢海法師と相ともにかねて宿願の事ありて。つりがね一口を鑄て奉り。朝夕。聲塵性空の風にひびうせて無明長夜のねふりをさま



さんとおもはれけるに。はからざるやまひにそみて。事延引に及しが。今時いたりぬとよろこびて。ともに相議してすすめられけるほどに。衆縁たやすくとくほりて。ことし三月廿四日のあつき。洛北千本にて。かねいの功さはりなく成就しき。これひとへに地蔵尊の冥加によれりと。かんるい袖をうるはせり雨も又前の日廿三日に。随喜結縁のために。蓮臺寺にまうでけるをかふし。地蔵尊がいちやうあつて。衆人にえんをむすばせらる。希有の勝縁にあひぬるにやと。よろこびちかづいてなし奉に法界定印の上に。寶珠をすへさせ玉ひぬ。御錫杖御づしのうち。右のほうに立ちけり。威嚴の御相好にたまはせば。諸人恭敬のてい。今一しほあらたまりぬ。従地出現のむかしの例おもひ合て殊勝なれ。そもそもこの鏝海法師のゆめの事。ふかくつつみて。ひろくは語れざりけれど。いんえんあるがゆへに。かはりよりもれききぬ。さればかくしるしにつけて。はばかりあれど。地蔵ぼさつの衆病悉除と。寿命長遠との兩願。現にその證いちじるしき事をあげて。人の信をすすめ人がために。もだしがたくてここにのせ侍りぬ。但秘するも。現も。をのをの理あるべきか

## 二 千本地蔵院の薩埵女人の病をなをし玉ふ事

又、千本の別院。地蔵院の本尊は。行基菩薩の御作の薩埵。靈驗のきこしましまして。求願の輩絡繹たり。ここに元禄のはじめ辰のとし。京西六条の地内それがしの妻女。日ごろ腰のいたみなんわづらひて。たち居も自由ならず。内療外治のしるしもなく。ひびにとろへ。夜々にくるしむ。かくて此院のぼさつのすべれ玉へる靈感おはするよしを聞えよび。はるかに帰命し奉りて。立願しけるやう。ねがはくは地蔵ぼさつ。大悲の御ちかひむなしからずは。速に我このくつうをいやさせたまへ。しからば女三日四日には。月ごとに。みありしをくよう奉りなんとちかひて。それより毎日當日には。かならず燈明をささげ奉りぬ。やうやく＊をかさねておこたりなくつとめけれども。さしてしるしも見えざれば。凡心のあさましさは。よろしくかこち奉るころぞおこりける。すでに又廿三日になりたれば。いつものごとくに。燈明をともにとて。かくばかり心をつくしてたのみ奉るかいもなく。腰のいたみのくるしさよとおもひながら。ともしびをてんじけるが。その夜のゆめに。かの院のちぞうぼさつきたらせ玉ひて仰らるるは。汝が病氣宿業おもければ。すみやかにしるしなし。さりながら他念なく我をこのむ事のお便なれば。業をてんじえさするなり。いまよりのちは。身体あんおんなるべしとの玉ふと見てゆめさめぬ。おどろきいそぎおきあげれば。行歩もとのごとく。すこやかにして。このいたみ平愈しけるとなん

## 三 休努寺の地蔵尊縁起 付病を祈て愈事

洛陽大宮錦の小路。休努寺の小堂にたたせ玉へる地藏尊は。定朝の作とかや。ちかき中条ほり河あたりに正勝といへる信男あり。多年地藏尊に帰依して。香花供養の誠を抽。寶號薰修の功をつめり。この人つねにねがへるは。権作の地藏の尊像。大に破壊し玉ふをもとめえて。衆縁をつのりてこれを修補し奉り。ひろく現當の善縁をむすばんと。かくてとし月を過しけるに。或夜靈夢をかんずる事あつて。そのち定朝の作大破し玉へる尊像をふしぎのいんえんによつて請じ奉りぬ。ここにをゐて。志願のごとく。十方人講をむすびて。再興したてまつらんとするに。信男信女そのころざしを感じて。我も我もとそのけうにくはしりける程に。つるにおもひのままに莊嚴し奉り。剎堂の建立まで。事とくのほりてけり。これひとへに信願の感ずるところ。見聞随喜せずといふことなし。ここに佛光寺通岩神辺に若干年より難治のやまひをえて。すでに中年にいたるまで。種々の醫療をつくすといへども。更に應驗のいりもなく。所々の祈禱を修するといへども。いかなるゆへにかその甲斐なし。いまは世にたるざだにもものうくなりて。月花にもねむりがちなり。さしあたる身のくるしさに。ゆくすえの事などおもひなげきて居たるところに。地藏ぼさつの悲願ことに餘のぼさつよりもすぐれさせ玉ひて。一切のねがひをすみやかに見て玉ふなど。人のかたるをきいて。さらば我やまひもいのり奉らんとおもひそみて。すなはちこの十万人講に入て。ひたすらに地藏ぼさつの寶号をとなへ奉りしに。痼疾などもなくいへて。すこやかに。なりけり。枯木のふたたびはなさける心ちして。よろこべる事かぎりなし。それよりいよいよ信を地藏尊にあいうして。二世の導師とたのみ奉ぬ。夫十輪經にいはく。弥勒文殊。普賢等を上首として恒河沙のころをかの大菩薩を。もし人あつて。百劫の中にをゐてはいはいくようし。所願をもとめんよりも。しかじ一食のあいだにをいて。地藏ぼさつをらいはいくようせんには。くどくはなはだおほく。ねがふところすみやかにことごとくみなまんぞくする事をえん。なにをもつてのゆへに。地藏ぼさつは。一さいしゆじやうにをいて。よく大に饒益して如意の寶となり玉ふがゆへにといへり。又本願經に堅牢地神。佛にむかつて。地藏ぼさつをさんだんして云。この地藏ぼさつ摩訶薩は。もろもろのぼさつよりも。誓願深重なり。世尊このぢざうぼさつは。閻浮提において。火なるいんえんあり。文殊普賢觀音彌勒のごときも。また百千のかたちを化して六通を度し玉へどもその願なを畢竟あり。この地藏ぼさつの六道一切の衆生をきやうけせんとおこし玉ふところの誓願劫數。千百億恒河沙のごとしと。佛意はかりがたし。ただ仰信すべし。なんぞ疑難をその間にいれんや。今この病夫あからさまに人の讃揚するをきき。慕直に信受して。忽に利樂をえたり。これその現證とすべきゆへなり。又夫正勝の願望をいはば。本願經にもし未來世にもろもろの国王より婆羅門等にいたるまで。先仏の塔廟あるひは形像經。卷のそこねやぶるるにあふて。いましよく心をおこして修補せん。この国王等或は自いとなみ辨じ。或は他人乃至百千人等をすすめて布施し結縁する事あらば。この国王等百千生の中につねにてんりんわうこの身とならん。かくのごとき他人。同布施するもの。百千生の中つねに小国王の身

とならん。さらによく塔廟の前にをいて。回向心を發ば。かくのごときの国王。いましをよび諸人ごとく佛道を成ぜん。この果報無量無邊なるをもつてなりと。又像法決疑經に。新をつくらんより。故を修せんにはしかじといへり。かかる善巧方便したはしき事にこそ

#### 四 地藏の引導によつて 再 蘇 ぬる事

去る寛文年中に猪熊通四坊門のほとりに。當座それがしといふものありけり。このもののひととなり。暴惡無慚のころにて。母一人ありけるにも。つねに不幸にして。悪口罵辱する事。奴婢をつかふがごとし。加之淫酒にふけり。肉食をこのみて。あらゆる惡業いたらざるところなし。或時酒に酔なやみて死しけり。然れどもそのはだへまだあたかなければ。いまだほうむらずしておきけるに。三日の後大音にて。念仏二三返申ければ。人々おどろき。いそぎよりて見れば。すなはちよみがへりけるなり。扱かたりけるは。我たちまちひろき野原にいたりけるに。いづくともなく大なる男二人出来て。無手ととらへぬ。こはいかにと見る所に。そのかたちおそろしくして。獄卒とおぼしきものなり。是非なくおつたてられてゆくに。はるかに來ぬらんとおもふほどに。かしこを見れば。閻魔王宮と見えて。すでにその門内に入に。大王すなはちそこにおはして種々に呵責し。生前の惡業どもをとき玉ふ中に。汝江戸にありし時。鶏を二ころせりと玉ひつるに。それは違て候。一羽ならではころし候はずと申せば。その事なり。孕たる雌をころしつるゆへに。その卵とともに二なりとの玉ふ。その外の惡業ども。少々陳ぜんとおもひたるに淨頗瓊の鏡とやらんと出して見せ玉ふに。一生以來なしける事ども。露たかふところなく。ことごとく現じければ。言なくして泣居たるに。大王その時獄卒に命じて。鐵のまないたのうえにふさしめ。利劍をもつて三段にきりはなせり。そのつるぎうすく利事。かみそりの刃のごとし。さて三段の身。みないたみをおぼして。くるしき事たとへんかたなし。又外に一人の我身ありてかの身のきらるる時かたはらにあつて。大いになしむ。かくのごとく扶の身にあつて。ともにくるしみをうけたり。かくてそのあたりを見まはすに。獄中の罪人。いく千万といふかずをしらず。その中にとりの大工なにがしも見えつるなり。さて我身かく三段にきりはなせりといへども。又もとのごとくに一身となりて。別の身もなし。獄卒どもはなちすてたれども。ゆくべきかたもおぼえず。十方にくれてたちゐたるに。いづくともなく。沙門一人きたらせ玉ひて。こなたへと仰せられつるを。よくよく見たてまつなは。わが仏壇にあんちし奉ぬる地藏ぼさつなり。うれしくおもひて。御うしろにつきてゆき奉るに屋のかたはらに餓鬼界かとおぼしくて。異類異形のがきども。種々のくるしみをうくるありさま。あはれなる事どもなり。その中にひとりの餓鬼。ほそくながきはしをもちて。地にこぼれて見えし大豆をひろふに。手はやせがりてたよりにて。箸はきはめてながし。ひろはんとするに。自由ならず。からくしてたまたま一粒をはさみえて。おとさん事をおそれて。そろりそろりあけて来て。やうやう口をさしつけんとするに。やがてをちぬ。うらめしげに

なきもたへて。いとど飢渴をましけるありさま。目もあてられず。かくして又まへのごとくひろひあげてはおとし。おとしては又はさみあぐ。ついに一粒をも口へいるを見ず。あはれをもよほして行過るに。はるかにへたてて。七寶をもつて。莊嚴せる一つの御堂あり。中に又金銀珠玉をかざりなせる須弥壇あり。光時赫奕たれども。佛像はおはしませず。時に我ぼさつにとひ奉る。これはたれ人のつくり玉へる壇にて候や。いかなるゆへに佛像はおはしませずやと。ぼさつ仰らるるは。これは汝在世の時手づから造。祖師にくやうしたる須弥壇なり。くどくあらはれて。ここにあるぞとの玉ふ。扱御堂のわきのかたへめぐりゆきて。縁の上よりはるかに下を見おろすに。ほとりなき大海なり。しかも小舟一艘うかみたり菩薩仰けるは。汝あの船へとび入べし。然らばふたたび人界にかへらんずるぞとの玉ふ。されども海はとをく舟はちいさし。いかでのうえ申べきとて猶預しけるに。唯とふべし。我まもるがゆへに。あやまちはなにぞとの玉ふ。さあらば御いとまごひに御十念をとこふに。すなはち十念玉ひぬ。時に我かうべを地につけ手を合てうくるとおもふほどに。かくよみがへりたりとぞかたりける。さればそのよみがへりし時となへたる高聲念佛ぞ。地藏ぼさつのさづけ玉へる十念にてやありし。さてかのぢごくにて見たるといふ。となりの大工は此人のいきたてていけるあいだに死にけるものなり。又須弥壇といふは。寺町安養寺の善導大師の影像へ雕造してくようしけるなり。今現にその壇にのりてましますなり。かの持佛のぢぞうぼさつといひしは。恵心僧都の御作にて。御長二寸ばかりの木像なり。そののちかの母法各清心といへるが。さいかうし奉りて。恭敬供養せられけり。此おとこは。もとより無屋にてころざしもなかりけるゆへさして常にくようし奉る事もなく。皈依のころざしもなかりしほど。家内に安置し奉りしかばかりの小縁によつて。かくあはれみをたれて。導玉へるなるべし。まことに深悲のいたりこそかへすがへずもありがたけれ。然るに此もの面かくのごとく善惡の二報のむなしからざる事を見るといへども。宿縁つたなきゆえにやありけん。さして信心のおこる事もなくて。母にていとど不孝にあたりしが。多年の後病死しけるの葬送のをりふし。俄に雲おこりて。大雨ふり。雷電する事おびただし。さてこそ日ごろの悪行天の譴今あらはれぬ。いかなるうき目にかあらんずらんと。おもひやられてあはれなりと時の人申あへり

##### 五 地藏菩薩の御すすめによつて。念仏となへ病愈事

或浄土宗の長老のもとにつかはれし。わかきおとこ。さんぬる。貞享元年此春。すこし風氣をわずらひけるが。ある時俄に。熱氣はなはだしくなり。こうべわるるがごとくいたむなりとてくるしめり。次第につよくなりてたてているばかりに見ゆ。をりふし長者他行にて。同宿の僧のみ一人付居たりしが。山里のかたはとりなる人どをきほりなれば。せんかたなくて心しづかに念仏をすすむるに。此男はじめの願は。おもむろにとなへ居たりしがにはかに大音になりて。しきりに念佛しけり。熱氣またまたさかんになりて。眼の内はなだあかくして。汗ながるる事瀧のごとし。ねながら両足をたがひにもむ事。たかきところののぼるがごとし。くるしみせ

まつて。なみだをながし。急に佛名をとなへけるが。ふとたつて。おび引しめ。はしりいでんとす。看病の僧これを引とどめて。いかでかくはするぞとふに。我今浄土へゆくなり。念珠をなはれといへば。すなはちあたけるに手ふ浄なり。手水すべしといふ。病中なればくるしからぬぞといへども。もちひず。かくて此僧庭へをりて。水をくむに。まちかねて大いに叫。その怒々しきいて。このくるひのごとく。僂言罵辱して。よのつねとかはりそろはぬさまなり。かくて手水し念珠もちしかば。引ふせたりしに。ふしながら身首をうごかし。たなごころを合て。口ばやに念仏する事。ややひさしうして後。たちまち面をあふげて。こは庵室にてありけるかとおどろきたるていなり。しばらくありていかにとふに。かたりていふやう。我ねつきにくるしみてづらつらとね入やうにありしが。やがてふかき井のそこへおちいるがごとし。その中はみな泥なり。そのあつき事わきかえりぬ湯のごとし。のぼらんとするにかなはず。ただ下へのみしづめり。すべて闇夜のごとくにして。両目見るところなし。くるしき中にもおもひけるは。これはこのごろ貴僧のよみきかせ玉へる。往生要集の中にありつる。尿泥処とかやいへる地獄なるべし。たとひうるところにちても念仏だに申せば。うかむなりとの玉はせ玉ひつるものをとおもひて。一心に念佛しけるに。かたはらにすこしあなのありけるよりのぞきて見れば。井の外とおぼして。ひろき野ばらなり。あけぼのなどのやうに。おぼろにあり。ここに袈裟を着し。錫杖をもち玉へる沙門の御長たかきが立玉へり。われにむかつての玉はせけるは。汝はやく念仏申せ。これはまさしくちごくにてあるなり。さりながら念佛だに申渡ば。すみやかにいづるぞ。なんぢいまだ死期いたりねば。まづこのたびは。人界にかへり。随分修行し。又親兄弟をもすすめて。ぼだいの通に引入れよとの玉ひしかば。ありがたくおもひ奉りて。念仏申けるに。いかに聲をあげまして。きうにとよ。さあらばはやくうかぶべしと仰ければ。その時聲をかぎりとなへけるほどに。かのどろに中よりぜんぜんにうきあがり。やうやく井のはしちかくなりければ。念仏とともにおどりあがるとおもひて。目をひらき見すに。庵室にてありしなり。さてさて奇特不思議の事かなと。自かんたんしけり。さてかの或ははしり出んとし。念珠手水などこひし事は。すべておぼへずといひけり。この沙門といへるは。うたがひもなき地藏尊なるべし。もとよりこの長老當度の仏壇に地藏ぼさつの小像を安置しおかれけるが。このごろこの男佛壇のまへにひざまづいて。低頭合掌しける事ありし。かかる微縁に乗じて。かくをしへみち引玉へるならんかし。まことに利益衆生の心あらんには。仏ぼさつの形像。金銀銅鐵土木彩畫をろんぜず。大小分に随て。これをつくり。多所々に安置し。ひろく家々にほどこして。けちえんさせまほし。殊にちぞうぼさつむかし冥途にをいて。満米上人につげたまはく。我衆生にをいて。平等の大悲をおこし。苦に代すくはんとおもへども。えんなき衆生は度しがたし。上人ふたたび人間にかへりなば。諸人に此事をかたりて。我に帰依せしめよと。かくて上人蘇生してくはしくこの事をかたり。地獄にて。見奉りし御すがたをうつして。安置し玉ふ。今の矢田寺の尊像これ也。はじめおはわりのくはしき事は。元亨釋書並びに地藏菩薩靈驗記等にするすがごとし。又ちかきころ。東山にある僧の絶入しける時も。ちぞうぼさつの導玉ひて。しやばにかへりなば。おほく我像をつくりて。衆生にけちえんさせせよと。しめし



玉ひしなりとて。すなはち千躰をつくりて。靈山寺に安置せられけり。かの御告のやうもかきつけて。今にかの寺にのこりぬ。古今その例すくなからず。むしろきくまにそれおこなはざらんや

## 六 地藏菩薩伶人の魔障に□(註一逢)を拂玉ふ事

京都に堪能の聞ある伶人あり。よのつねふかく地藏尊に帰依して奉りて。金色の像を修造して。供養しけるが。貞享三年正月禁中節会の舞。例にすぐれて。はなやかなりしかば。上下讚美の声耳にみえて。面目の色掬しつべし。かくて四五日の後此事を思ひ出て。當世の舞樂。恐は。我なでは誰あらんやと。自慢心をおこして。ねむり入けるに。ゆめともなくうつともなくて。天井に大なる穴あきたり。その中より毛生たる長足出たり。次にたてを出し。つづいて惣身を出して。下へをり立たり。こはいかにとおどき見るに。その長天井にひとしき大の法師なり。この法師。伶人にたちけりて。いづくへかつれゆかんとす。伶人怖畏の心おこりて。ゆかじとあらそへども。かの法師事ともせず。やにはに引立れば。いまはちからなく。いかげんとおもふうちに。つねにとなへつけたれば。南無地藏菩薩と数返となへけるに。こゑの下よりいづくともなく。錫杖の音きこえて。たちまち菩薩來現まし我ここにあるうへはいづくへかやるべきぞや。こゝあゆみすく思べしと。力をそへさせ玉ふ。ありがたくおもひて。拜したてまつるに。すなはちつねに念じ奉るところの金色の地藏菩薩なり。伶人ますますこころつよくなりて。しきりに御名をとなへ合掌しけるに。地藏尊もたせ玉へる錫杖をとりのべて。かの法師が上へさしつけてふらせ玉へば。かの法師けすがごとくに。ゆきがだなくうせぬとおもふとさめけり。さめて後もなを手を合ていたりとぞ。按に夫世間かりそのの技藝だに。一念の慢心をおこさば。かくのごときの障礙あり。いはんや出世の大法にをいてをや。首楞嚴にいはいく。自すでにたりぬといつて。忽大我慢おこる事あれば。大我慢の魔あつて。その心腑に入と。涅槃經にいはいく。一切世間は。もとよりこのかた大慢を具足す。故に常樂我淨をうる事あたはず。もしもろもろの衆生一切煩惱を遠離する事をえんとおもはばまづまさに慢をはなるべしと。こゝをもつて法華の會座には。五千増上慢の比丘を退。華嚴の説相には。十種障菩提の魔業を列。其慢心を對治するにいたつては。大般若に界別觀を修せしめ俱舍論には。無價駄婆と称ず。これ併ぼさつ平等の法に入て□。慈悲の行にくだれるなり。又夫淨土教にをいても。勞慢をもつて往生のさはりとせり。法然上人のいはく。常に勇猛精進に。念佛の功相つむといへども。憍慢の心によつて。臨終の時。魔の為に便を得しむるの人。これいはゆる往生とげがたき機なりと。しからばすなはち自他大小。いづれか慢を制せざるや。然に我輩おろかにして。他の天魔のさはりをのみおそれて。その天魔を引入ゆえんの自己の慢心を滅せず。たとへば外の賊をおそれるといへども門をひらいて安眠し。しかも盜を引入するの徒党ある事をしらざるに似たり。ぬすまれざらん事ほつすとも。あにそれ得べけんや。

内の賊といふは。なんぞ。所謂七慢なり。七慢とはいかん。一には慢二は過慢。三には慢過慢。四には我慢。五には増上慢。六には卑下慢。七には邪慢これなり。又いはく四魔也。四魔の中。一には天魔也。餘の三は。五陰魔。死魔。煩惱魔。これ内の三魔なり。故に大品經にいはいく。内に邪の三毒あれば。外に神鬼魔を感ずと。故に元照律師のいはく。凡夫道を修するに。内心ただしからざれば。必魔のさはりにあふ。もし心しんじつなれば。魔よくなす事なしと。これ家内賊をさがし出に臟證明白なるをもつてなり。今因に童蒙のために。略問目をいだすのみ。その決擇底にいたつては。世上幸に諸宗の善知識います事あり。但夫かの樂人は平等觀をこらすにいとまなく。内の魔黨をくじくにあらざれども。ひとへにぼさつの加被力によつて。あやうき魔境をのがれたる事。蓋地藏菩薩の宝号は。無量の功德大悲の所成にして。一切諸法の所依所なり。故に我慢のみのためには。無我觀となり。乃至邪慢のものためには。正觀となり玉ふ。故に十輪經にいはいく。もろもろの天魔を降する事は。大龍象のごとく。煩惱の賊をきる事は。なをし神劍のごとしと。これをもつてこれを見る時は。至心にかの宝号をとなへて。一心に帰依し奉らば。外魔内賊何のところに手脚をつけんや。これ伶人ののがるゆえんにして。我ともがらのたのみたてべきところなり

#### 七 地藏菩薩を盜とりて又かへし奉事

下の醍醐に素尊法師といひしは。もと當山の房衆なりしが。ひそかに籠居してつとめ行れける。その人のもとよりに。御長三尺ばかりの定朝の作なる地藏ぼさつおはします。ある夜盜賊や。ぬすみとりけん見えさせ玉はず。あまねくたづねもとむるに。そのゆきがたもとしれざりけるに。翌日人あつて。自此像をおひまいらせてきたり。懺悔していひけるは。我此尊像をぬすみまいらせて。すでに宿所にいたり。おろし奉らんとするに。はなれ玉はず。さまざまとなし見れども。すべて背につき玉へば。今はせんかたなくもとのところへつれゆきとのしめしにこそと。おもひつけて。ぜひなくこれまでおひ来り候ぬとて。そこにおろし奉れば。そのままたんの子細もなくおり玉ひぬ。ぬす人いよいよおどろき。とかくすれどもをりさせ玉はぬ地藏尊の。ここにはかくたやすくをりさせ玉へる事の不思議さよとて。手を合て。感嘆し。慚愧してさりぬ

#### 八 南都地藏山の事 付種々奇瑞事

南都のあたりに。町中路辺に。石佛おほくましませり。中にも大かたは地藏ぼさつの形像なり。これは本むかし。松永弾正二上が巖に城をかまへける時。石佛をあつめて石垣としたりけるが。城没落の後散在したるを。不信愚昧のともがら。とりはこびて。心のままに用けると也或は石橋にかけ。又は礎となし厠のほ

とりちり塚のわたりをもしからず。狼藉なるてい。見るにころをいたましめ。ゆくに足はやめり。ここに菖蒲池称名寺の長老。道心ふかき人なれば。いたく此事をかなしみて。あまねく有縁につげすくめて。この石仏をあつめよせ。寺内に山をつき。尊形まつたからぬをば。山の中へつきこめ。相好えんまなるを。山の上にすへら奉りて。恭敬供養せられけり。貞享二年の春のするよりもよほして。そのとしの秋のはじめに切おはりけり。そのあひだ信心の道俗随喜して。これをもちはおきて。おさめ入奉り。富家の妻女などは。ひるはさるが面はふければ。よなよな自いだきささげて。おくり奉り。まことに殊勝の結縁なるらじ。かの佛心建立の間。奇瑞又一にあらず。且一二をあぐるに。ある在家の庭碓のかたはらのかたき地より。俄に水わきおほく。ほどばしりながらきたり。いかなる事にやと。家にぞつて。立より見るに。次第につよく涌かへりて。ついにからうすの男ばしらを倒たるを見れば。一具ともに石地藏にてましませり。各おどろきおそれて。すなはち。称名寺へおくりければ。水も忽わきやみけり。又或者道をとほりけるに。溝川にかけたる石橋を見て。これももし石仏をもちひたるにあらずやと。うたがひながら。うちすぎ程なくたちかへりたるに。うちかへりておはせしなり。人のなしたるにあらず。自はねかへり玉るにてありし霊像にておはせいうへ。ことにふしぎを現じ玉ひしかば。いよいよたうとく信をとりて。かの寺へおさめぬ。又ある家の門前の小ばしに。殊にすみしき仏像のありしを。あたりのものこれを見て。あら勿体なや。いそぎかの寺へおさめ入れよといさめけれども。このもの本願寺衆にて。さやうの事は。我さにはもちひぬなりとて。かつて承引せず。かたつて我慢をおこして。いとどあしくふみいやしめけり。かくて菖蒲寺の仏山も出来して。供養の説法せられけるに。長老まず石仏の因縁を講演して。地藏ぼさつの利益をのべられ。後に松永弾正この石仏のついでの上にて切腹し。むなしくなる事自業のなすところといひながら。ひとつは三寶をうやまはず。かかる僻事せしによりて。現罰をかうふりしなり。いまとても此善縁にもくみせず。邪見をおこして石仏をあしくせんともがらは。松永がごときのよからぬ死をいたすべき事。うたがひなきのよし。言をはなつて。申談ぜられけり。をりふしかの石仏をはしにしておきたりしものいかがおもひけん。その座につらなりて聴聞しけるが。心にかくりて無臭氣に退出しけるに。その翌日。新婦なりけるわかきをんな。なにのゆへもなく。自腹をかきやぶりて死にけり。ここにかの男大におそれおののいて。いそぎ石仏を称名寺へくりざんぎざんげして。悪口をひるがへしけるとぞ。末世とはいひながらかかる奇瑞のあるなれば。もつとも信敬すべき事にこそ

## 九 東大寺文使の地藏の事

又東大寺の内に文使の地藏とて。おはします。これはむかしあるむすめ。いとけなきとき。母をむなしくなして。あまりのかなしさに。この地藏ぼさつへまいりてねがはくは母の生処をしめし玉へといのり申けるがあまりにたへかねて。文をかきてもつてきたり。地藏ぼさつは常に冥途にかよひ玉ふと申せば。この文を母のもとへ

とどけさせ玉ひて。返事とりてたべかしと。なくなくなかの文を地藏尊の御手にゆひつけてかへりぬ。つぎの日あさとおきてまうで見けるに我文にはあらで。こと文をもちておはしけり。いそぎひらいて見るにきのふのかへり事なりうたがひもなき母の手跡にてありければ。かのむすめ弥あこがれて。なきもだへけるとぞ。まことにおきな心のつくろはめ孝心といひ。邪智なき信心といひ。あはれにたうとくて。そぞらのすみぞめの袖をぬらし侍りぬ。かの文も今にありとききし我等なまじいに。聖教のをもきいましめをきく。父母のふかき恩をわきまへながら。かく仏にいのり奉りて。その生処の善惡をとふまでこそなからめ。せめてまことの心よりなきあをととはん程の志。などおこらざるや。本願経にいはく。おさなうして父母兄弟もろもろしんるいなどにはなれひととなりて。その生処をしらんとならば。地藏ぼさつの像をつくり。又はゑかいて悲戀瞻禮してしばらくもすてず。三七日の中その御名を念ぜば。菩薩まさに無邊の軀を現じて。その生処をつげ玉ふのみにあらず。たとひ惡趣にありとも出離せしめんとなり。又十王経にいはく。もし母のをしへにしたがふものは。みなこれ地藏の身なり。慇懃に悲母を化して。願力自在なるがゆへなりと。ことにいはんや地藏ぼさつの因位聖母たりし時も。至孝をもつてのゆへに。覺華定自在王如来の示現を感じて。亡母の生処をしり。ついにその母の苦を轉じて。解脱をえせしめ。あまつさへこれによつて。菩提心をおこして。今地藏ぼさつとなり玉ふ今この幼女偶然として。痒処に触著す。宜哉その感應のすみやかなる事や。梵網經にいはく。孝順は至道の法なりと。孔子又孝を賛して至徳要道とす。世出世の法其只孝也

#### 十 岸和田天性寺地藏尊靈驗の事

泉州岸和田天性寺の地藏菩薩は。いかなる人の作といふ事をしらず。人皇九十五代後醍醐天皇の御宇建武年中に。楠河内判官正成。此国を領ず。時に舍弟和田泉守正氏此城に居住せり。そのころこの尊像海上より蛸にのりてあがらせ玉ふ。それによつて此里人蛸の地藏を名付奉るその後うちつづき。国々兵乱蜂起して。万民手足をおくところなければ。三寶を尊崇する人まれにしてふ道のやからおほかりけるにや。此尊像を城の惣堀の中へしづめ奉りぬ。此事しらずもやありけん。たれとりあげ奉るものもなくて。むなく月日ををくりけるに。そのち小出大和守居城の節。かの堀の中より金色のひかりさして。城中をてらせり。諸人心目をおどろかしいかさまこれはゆへにあるべし奇異の事かなといひ罵ける程に。大守も今はもだしかねて。さらばほりの水うへにて見よとて。人夫をかけて換させられけるに。此地蔵菩薩こそあらわれ出させ玉ひけりさては此尊のはち玉へるひかりにてあめれとて。君臣とともに行をとつて。すなはちかの堀のあたりに。小堂をしつらひて。安置し奉らる。それによりしたは。かの光明をささざりければ。諸人いよいよ信服して。渴仰の心をかたふけてげり。其後感應あまたの中に。わきてあらはにふしぎなるは。一ころ根来雜賀の者ども一黨

して。この城をせめんとておしよせ稻麻竹葦のごとくうちかこみ。鯨波やまをうごかし。戈鋌目にかかやきて。敵みかたがひに骨をくだくところに何ともなく大の法師一人。忽然とあらはれいで。鐵棒をもつてさんざんにたたかへり。寄手これをおつとりこめて。大刀薙刀にて。わたりあひ。我からとらんとひしめけども。蝶鳥などのごとくに手にもたまはず。さんざんにおつちらさま。敵又はせあつまりとてうちよすれば。又この法師いづくともなくあらはれ出て。千変万化。神力自在に見かければ寄手もふしぎの思をなし。今ははや責あぐみければ。をのを一まづ引とらんと評定するに。中にも又すみ出て申けるは。このごろ度々の合戦。白昼によすればこそ。かかる法師にふせがれぬ。いざや暗夜にしのびよりて。一夜討して見んといひけ。此議もつともなりと同じて。或夜のびしのびに城ちかくおしよせて。□をどつとつくりけるに。城中周章。弓にやりにとひきしめきて。上へ下へとかへしけるうちに。たれとはなく城中におなじく鯨波あはすこゑ。いかづちなどのごとくにして。又櫓々より手々に百千の松明をなげ出し。弓箭兵杖を帶せし武者。いく重ともなく立かさなりて。たのふるがごとくに矢をいかけければ。寄手案に相違して。かかる大勢のこもりて。しかもかくきびしくふせげんにおゐては。身方いかで勝利をうべきといふ程こそありけれ。我さきにと引しりぞきて。とかく此城賣落ん事はかなふまじとて。をのをの本所へかへりける。かくて城内にはおもひもよらぬ軍にうちかちぬる事。これただ事にあらず。いかさまにも地蔵ぼさつの冥加あらせ玉ふにこそといふやから多かりければ。城主もさにこそあらんずらめ。とかくまづかの堂へまいりて。礼謝し奉るとて。軍卒とともにいそぎかの地蔵堂にまうで。尊容を拝し見玉ふに。こはいかに多の矢を射たてられさせ玉ふのみならず。鉄炮のあと又かずもなし。さてはうたがひもなく。この尊の慈悲加祐し玉ひぬるにこそとて。をのの感涙をながされけり。城主はことに此御ありさまを見て。心肝にそみてありがたくおもはれ奉れば。供養恭敬のまことを拙て。それより當城の鎮主のごとくにあがめ奉てさつられけるとなん。かくて根来雜賀も羽柴秀吉公のためにうちおさめられて。日ごろの強毅もやみてければ。當国の人民いよいよ安堵のおもひをなし。ひとへに大士の餘光なりとて感喜のひをかたふけけり。そのみち松平周防守在城の時。いささかゆへありて。この地蔵堂を近村池の尻といふところにつさる。かくて星霜としふりて。靈像もややくちそんじさせ玉ひ。堂宇の破壊になんなんとす。ここに天性寺の開山得誉上人は。質直正信の人なりけるが。かかる靈像のうづもれさせ玉ふとかなしみ。なにとぞ寺中へとり入れまいらせて。せめて朝の闕伽。夕の灯など。くようし奉りたきむね。城主へ訴申されけるに。願望事ゆへなくあひかなひてければ。すなはち寺中へ請じ奉り。心をつくしてつかへられける。かくて尊像再興のころさしふかくおはしけるが。事やうやくとのほりければ。明日にそ京都佛師のかたへおくり奉るとて。人夫まで用意せられけるに。その夜長谷川勘左衛門といへる侍のゆめに。地蔵ぼさつのきたりせ玉ひて。天性寺の住持。我を



さいこうせんとて。明日みやこへのぼさんとす。然れども我は都へは上るまじきなり。いそぎ此地へ仏師をよびくだすべしといひつたへよとの玉ふとおもへば。ゆめさめぬ。もとより長谷川氏此事を露しらざりけるが。かくまさしき示現をかうふるうへは。うたがふべきにあらずとて。いまだあかつきなりけるに。いそぎ天性寺へ行むかふ。すでに寺門に入て。事のやうを見るに。下部などいりきたりて。事のていあやしうりければ。さればこそとおもひて。やがて上人に對顔し。昨夜の靈夢をかたりければ。上人おどろき。さらば聖意にまかせたてさつんとて。すなはち上京の儀をおもひとどまりて。いそぎ仏師を呼招せられけり。佛師やがてはせさんじて。修飾をくはへんとして。尊軀をひらき見るに。鐵炮の玉いくつとりなくまろひ出けり。さてこそむかしの軍場に。変現し玉へる事。さらに妄傳にあらず。ただしき證據これなりとて。をのをの舌をふるひ。かさねて信敬の丹心をこらしけり。遠近の里人この事をききつたへて。たれすすむともなく。分檀けちえんしける程に。嚴飾殊妙に功おはりて。諸人觀をあらためたり。さるにても後の世まで信をつたふるためなればとて。鐵炮のあとひとつと。修補せずしてのこされたり。かくて道俗の儀。ますますさかななれば。感應のあとひびにあらはる。いつつべし片雲たちまちはれて。慧日のひかりふたたびかかやき。千草かれなんとして。法雨のうるほひたちまちこそげりと。これしかしながら得替上人の功勲にして。地藏菩薩の冥助なると

#### 十一 同地藏尊癩病をいやし玉ふ事

此ごろ或人の下部なる男。かほのいろみにくかりけるが。次第にうるみはれて。今は癩病にきはまりければ。主人もふ便にはおもはれけれど。ぜひなくいとまもらせられける。このことのかざりなくなしみて。たよれるところにうちこもりて。様々とやうじやうするといへども。かつてそのしるしなし。ある時おもひけるは。かかるたぐひまれなるやまひをうる事は。おもき宿業のむくひなるべし。とかく一心にさんげして。三寶のあはれみをかふらんにはしかじ。中にも天性寺の地藏ぼさつは。古今ふしぎの靈驗おはすなれば。一向に身心をなげうつて。そのみ奉るべしとおもひさだめて。沐浴し淨衣うちきて。しのびて天性寺にまうてつつ。御帳の前にかしこまりて祈誓しけるは。それがしいかなる宿業の候にや。かくるやまひにおかされぬ。かくて死し候はば。この世のみにあらず。又未來までもとりこしなひ候はんと。ねがはくはぼさつの大慈悲をもつて。今一たび業報をてんじて。平復を得せしめ玉へ。これかなはせ玉はずは。すみやかに餘命をつづめて。未來をたすけさせ玉へと。すなはち七日断食して。まことに思切ぞいのり奉りける。ぼさつなうじてやましましたけん。七日満ずる日より。かほのいろよりはじめて。身のところところまで。見分こころもちとにもよく

なりければ。このことの大おほいによるこび力ちからをえて。ますます精誠せいせいをつくしていのりけるに。程ほどなく本復ほんふくしてけり。かのものふたたび蘇よみがへりたる心地して。あたりのかたじけなさに。三年のあいだは日参にっさんして。大士だいじの深恩じんおんを謝じやし奉りけるとぞ。又其そのころ寺中じちゆうに祐頓ゆうとんといへる僧そう。これも癩瘡らいさうをわづらひけるが。至心ししんに當寺たうじの地藏じざいぼさつにいのり奉りしかば。ほどなく平たいらなる身みとなりける。十輪じゆりん經きやうにいはゆる。もしもろもの有情身心うじやうしんじんうれへくるしみて。もろの病やまひになやまされんに。よく至心ししんに稱名念誦せうみんねんじゆし。地藏菩薩摩訶薩じざいぼさつを帰敬ききやうし。供養くやうすることのあらば。一切さいみな身心安穩しんあんゑんにして。もろものやまひ除のぞ愈事ゆじをえて。その取應しよきやうにしたがつて。生天涅槃しやうてんねはんの道だうに安置あんちし玉ふと。まことにかかる悲願ひくゑんをしらざる人はやんなん。もししつてたのみたてまつらざるは。はたその苦くるしみをうくるを甘あまなに似たるもの乎か。しかるに今この病人びやうじんかしこくも悲願ひくゑんを仰奉あやまて。かかる安樂あんらくを得たる事。これそのしるしとするにたれるゆへなり。その餘よの靈驗れいげん。當寺たうじの縁起えんぎ歴然れきぜんとして。人口じんかうに流行るぎやうすれば。且しばらくこれを略りやくする耳のみ。

## 十二 石地藏を鐵炮てつぱうにて打忽たちまちげんぱう現報げんぱうをうけし事

大和国大福村やまとのふくむらの並ならび。横内よこうちといふ里さとの端はしれる四辻つじに。石地藏いしじざいましまけり。貞享三年てうきやうの秋あきのころ。かのちかきあたりの武士ぶしの下人しも。もとよりものの分わけをもしらぬ血氣放逸けつきはういつのみのなりければ。手ずさみとして。鉄炮てつぱうをもつてこの石地藏いしじざいを打ちこわしかば。あたりぬとおぼして手てこたへしけるが。即時そくじに自迷悶みづからめいもんして。やがて絶入せつじしけり。あたりのもの。はつとおどろきかてよりみてるに。甲斐かいなし。まづかきかへりて。さまざまとしければ。一日いちにちばかりありて。甦よみがへりけれども。偏身癱へんしんなん。すべてかなはず。かくて夜々よな人をまうでさせて懺謝ざんじやしたりけれども。罪業深重ざいごうじんぢゆうにして。しかもざんげりきよはくやありけん。ついにかなはずして。片端かたはになりたり。今にかの地藏じざいの御むねに鉄炮てつぱうのあたりたま跡あとくぼみてのこりけり。かの遍へんにかくれなき事なり。

## 十三 阿州宝珠院あしうほうしゆあんの地藏菩薩じざいぼさつ感驗かんげんの事

阿州勝浦郡あしうかつうらのこほり。靈鷲山宝珠院れいじゆほうしゆいんの本尊ほんそんの地藏じざいさつたは。むかし弘法大師かうぼうだいし靈夢れいむを感じさせ玉ひて。この山にのぼりみ玉ひしに。瑞光ずいかう赫奕かくやくとして林はやしにうつろひ。異香馥郁いきやうふくいくとして空そらにかほる。大師あなたをなを見めぐり玉ふに。とある古木こぼくのうへに。ひとつの鶴つるあつてつばさをのべてものをおほへる様なり。しばらくありて。又つる一羽ひととびきたれり。さきのつるこれを見てとびさりぬ。後のつるはじめのつるはじめの居ゐたるところへかけりゆきて。又つばさをのべてうちおほへり。たがひにとびさりとびさりて。かはるかはる相あいまもる躰ていなり。大師あやしみ見玉ふに。はやしにうつらふ光くはうみやう。明あも。このところよりさせり。いかさまつねならぬ事とお

ぼして。枝にのぼりて見玉ふに。ちいさき尊像一軀おはします。すなはち金像の地藏ぼさつにてわたらせ玉へり。大師感喜のこうべをかたふけさせ玉ひ。拝敬の掌をひらいて。すなはちとりおろし奉らる。かくてその木をきりて。御長三尺に地藏の尊像をつくらせ玉ひて。かの金像を尊軀の中へおさめ玉ひ。すなはちこのところに伽藍こんりうして。かく安置し玉へり。そのちいつのころにやありなんこの山のふもとに獵人ありけるが。つねにこの山のぼりて。せつしやうを事とす。ある時ひとつの猪矢ごろにかけゆくを能引はたと射。この猪矢をおひながらはせゆく。獵師もつづいておひけるに。この堂のうちへとび入ぬ。獵師弓うちわきさみて。血についてたづね見るに。御厨子の内人ひきぬ。獵師むねのうちさわぎて。本尊を見たてまつるに。御むねのほどに矢あたりて。血にまみれさせ玉へり。これを見るよりさすがとのあらし夷心もうちしほれ。さんぎのなみだまじりにこり。恐怖のころに胸に切なり。終に一念發起して弓矢をなげうつて。髪をきり。すぐにこの堂に居住して。罪障をさんげし。菩薩につかへたてまつり。つるにこの寺にて報命をおはりけるとぞ。今の世にいたるまで。此寺の二王門の獵師塚といへるはこれなり。この事ちかごろ寂本のあみ玉へる四国霊場記にもせられき。かの書の尾に評じていはく。ぼさつ大悲代受苦の御願にて。猪に代矢をうけ玉ふや。はた彼虞人の罪業をあはれみて。方便にかくあそばしけるや。不測の域しるべからずといへり。まことに甚深の御悲願誰か感涙を落さざらんや

### 地藏菩薩利益集卷之三

#### 一 地藏菩薩魔界を出玉ふ事

高野山西谷何の院とかやの住持の僧。よのつね分て地藏ぼさつを信じ玉ひけるが。才学の優長におはせしかば。慢心などのありけるにや、時々天狗のかたちを現じて入来。種々のものがたりなどしけるが。或時申けるは。あまりまなびにつかれ玉いんにいざらせ玉へ。日本の名山故蹟を見せ奉り御ころをなぐさめたてまつらんと。院主申されけるは。我日のもとの霊地一見せん事は。もとよりのぞむところなれども。汝にともなはん事ねがふところにあらずとて。さらに承引し玉はず。かくてしきりに入来て。数すすめければ。ある時ふ圖いかにもあれ。つれて見ばやとおもふころつきて。やがて同心し玉ひければ。天狗よろこびて。即時に通力を加して。ともなひゆきしに。雲を凌風に乗じて。万里を一瞬にこえ。千山を足下に見おろして。東西南北飛行のつばさにしたがひ。勝境靈區希有の觀におどろけり。ここにところは加州の内とやらん。いちじき宮殿にいざなひ入ぬ。かくて山菓海珍まへにつらね。さまさまの遊興をつくして。なぐさめたれば。日夜の差別もなく。魔境に轉ぜられ。幻想に著して。今は本山にかへらん事をもわすれ玉へるに。いづくともしらず。その長七尺ばかりなる御僧の威嚴堂々たるが。錫杖をたずさへ忽然と現じ玉ひて。かの天狗にむかつて。何とてこの僧をかくてはとどむるぞ。いそぎ本山にかへすべしと。あらかに玉ひてうせ玉へり。天狗ども大いにおど

ろきをそれたる軀にて。いざかへし申さんといふかとおもへばつねに住玉へる室中に忙然として坐し玉へり。そのあいだすでに一月あまりなりけるとぞ。かの魔道に現じ玉へる御僧は。持物相口決して。地藏菩薩の變化し玉ひつつ。頓に魔網を破して。再人界へかへし玉ひけるなるべし。深恩の程ありがたき御事なりとて。それよりますます信をこの大士にもつはらし玉ひぬるとぞ。これは無下にちかき事にてたしかにきき侍しなり。院の名をあらはさざる事は。はばかりを存ゆへなり。夫十輪經にはゆるもろもの天魔を降する事は。大龍象のごとしとこれをもつてしるべし

## 二 忍辱山の僧地藏の法を修して臨終善相の事

阿闍梨重清諱は諱識。俗姓は根尾氏。世和州生駒の一属なり。幼稚のころより。同國忍辱山觀音院の諱甫法印。これを養育せらる。これ清の伯父なればなり。七歳にして出家せり。かくて瑜伽の密行を稟。ひととなつて地藏院に住して。常に地藏の秘法を修し。兼弥陀の大咒を誦す。極暑烈寒にも曾ゆるべず。二十餘年の間一日をもかくでつとぬられけり。そのむまれつき正直にして慈悲心ふかし。仍自他の為に醫術をならひつつ。まづしき煩を見ては自薬をあたふといへども。さらに其薬料をうけず。かくする事。数年の間なり。かくて元禄二年六月のころより。心地すこし煩けれど。勤行さらにおこたる事なし。九月の初づかた。夢中に不動尊告玉はく。今月下旬汝が命おはるべし。あえておこたる事なかれと。これよりいよいよ志を勵て。行法ますます勇猛なり。同十八日にいたつて病悩やうやく重して。修法もともなりがたし。このゆへに遺弟及親族を集て。後の事など心しづかにさたしおきて。さびしく門戸をとざしつ。弟子及看病人の外は。坊内に入事をゆるさず。寂寞清浄にして。只念仏の声のみあり。かねてより棺を造おきしが。廿三日の暮に及て。これを取いださしめていはく。明日は地藏菩薩の縁日なり。我としごろ修するところの御法。もし御ころに應ぜば。明朝滅をとるべしと。すでに廿四日の鶏明より別して道場を莊嚴し。自手をあらひ。口をそそいで。臨終の威儀をととのへり。かくて辰の刻の過にいたつて地藏菩薩現に來玉ひて。曰。汝が壽命今半時を延と。よつて巳の上刻に。暫目をとちしが。ややあつて弟子にかたつて。汝ら見ずや。今空中を見しに。諸佛菩薩遍満し玉ひ。紫雲霞霧として白華空に現じ五色の蓮華雨のごとくに乱墜して。暫時に金色に変ぜり。かくて手に密印を結。口に地藏の寶号を唱て眠がごとくに息たえぬ。行年七十一。夏臘六十四。見聞隨喜せずといふ事なし

## 三 丹州保津保村の地藏菩薩種々靈驗の事

丹州柴田郡保津保濱の小堂に。御長三尺あまりの立像の地藏尊まします。慧心僧都の作とかや。もとは當村村上氏某の持佛堂の本尊にて侍しが。六十餘年以前に今の堂にうつし入奉りぬ。種々のれいげんするすにいとまあらず。さてこの堂そのかみは南向にてありける時。堂のまへ十町ばかりもへだててむかふに。柏原といふ村ありしが。此堂の隔子のさまより。毎夜灯明のひかり見えけり。ちかづきよいて見ればさある事なし。さだめて菩薩のはなち玉へる光。明なるにやと。人々にしんしあへり。その後三十年ばかりもすぎて。又ひがしむきになし奉りぬ。今西むきに立せ玉へるは。六年以前に堂建立とげしよりこのかたの事なり。又尊像さいかうしたてまつりし事は。過ぬる明暦元年夏の末。おのおの相議して。京都へのぼせたてまつり。七月末に御むかへに人をつかはしける。かねてより入堂供養の日をさだめおきたる事なれば。すでにその日におよびて。男女こそつて御堂にあつまり。圓立院といへる天台の知識を供養の導師とたのみて。今や今やと相まちあかしところに。惣兵衛と申もののいひしは。ふしぎや轡の音のするなりと。おのおのききとがめて。あたりに馬はなし。いかなる事にやと不審しあへりけるに。圓立院の申されけるは。されば地藏ぼさつのふしぎ。今にはじめず。それはさだめて御錫杖の音にこそあるらめ。さてはちかきわたりまで。御かへりあそばしける瑞相にこそ。いそぎ見て来よかしとありければ。若ものどもはしりいで。南ひがしのかたの通筋を。はかるに見わたすに。すでに馬堀と申村のあたりへ見えさせられけり。かくて程なくつかせ玉へば。おのおのふしきの先表に心をおどろかし。殊勝の莊嚴に信をまし。つつしみいさみて。供養の儀式をとげてげり。これにより諸人ますますあゆみをはこびて。感通日々に耳をおどろかす。ここに又介と申すもとの女房。此さいけうの次の年九月六日より。脹満といへるやまひをうけて。腹おどろおどろしくはれて。身心苦痛する事いふばかりなし。灸針など。いろいろ療養すれども更にそのしるしもなし。ここに保津保村の近郷。美濃田村といふところに。勘解由といへる占の上手あり。近国にさたありて。見どなしと異名しけるなどの堪能なり。しかるに又介子に久次郎と申もの。母のくるしみを見るにたへずして。かの見どほしところへはしりるにて。やまひのやうをかたりていかがり侍るべきやとなげきしかどかの見どはし机の上にて。かうがいのやうなるものとりまはして申けるは。そのはうは母のためにきたりけるよな。さてその方家より川下のかたに。地藏菩薩はしますやとたづねければ。いかにもとこたふ。そのぼさつを。そのほか父おくりむかへいたされし事ありやとこたふ。さる事ありしとこたふ。さればこそその時上方仏師そのはう父にいひしは。この本尊様は。よのつねならずたつときぼさつにてましますば。よくよく御信心あるべし。かならずそまつにいたさざれば。あしかるべしとねんごろに申ふくめけるを。そのはう父村の人々に。その事いひとどげさるばちにて。まづ母の煩となれり。いまだよき時な口きたられたり。さなくはれたげひ命おはらんずるぞかし。いそぎかへりて。此よし父にかたりつつ。さんげせしめよとありしかば。久次郎おどろきいそぎはせかへりて。このよしを父又介にかたりけるに。又介手をうつて。すこしもちははずと。くひおそれて。いそぎ圓立院法印へまいりつつ。ひとへにたのみたてまつりて。さまざま御わびを申上て立願などかけしかば。その夜よりやまひかろくなりて。程なく平癒し。玄戯までも息災にて。

すでに七十二歳さいになれりとぞ。此堂だういまだ建立こんりうなかりし以前に。當村たうむら五ごら介けといふもののめしつかひに。助八すけはちといふ男ありけり。ある夜のゆめに。地藏だじぼさつのきたらせ玉たまひて。たのもるれば。屋やねをなをし得えさせよと告つげ玉たまふ。かしこたり得えぬと領承りうせうすとおもひしかばゆめさめぬ。おどろきて枕まくらを支さに。まことにたふる音おと次つぎなり。いそぎおきて火をとぼし。なにこれはしどなどとりもちてゆきぬ。程ほどなく東雪しのゆめになりければ。隙ひまよりもるるあかりをえて。堂だうの中をのぞき見るに。御厨子ごしの上へたもりて。御身みへもかくらせ玉たまひぬるさまなりければ。助八すけはちさもせばこそとおもひ。いそぎやねへのぼりて。もりをさしてげり。かくて屋やへかへり妻子さいしにかたりて。人も多おほ中に。かかるあさましきそれがしに御告つげありしと。まことにありがたき御事ごじなりとて。かんるいをながしてよろこびけるとなり。惣そうじて此尊このみの靈驗れいげん。當村たうむら村上むらかみ氏宗しそウ頭かみといひし人のしるしおかれたるよし。これわづかにそのきけるところの一二をあぐる耳みみ。

#### 四 地藏菩薩の靈像そのしるしある事

過あしころ義高ぎかう律師だんぱ。丹波たんばの国氷上ひがみへり郡ぐん。竹田たけだ村石像尊そうへおはせし時。一間まなる棚たなのうへに。慧心僧都けしんそうだうの刻玉ききぎふなる地藏尊だじ御長ごぢやう五寸ごすんばかりありけるを。且しか安在あんざいし奉ほうてさつりて。その身みは所用しよくようの事じありて。福地山ふくちさんへ行玉ゆきひけるが。折きりふし石像寺しきやうじに普請ふしんのありければ。大工たいくなど四五人。かの一ま間まなるところにいねぬ。その夜よよりおのおのころあしきゆめを見。又また厭おそはれなどして。心やすらかならず。夜よごとにかくのごとくなれば。たがひにかたりあひて。あやしみおそれけり。いかさまゆへあるべき事なりとて。此こよく寺僧じそうにつげければ。それはさだめて律師だんぱの地藏尊だじをおき奉ほうるよしの玉たまひつるが靈像れいざうにてまします。おのおの不じやう淨じやうの身みにてことにみだれがはしき。ねやうなるべければ。かかるさはりもあるにやを申まをされければ。大工たいくをのをのたちよりて見奉けんほうるに。あのごとく紙かみにつみ奉ほうりておかれたりけるを。寺僧じそうに申まを合あて外そとへうつしまいらせき。かかちてその夜よよりをのをやすらかにねたりければ。見聞けんぶんふしぎのころをおこして。不ふ輕きやう三寶さんぼうの信心しんしんを生しやうじけるとぞ。夫そ地藏菩薩だじは。もとより大悲ひ大願だいがんのさつたなれば。六道だうだうのちりにまじはりて。又また濁だくの泥でいの混こんし玉たまへり。所謂いはゆる蓮花れんげの水みづに染そまさるがごとくなれば。あに淨じやうと不ふ淨じやうとをえらび玉たまいんや。しかれども日に光くわう赫はく々たれば。肉眼にくがん自おのづから眩めま事ををなし。九香くかう芬ふん々たれば。群邪ぐんじや処ところをやすんぜる。これも又かくのごとし。菩薩ぼさつの威靈ゑいにけをされて。垢穢くその身心しんしん自おのづからやすからざるならん。抑おそまた地藏菩薩だじの善巧ぜんかう方便ほうべんにて。かの不じやう淨じやう不信しんともがらを感じかん激げきして。淨信じやうしんの錫はしをひらき玉たまへるにや凡慮ぼんりよはかりがたし

#### 五 信男延命地藏經を讀て病愈事

大和国磯上いそのの近所きんじよ北野きたのといふところに市右衛門いちゑもんといへる大工ありけり。月つきごろにて病びやうといへるわずらひになやみて身心しんしんおだやかならざりけり。調養てうやう

ころをつくせども。いまだ一時の快事をえず。蒙々として日をおくりける処に。當麻寺のふもと大橋村に。吉衛といふものあり。もとひさしく京都に住して。縁にふれつつも地蔵ぼさつのくどく。甚深なる事をてうもんして。信仰供養しけるが。かの市右衛門がやまひにくるしめるをあはれみて。すすめけるば。御身のやまひ。とかく地蔵ぼさつをたのみ奉り玉へりし。このぼさつ十種の福をあたへ玉ふうちに。衆病悉除の御願ましませば。信心まことにあらんにをいては。感應いかでかむなしからんや。幸に我延命地蔵經を所持しぬれば。これを御身にゆづりまいらすべし。かならず信をとつて。毎日誦誦し玉ふべしとて。すなはちかの御經をあたへけり。市衛門大いによるこびて。至心にこれをてうだいし。それより一向地蔵尊に皈依して。毎日おこたらず。延命經を讀誦しけり。かくて卯月廿四日例のごとく仏前に坐して。かの御經をどくじゆしけるうちに。しきりにはらごころあしくなりて。しのぶにたえざればひなく御經よみさしていそぎ厠におもむきけり。かくて用をべんじけるに。水をそそぐがごとくに。大いに瀉下せり。それよりころよくなりて。はらはりたるもとのごとくに平に和つ。やがて健になりけり。これひとへに地蔵ぼさつの護念力。延命經の不思議力なりとて。つねに自報恩の為。一字の地蔵堂を建立して。いよいよ信敬の心を注けり。

#### 六 江州木本の地蔵菩薩に祈て盲人眼を開事

江州木本の地蔵薩埵は。龍樹菩薩の御作なるよし縁起の趣。靈驗記にのせられければ。かさねてしるすにおよばず。古今の靈應多般にして。逐一ひらふいとまあらず。今旦ちかき正蹟をとつて。見聞の信芽を發するにいはく近曾江州蒲生郡。杉杣村に庄兵衛といへる一向宗ありけり。もとより不信心なりけるが。いかなる惡報にてやありけん。兩眼ひとつぶれて。あたりも闇夜にまよへるがごとし。そのあいだすでに又手をへてくるしみけるが。隣郷桜村に。中明寺といへる曹洞宗ありけり。その寺の祖燈長老。かの庄兵衛にむかつて。その方第一向宗にて。餘佛を信ぜざれば。せんかたなし。さもなきものならば。目のたちまちにひらく方便あるものをとの玉ひければ。庄兵衛ききて。それはいかようなる事にて誰ぞ。目だにひらき候はば。いかなる佛とも法をも信じ可申なりといふ祖灯のいはく。しからばこれより北。木本淨信寺の地蔵ぼさつと。ふしぎの靈驗おはしますなり。かしこにまうでて七日こもり玉いんにをいては。必定して目はあくへきぞ。そのたしかなる證據。いかほどもあるなりとて。ちかき例あらましかたりきけ。又地蔵尊の悲願は餘尊にすぐれさせ玉ひて。ことにありがたく。二世の願望すみやかに成就する事など。あらあらとき玉へば。いかなる宿縁のよほしける事や。さも頑なる庄兵衛も。忽に發起して。さほどにありがたき御事ともしかずして。ひさしく闇夜にまよひける事のあさましきよ。さらばまいりてそのみたてまつらんところざしけり。されども頃は十二月はじめづかたにて。雪おびただしくふりつ

もりてければ。盲目の身として。はるはる越路の深雪をわけん事。いかにもかなひがたし。まづ代参にていのり奉んとて。僕をかたらひてつかはしけり。かくて代参のもの。今はさだめて行つきぬらんとおぼしきころ。庄兵衛心に今こそかのもの祈誓をうけ奉るなるべしとはるかにおもひやりて。一心に祈念しければ。ふしぎや目すこしあきて。ものの色おぼろに見えいでぬ。あまりうれしくありがたくて。今は雪のつもれるをまかへり見ず。代参のかへるをもまちえずして。我は木の本へまいるなりとてひしめきぬ。妻子どもおどろきて。これは物にくるひ玉ふかとて。手とり袖にすがりければ。いやさなせそ。かやうの瑞現あるうへは。もださるべきものかとて。目をひらきて見せけるにぞ。おのおのあと感じてともによろこびの首途をいわひて出しけり。かくて道にかかり行に。鳥居本といふところにて。代参のものを下向にあひぬ。たがひによるこびけんそんなして。その夜はともにその宿にとまりいよいよ信をとりて御供などいただきぬ。かくて夜明ぬれば。代参のものは。これよりやどへかへしつ。我は木本へおもむきけり。菩薩の加護ましましけるにや道橋のあやまちもなくて。その日のくれがたに木本につきぬ。さてかの堂に七日こもりけるに。その満ずる日にいたつてすこし見えける日かへつてくらくなりぬ。庄兵衛おどろきてこはいかなる事ぞや。但我信心たらざるゆえかとあさましくかなしくて。いよいよさんぎさんげして。一心にいのり奉り。欄杆の擬宝珠にとりつきて。あはれせめてこのかきつけの見よけしとなき居たるに。両眼たちまちにひらきてあきらかになりたり。ここをいくわんぎゆやくし。希有の深恩をになつてかへりけるとぞ。それより家内上下八人法を禪宗に改て。祖灯長老に販しけり。はじめ庄兵衛がまいりたりける時にとまりにし鳥居本のやどに。盲たるむすめありけり。その母庄兵衛があらましをきいて。うらやみなげきて申けるは。我むすめもあはれ男ならましければ。このたび御身の御ともせさせんずるものをとて。よくとなきぬ。庄兵衛申けるは。それほどにおもひ玉はば。この御供物をすなはち地藏さまとおぼしていただきせ玉へ。なかはしるしのなからんやとて。すなはち本分をし分けてあたへければ。母大いによろこびて。やがてかのむすめに行水などせさせつつ信心清。浄にあらためていただきせけり。娘もありがたくおもひ入りて頂戴し服し奉る。かくてその夜いねんとする時に。すこしものいろ相見やるなりとて。よろこぶ事かぎりなし。かくて庄兵衛所願成就してかへるさに。このやどへ立よりしに。うちつづきて。目の見えぬ事。地藏ぼさつの御慈悲。且は御身のあはれみゆえなりとて。おやこともにかんるいをながして。よろこびけり。さりながら女の身のあさましさは。しかるべきつれも待ねば。御礼まいりのおそなはり候とて。又なみだをながしけり。庄兵衛とともに随喜の袖をうるほしてわかれけりとぞ。又祖灯長老の妹ありしが。そのち申の年の春より盲目になりて。同霜月のころまで。東西をわきまはず。上方に住居してものうき月日をおくりけり。祖灯これをいたみおもはれけるが。かの庄兵衛事をおもひいだして。かの妹をすすめて。木本の地藏ぼさつへ七日参籠せさせられけるに。七日満ずるあした。両眼ともにひらきて。帰京の時は。杖も手引もいらざりけるとなん。大慈恩のほど。身にもあまりてありがたければ。せめて報恩に。月ごとの廿三日四日には。かならず精進して恭敬のおもひを運れき。すこしもけだいのころある時は。まなこふたごころにくらみて。見



えざる事一兩度もかくありけり。さるによつて自一生のあいだ信をとりて。地藏尊に帰依し奉りけるなり。日明てよりこのかた。二千年をへて。おとし元禄二年八月六日に病死せられけり。法名脱心省印信女といひけるとぞ。これ肉眼はすでに灰しぬ。願は一切衆生とともに心眼をひらきて智光をえん事を帰命頂礼地藏尊。哀愍し撰取し玉へ

#### 七 同地藏の御影を押して金神の崇をまぬかれし事

越前敦賀山室氏某。金神の方へ。屋敷がへしけり。程なく一子わづらひつきて。両眼盲たり。皆人金神の崇なるよいひければ。諸寺の僧衆をたのみ。又は山ぶしなどを集て。祈祷する事をふれどもかつてその験なし時に山室氏思惟すらく。地藏菩薩に帰依すれば。天狗土公大歳神等も。ながく便をえずとききしかば。しかが木本にまいりて。地藏菩薩に歎たてまつらんにはとおもひさだめて。翌日やがて淨心寺にいたり。得勝菴を宿坊とし。本尊に願をかけて御影を頂戴し。うやまひおさめてかへりつく。家の柱にはりつけて。押しけるに。次の朝かのおさなきものの両眼たちまち明になりけり。各あまりの事に。しばしはあきれたるていなり。実に地藏ぼさつの威神力。ふしぎといふもおろかなりとて。見聞信敬の心をあらめけり。今に父子ともに堅固にして。御礼謝のために年々歩をはこびけるなり。かの両眼のひらきし事は。寛文三年九月の事なりとぞ

#### 八 同地藏の加被によりて小児の両眼開事

寛文五年の夏江州浅井郡難波村又兵衛といふものの一男。岩之助といへるが。三つとしに両眼盲たり。膏治かずをつくせども。ほのあかりもせざりければ。両親の嘆たとふるにもなし。今はひたすら地藏尊にいのり奉らんとて夫婦ともにかの子をつれて。木本へおもむき永壽庵を宿坊として。二夜三日こもりつつ。一心に立願してかへる時に。馬渡川にして。この子たちまち眼ひらきて驚を見て指さしぬ。両親よろこぶ事かぎりなくして。それよりたちかへりつつ。あまりかたじけなきままに。御礼のためにとて。一七日こもりとぞ。抑この木本の地藏尊にいのり奉りて。効験多中にも。盲目のひらく事をうる事。あげて記すべからず。さのみ又似たらん事をかきつけ侍んも。稱楊のくどくはさる事なれど。又繁重のそしりあらん事をおそれて。しばらく略し侍りね

#### 九 同地藏菩薩偽を正玉ふ事

濃州安八郡長松村勘七といへるもの過ぬる寛文九年の春。重風氣相わずらひて。十死一生のていなりしが。やうやうにはんぶくしけり。いかなるゆへにかありけん。両眼ともにつぶれて。黒白をも分ぎまありさまになりければ。いたくなげきおもふて。かれこれと醫療をつくせども。すこしのばかりのあかりをもえず。いかはせんともだへける折ふし。朋友の入来て。いかに木本へまいり地蔵ぼさつに歎玉はさるや。御利生の程。さだめてきき及玉らんとすといひしかば。げにもところづきて。やがて木本へまうでて。春溪庵を宿坊として本堂にこもりつつ。昼夜不臥にして。食物を断ずる事一七日。勇猛精進に。祈願すらく。伏願は地藏尊。大悲の誓願むなしからずは。今一たび我両眼をひらかせ玉。然らば一生の間毎月廿四日に。精進清淨にして。御名をとなへ奉るべし。扱又深恩報謝の爲に。別にささげ奉るべき財寶のなければ。只今帯ところの脇指。としごろ身をはなたず。大切におもひ侍をさし上奉るべしと。丹誠を抽でいのり奉けるに。七日まんずる。曉兩眼忽ひらいて。あきらかなる事。あたりもかこふれる缶をとるがごとし。歓喜のころ涌がごとく。信感のなみだ酒にたえたり。かくて下向せんとするに。凡情のあさましきは。はやはじめの切なさをうちわすれて思惟すらく。さすが男の腰をさし上。丸ごしにて。はるばる故郷へかへりけり。かはしく心ぼそし。所詮まず此たびはさしかへりて。かさねてさがへなど用意して。持参し奉るべしとおめおめと腰にさしてはさみて。いそぎ故郷へかへりけり。かくてやがてもまいらましかば。せめての事なるべきに。たればさることのななければ。けふにあすと相のぶるほどに。そのとしもむなく暮て。翌年の春三月になりけり。懈怠の人の癖として。ながき日の花をも見くだびれ。昼寝うちして居たりけるに。ゆめうつつのさかひに。よにけたき僧のきたらせ玉ひて。枕をはたとけてぬす人めぬす人めとの玉ふ御聲のあらたなるにおどろいて。かはとおきぬるに眼くらみて見えす。こは地藏尊なりけりとおもひしかば。なみだをながし。己が非をくひて。とりあへず木の本へさんろうし。かのわきざしをさし上て。誠をつくしてさんぎさんげしけりければ。やうやく隻目でひらきける。此上の慈恩なりとよろこびて。礼謝してかへりけるとぞ。夫惟に菩薩の衆生の施をうけ玉ふ事は。たとへば高山に雨をうくるがごとし。大雨小雨ひとしくこれをうくれども一点を巔にとどめず。四方の谷人ながしおとす。谷川にも又住せず。つゝあにながれて大海に入。ぼさつまかさつ亦復かくのごとし。衆生大小のほどこし取捨の念なく平等にあまねくこれをうけ玉へども。一念も住着せず。大悲をもつてのゆへにこれを衆生にほごす。大智をもつてのゆえに。衆生の相にもとどまらず。つゝあにながれて菩提願海に廻入す。所謂受受ず。受ずして受といふ。あにこのいひにあらずや。然るに今地藏菩薩夢中に來らせ玉ひ。しかも悪口をもつてかれが財施せざる事をとがめ玉ふ。ぼさつもまたかくのごときの事ありや。いはく菩薩の善巧不可思議なれば。あに凡評をそのあいだにいるべけんや。しかれどもその跡について。且その源をさぐるに。所謂煩惱即菩提なれば忿怒も即慈悲なり。いかんとなれば。華嚴經にはく。心と佛と及衆生と。是三差別なしと。しからばすなはち仏をあざむくは。これ自心をあざむくなり。自心をあざむくは。すなはち衆生をあざむくなり。上仏をあざむくときは。菩提の道断。下衆生をあざむ

くときは。慈悲の種滅し。中自心をあざむくときは。真人位をうしなふ。かくのごとく全體これ虚妄ならば三惡道にをちずして。はたいづれにか帰せん。地藏の大悲そのおちいるを見て。むしろ撰取の御手をくだし玉はざらんや。しかりといへども。縁なくんば。やんなん。このことの幸に機感相投するの善縁あり。かるがゆへに僞惡の語を現じてかれが妄心を驚覺し頓にその真心にかへらしむ。しからば則地藏ぼさつの御心。施をもとむるにはあらず。只是哀愍のいたれるなり。涅槃經にはく。僞言軟語帰第一義と。よくこれをおもへにや。又因に論するに。世に法をぬすむものあり。いかんとなれば三寶の前にいて。師を請じ誓をたてて戒を受僅に道場をいづるにをよんで。忽にそむきやぶり。人に對しては持戒の相を現じて。みだりに恭敬の信施を受。又は佛前にいて。師に隨て。念仏陀羅尼等の所作をうけ。語は臨終をかぎるといへども。行は數日に退轉す。是すなはち上仏と師をあざむき。下衆生をたぶらかし。中自心をくらますにあらずや。かくのごとき虚妄の心をもつて。菩提を證ぜんとおもひ。淨土に往生せんとするは。所謂砂をむして。飯となすのいひなるべし。決してこのことはある事なけん。かるがゆへに善道大師も。外に賢善精進の相を現じ。内に虚假不信等の心をいだいてはたとひ昼夜六時に頭上の火をはらふがごとくに念仏して。これをもつて淨土に回向すとも往生はかなひがたしこそは玉ふなれ。愧は我輩いくたびか佛前の約束に背。善知識にちかひし事をむなしうす。これ財と法と事異なりといへども。その欺盜ゆへんの理は一なり。しからばいかんぞ諸仏ぼさつ無明の枕を蹴て。勸励の僞言をなし玉はざるや。此けだしんえんいまだいたらざると。業障ふかきがゆへなるべし。いよいよおそれ。いよいよつくして。はやくこれをあらためずんばあるべからずむかし楚の莊王天変地妖を見る時は。これをよろこびてはいく。天地いまだ我をすてずと。ここにをいて。あやまちをあらため行を正す。天地久災変をあらはさざるときは。かへつておそれなげいてはいく。天地それ我をすつるやと。ここにをいて。山にいのり川をまつりて。あやまちを神祇にうつたへ。諫に忠臣に従。かくのごとく安に居て危をわすれざるがゆへに。國家大平にして。遂に霸王となれり。この事ちかく劉向が說苑に出たり。これに例してこれを見るときは。かの地藏ぼさつの勘氣を激し玉ふは却向よろこびおもふべきゆへにして。我輩の寂然として告なきは。おそれなげくべきところなり。もしそれ罪なきがゆへに告ずといはば。本願經に地藏ぼさつ佛にまうして曰。世尊我この閻浮の衆生を見るに足をあげ。念を動も。これ罪にあらずといふ事なしと。自内にかり見てしんぬべき耳。あに枕を泰山に安じて。後世の惡報をおそれざるべけんや。我勘七をとどめ玉ふ一事にをいて。大に感得する事あり。ここにをいて繁をかへり見ずして。挙もつて自の懺悔にそなふる耳

#### 十 同地藏菩薩癩病を愈玉ふ事

濃州本巢郡高須の城下に。繁都といへる盲目あり。生得に癩病の相ありて。見る人不便なりけるが過し延寶四年の春のころより。面鉢ふくれあらけ眉をち

て。はなはだいとはしきさまになりけり。かかる時も兼て。乃願望相かなふて。此変のころは。京都へのぼり。衆分の官位になるべきにてぞありける。しかれどもかかる悪疾を受ては。さやうの官位うる事は。かねて中間のおきてなりければ。いかがはせんとなげきまどひけるに。或人申けるは。江州木本の地藏ぼさつは不思議の靈驗おはしますなれば。一心に立願し玉へ。平愈うたがひあるべからずと。いと頼母數もすすめければ。この盲目さりぬべき宿世の善縁や。催けん。大によるこびてまことに今まではころづき候はで。いたづらに過し候しに。よくこそ御をしへありけるとて。その翌日未明に。はだしにてはるはる木本へまうでつ。永壽庵を宿坊とし。三日三夜断食し。祈願丹忠をつくして。下向しけり。その信悲願にや應じけん。面相やうやくととのほり。眉毛生いでて。常人のすがたになんかはらずなりけり。仍そのとしの六月に上京して本意のごとく官にすすみてかへりけるに。やより直に木本へ参詣して。かへすかへすもぼさつの慈恩を禮謝し。信金など奉りて。故郷へかへりけり。その後七年が間は毎年さんけいして。菩薩の大悲をよろこびけるとぞ

#### 十一 同地藏菩薩湯火瘡をなほし玉ふ事

江州浅井郡内保村に貧人のむすめにまつといへるありけり。ある時自粥をたきて鍋引あぐる時に。足をふみ損じて右の手をかの煮かへりたる鍋の中へつき入ぬ。しばらく悶絶して息絶けり。かくて心地さめて後。手の皮むけ肉爛て。あつくいたむ事いふはかりなし。さまたまくりなどつけければ。程てやうやく愈けり。しかれども五の指一にとちつきて。にぎれる拳さらにのびざりければ。賤がしりぎをいとなむべきたよるともなく。身の侘しきにうちそへて。なげきになげきをかさねたり。人のすすめにやよりけん寛文九年八月十八日に。木本に参詣し。春溪庵を宿坊として籠事一七日。そのまんずる夜地藏ぼさつ形夢中に形を現じて告て。曰。汝信心いたれるゆへに。我加持力をはげます。唯今手をひらき見よ。自由なるべしとのたまふと見てゆめさめぬ。おどろきよろこびて。手をひらき見るに。とちつきけるゆびのおのはなれて。ひらきにぎる事自由なり。折ふし参籠の男女多ありけるが。この現瑞を見て。信感の聲洋けたり。貧女あまりのかたじけなさに。報恩の為に七日断食してこもりぬ。今に存命して年ごとにあゆみをはこびけるとぞ

#### 十二 同地藏菩薩に祈平産せし事

同國坂田郡曾根村に。何がしの果にて。しかも富貴なるものあり。若妻室を娶。かしづきけるが。或時一子を産す。三年があいだ。ものいふ事なく。惣身つみわたをつかねたるがごとくにやはらかにして骨なし。かくてほどなく死したり。やがて又一子を産す。この子も又はじめのごとくにして亡き。夫婦なげきおもふ事

理に過たり。しかして又懷妊す。此たびは母いたくなやみわづはしくて。いかさまにも難産なるべしと見えれば夫ならびにけんぞくかねて心をやすんぜず。い  
かがはせんと案じ居たり。もとより代々一向宗なりければ。阿弥陀佛のみ吾佛とまもりゐて。餘佛餘尊をさみしければ。立願祈壽などはおもひもよらずぞあり  
けり。すでに十二月にいたりぬれど。分娩にもならで。明暮ただみのくるしみをましければ。夫婦のもの今はこらへかねて。つねにきき及にしかば。木本へ代参を立。  
永壽菴を宿坊として。祈願すらく。ねがはくはこのたび平産ならしめ玉へ。又そのむまるる子前々のごとくならで。堅固長命をえせしめ玉へ。もし悲願むなし  
からで。なに事なく安産せんにをいては。やがてまうで奉て。帰信の禮拜をとぐべしとぞ申させけり。代参のもの至心にいのり奉て。下向し。程なくかの家にかへりつ  
くとひとしく。産母氣付てなにとぞこほりもなくいとやすらかにしりも誕生なる男子をうめり。はじめのふたりの子とはちがひて。肢躰全て筋骨すこやかな  
と見ゆ。夫婦よろこぶ事かぎりなくて。力づくをまちえて。夫婦もろともにかの子をいだかせつつ。木本へ参籠し。感涙をながして禮謝し奉りぬ。かくてその夜の夢  
に地藏菩薩形を現じ示玉はくたた慈悲をはげますべし。しからば此子そくさいなるべしと。夫婦ともにうちおどろきて。たがひに夢をかたりあひつつ弥信心  
増長して。それより日ごろの邪見をあらためて。慈悲をもつはらにしけるとぞ。夫佛の心といつは。慈悲心これなりと。観經にもとき玉へば。慈悲心なうしては。  
あに佛菩薩の御心になかなひなんや。此ころ地藏菩薩或信尼の夢に。慈悲の浄土といふ事を示玉へる事ありき。これなん地藏大士は。わきて慈悲をもつて浄土とし  
玉ふとの御告にや。所謂慈悲の室に居し。忍辱の衣を着て方便摂化し玉へる御願の程おもひ合てありがたけり。抑この産婦の事は。元禄二年五月のころにして。  
無下にちかき事なれば。わざと姓名をしるさずとなん。或人これをかきおくり侍ぬ

### 十三 同地藏菩薩孝心を感じて 憐を垂玉ふ事

同国伊香郡。西野の村糟屋仁大夫といへるもの。むかしは神職の家にてありしが。その後家おとろへて。朝夕の蓄をはからず。一瓢しばしばむなしければ。  
嫡男権太郎を江府へくだし。飯田町真木屋のなにがしのもとに有つけぬ。かくて寛文七年の春のころより。ふるさとの父仁太夫わずらひおしけるが。やうやくお  
とろへつて。兎角世縁つきめべしと見えければ。したきもののかたより。かの権太郎にかくと告おくりける。権太郎その文のおもむきを見て。大いにおどろきて。  
我父つねつね病者なりけるうへに。かく大切なるやまひをうけ玉いんにをいては。いかでかあんなるべき。何とぞ存命のうちに。今一度對面あらまほしとおも  
ひ入れれど。年季の奉公なりけるうへ。ことにひまのうきがたき事どもさしつどひ。そのうへ上下の路錢とてもあらざれば。いとまを主人に申入る事をおもひわづら  
ひつつ。只己のみ心をくだきて。ひとしれず袂をうるほしぬ。今はひとへに我國木本の地藏ばさつを頼奉らんとて。かの文を見るとひとしく。水をあびて身を

清。己が国のかたにむかひて祈けるは。南無地藏大菩薩。我父母たとひ今度定業なりとも。ぼさつの御あはれみをもつて。當病平愈せしめ玉へ。某季明なば。いそぎ国本へかへり。身をくだきて親をやしなひ。随分孝行をつくして。一日なりとも安樂ならしめ。終を見とどけ申べし。願は慈愍納受し玉へと。一心に念じ奉り。やがてその日より断食して。しかも主人へのつとめをまかかず。人にもしらせずして。四日があいだぞはげみけり。かくて五日におよぶころ。主人とのよしを見とがめて。しゐてこれをとひけるに。しのびはつべき事ならねば。ありのままにぞ申ける。主人これをかんにて。まづ奉公をひかせつ。部屋へ入てやすませける。その夜かのもののゆめに。その長六尺ばかりなる容顔けたかく見させ玉ふ御僧の。かうぞめの衣をめし。錫杖をたづさへ来て告玉ふは。汝孝行のころ他に超たり。我その誠を感じて。これまでできたれり。汝が父のやまひを平愈すべければ。ころやすく思ふべし。扱汝頃食せざれば。ことの外つかれて見ゆるぞ。なになりともくひたくおもふ食物あらばのぞむべし。いか程なりとも何さへんぞとの玉ひける。かの夢中にこれをよろこびて。種々の食物をのぞむにしたがつて。あたへ玉ふ事。凡五十種ばかりなりその味妙なる事たとへんかたなし。かくて終には菩薩もはやのぞむ食物はなきかとの玉はせけるに。さあらば赤飯を給べしと申ければ。これたべよとてぼさつ自三握をあたへ玉ふ。かのをのこれを受けただきて。まづ一握を食せんとするに。もとより腹中飽満しけるうへなれば。噉といふて虫津いでけるとおもふとゆめさめけり。おどろきてあたりを見るに。かの夢中に見し赤飯三握現にありぬ。かのも身の毛弥立。ありがたきおもひて。感涙せきあへず。夜のあくるをまちかねて。いそぎ主人をおこしてこれをかたる。主人これを見て。同とにもかんたんして。夜明るとひとしく右の赤飯をしんるいならびに町内へもすこしづつ賦つかはして。いただかせけり。各件の趣をきいて。未曾有の思を生じて。感驚の聲ちまたにみたり。かくて主人路銀などあたへていとまをえさせとくとのぼりて親にもあひ。地藏ぼさつにも御礼申上にと。よろづねころにきこえければ。権太郎かぎりなくよろこびてやがてふるさとへくだりけり。父もおもひの外に病氣本復し。はからざるに親子相見る事。これひとへにぢさうぼさつの御はからひなりとて。信敬の心をこらしけり。さてかの父のやまひのよくなりし事は。はかり合るに権太郎江戸にて霊夢を感じし夜より。俄にころちすずしくなりて。次第に快氣したるとぞ。かくのごとき感通。所謂法界不思議界。あに髪をその間にいれんや。抑地藏菩薩の。ことに孝心を感じ玉ふ事。そのゆへなきにあらず。十王経にむかし地藏ぼさつ聖近士女たりし時。母の業に引れて。地獄に陥玉ひし事をしつて。その苦を救んが為に。七日断食して。仏にいのり玉ひしかば。そのまんずるあかつきに佛の出現説法を感じて。無上菩提をおこし。つるに母のくるしみをすくひ玉へり。しからばすなはちぼさつのむかしをおぼし玉ば。いかに権太郎が今の孝心を感じ玉はづらん

江州大上郡葛籠町。延命山地福寺の地藏菩薩は。行基菩薩の彫造にして。靈異ますますさかなり。抑この濫觴を尋に。近昔この境の地主を清庵となんいひけるが。ある時重病をえて露命まさに消なんとす。時にある夜誰とはなく。夢に來告ていはく。この宅より乾にあたる。汝が持地の中に。地藏ぼさつの靈像は中にうづもれましませり。すみやかにこの像をほり出して修補し奉らば。汝が病忽にいゆべしと見てゆめさめぬ。おどろきよろこびて。いそぎ人をしてかの地をほらしむるに。はたして尊像の三四に分散し玉ふをこかしよりたづねえぬ。いそぎ當國番場の邑の仏工某をよびて。修飾せん事を議す。仏工つしみ拝していはく。此像まことに世にありがたき靈作なり。且前行をなしてその後莊嚴し奉んとて。すなはち如法に前行を勤修して。刀斧の工をほどこしけり。かくて相好圓備し玉ひしかば。清庵病氣も本復しけり。感激心にもよほしてやがてかの地について。小堂をしつらひ。すなわち地福寺と号して。かの尊像を安置し奉り、その後星霜をしょうつりて。稍荒廢におよぶころに。中興の地主。樂善休庵禪門。ふかくこれをなげきて。しばしば本尊にうつたえ奉る。そのころたれいふとしもな。地藏ぼさつ。夜な夜な誦經し玉ふとさたしければ。諸人希有の思をおこして。仰信の踵をつらねるに。志願頓に満じて。米殘席にうづだかし。しかるに禪門この信財を。すこしも己が有とせず。つゐに堂宇を修造して。莊嚴ありしにまさりたり。これひとへに本尊の加被力なりとて。いよいよ信敬の思をましけり。今は有為の雜縁をなげうつて。只ひとへに淨土に導玉はん事をいのる。一日例のごとく。恭敬礼拝する時。現に弥陀の三尊を拝し奉りぬ。蓋これ本尊不可思議神通方便力をもつて。且三尊の化用を顯て。かれが志願に應じ玉ふならんか。休庵この感驗によつて。いよいよ單信をこらしつもつかえ奉り。つゐにりんじゅう正念にして目出度往生とげられき。夫延命經にとき玉ふ。地藏ぼさつの躰を見名をきいてだに或は人天に生じ或は淨土に生ずと。いかにいわんや常につたへ奉り。ことに堂宇再興するをや。宜なる哉その引接にあづかる事や

#### 十五 同地藏の加護によつて正念に往生する事

件の堂の承仕法師に。了帰坊といふありけり。もとはかの休庵の被官にして。在俗の名を久次郎と号せり。天性正直にして。へつらひまがる事なし。これによつて休庵存生の時も。此久次郎をして。尊前の事を辨ぜしむ。参詣の人々も。多は此ものを信知して。祈願の御圖をうかがはしむるに。そのさしめす事。あたりと掌をさすがごとし。さるほどにひるは御堂に侍りて。夜は私宅にかへり臥。ある夜の夢に地藏尊つげたまはく。なんぞ我かたを跡になしてふすや。速に北枕にいねかゆべしと。それより後尊のみをしへのごとくにぞ臥たりけり。その後又夢中に示玉はく。汝我につかへんとならば。はやく剃髮して了帰と名づき。朝夕此堂にあるべしと。久次郎すなはちこの事を休庵に申けるに。休庵の妻。壽慶尼。あえてこれを信用

せず。さるほどに久次郎もころならず日に日を過しけるに。ある夜かの尼のゆめにぢざうぼさつ来せ玉ひて。いかに汝久次郎をはやく法躰せしめて。我承仕となすべしと。あらたに仰ければ壽慶おどろきくひて。急休席にかたりて法躰せしめ。すなはち示現の法名了喜とよべり。かくて元禄三年二月ある夜了喜の夢に本尊枕上にたたせ玉ひて。今これ人釈迦如来の来現し玉ふなり。汝これを拝せよとのたまひもはてぬに。丈六ばかりの釈迦如来。殊勝端嚴の御よそほひにて現じ玉へり。心肝に銘じありがたく。拝し奉るとおもへばゆめさめぬ。同女七日の宵に。了喜門前の安兵衛といふものものところにて。なにとなくものがたりなどし玉たるが。急に座を立ていふやう。我りんじゆうきにあたりおぼへたり。所詮はやく御堂にかへつて。菩薩の御前におるべしとかへりぬ。しばしありて堂中にをいて。高声に十念に聲あり。安兵衛もころもとなくおもふうちに。このころをききあやしめて。誰ならんきくもなれざる聲かなと。いそぎかしこにいたつて見るに。門戸ことごとくとさして。灯のひかりも見えず。四にかへり見るに寂寥たり。門をまくに及ずして。まづやどにかへりぬ。その翌日了喜坊やまひにそめり。くれづかた人にかたりて。今しばしまどろみぬるうちに。ぢざうぼさつきたらせ玉ひて。我に十念を授させ玉ひぬと。ここにをいてはじめてしりぬ。ゆふべの十念のころも。本尊の授玉ふる事をこれより病氣次第にかたくなりて。つねに二月二日の夕に。念仏とともに。安祥として息たえぬ。死後の遺物。只寺目六銭手ぬぐひひとつのみありしとぞ。まことに平生少欲知足の人ときとしが。かくすこしのたくはへもなりしにぞ。いとどたうとさもまさりけり。かつてきく嚴冬のさむき夜は。ぢざうぼさつ。かたじけなくも。自臥具を着せ玉ふと見て。寒苦をわすれ。或はぬす人など入来りし時は。薩埵。爰に告ておどろかし玉ひぬれば。すなはちおきてまさしく堂壁をきりうがつを見る。依ぬす人おきあへるをきいて。忽にげさるやうの事。一々しるすにいとまあらず。まことに等覺無垢の御位として。下賤の凡愚をあはれみ玉ふ。いはゆる日月の潢潦にかへり玉ふなり。大悲のほどこそありがたけれ

#### 十六 同地藏菩薩 願の掛金のはづれしをなほし玉ふ事

延寶年中西の秋のころ。江州彦根の郷。吉兵衛といへるものの弟に。清兵衛とてありしが。此もの女五歳の時。いかがはしたりけん。類のかけがねはづれて。口ひだりのかたへ□つつ。言舌さらにもとほらず。食事もかつてくふ事あたはず。やうやくおも湯など用て。わづかに喉を潤ぬ。ただ涎のみをたれて。見ぐるしきさまなり。兄弟親類をののうちよりて。醫師を頼。いろいろ方便をめぐらせども。すべてそのしるしなし。やうや



く日をかさねければ。わかすこやかなるとのなれど。氣くたびれ躰つかれて。苦悩たえがたく見ゆれども。いかんともせんかたなくて。各まもり居たりところに。としごろ親友のきたりて。今世にはやらせ玉ふ葛籠町の地藏菩薩は。いかなる祈願をも早速かなへさせ玉ふなれば。いそぎ祈て見玉へと申ければ。もとより信心にて佛法の理あしく心得居けるにや。兄の吉兵衛聞もあらず。やらおかしやその地藏らが。なにとてかやうの事を。たちまちによくすべきやとてわらひけり。弟の清兵衛と目ごろは不信のものなれども。さしあたり身のくるしみの切なるままに。此事を信用して。ひそかに一心に地藏菩薩を念じ奉。願はこのたびの病苦をすくはせ玉へ。しからば心をひるがへして皈依し奉。御礼にまいり可申とひとすじに願をかけ奉ぬ。かくてその夜初夜過に。くたびれはてて。とだとしぬたりこつものうちに。葛籠町の地藏菩薩とおぼしきが。御出あつて。自慈悲の御手をもつて。かの清兵衛が頬をおしなるさせ玉ふとおぼえしが。いたみなければ。おぼえずあいたしと聲高に申けり。目ごろは瘡のごとくにおうおうとのみいひたりものの。あざやかにきこえければ。看病のものどもおどろきて。こはいかにととひし時。清兵衛言つねのごとくに正なりて申けるは。たれそこにおはします葛籠町の地藏菩薩の。我頰のかけがねをかけたまへり。あらありがたやとなみだをながす。各ますますおどろきて。その地藏菩薩は。いづくにおはしますぞと見まはせども。もとより縁なければ見え及はず。清兵衛はたしかに拝奉て。それそこにこそと指さして。をしゆるうちに。願のごとくにきえうせ玉ひぬとぞ。それよりいよいよ日にそへ力つきて。もとのごとくになりけり。眼前かかる現なる靈感を見てこそ。邪見を轉じて。正信を起ものもおほかりし。

#### 地藏菩薩利益集卷之四

##### 一 真阿上人壬生の地藏菩薩より畫像を得玉ふ事

洛陽十念寺の開山真阿上人は。本南帝の孫胤なり。ふかく世間の幻想をいとひて。富貴を觀ずる事。浮雲のごとし。遂に應永十七年。行年三十六にして本意のごとく。誓願寺にをいて。落髪じ玉へり。かくて寺内一字の小堂にこもり。ひとへに弥陀の本願に帰して。専念名号の外は。又他事もなく。昼夜無間につとめられけり。さるうち仏意にかなひけるにや。或夜の夢中に。誓願寺の如来のきたらせ玉ひて。忝も真阿弥陀佛と名付させ玉へり。これより道俗ますますうやまひ奉て。恰も生身の如来のごとくにおもへり。その時の武將普光院殿。その高德を聞召て。相見し玉へる事度々

にをよべり。或時罪科を犯するものあつて。すでに死刑に行べきに於けるを。上人ふかく憐を垂て。頻に赦免をこひ玉へども重罪のみなればとて。敢承引し玉はず。上人是非に及ずして。座を立玉ふとて口号玉ひける

慈悲の目にくしとおもふものぞなき

科ある身こそなをあはれなき

といひすててたち玉ひぬ。將軍つくつくと見おくり玉ふに。御後に圓光を現ぜり。ここにをいて大におどろかせ玉ひ。いそぎ呼とどめ奉て。まつ十念をうけ玉ひ。すなはちその所望にまかせて。かの死罪をなだめ玉ひけり。これにより公方にもますます信敬し玉ひつつ。常に華軒を此寺にめぐりさせて。十念をうけ玉へり。それによつて此寺を十念寺と名づくといへり。又此上人よのつね地藏尊を信仰し玉ひけるが。分て壬生の地藏菩薩をたうとみて。年ごろ歩をはこばれけり。或夜の夢中に。壬生寺の地藏尊まのあたり来現し玉ひて。上人に告玉はく。汝我を信敬する事そのころざしいたつてふかし。汝に我形像をあたふべければ、はやくまうできたるべしと。上人ゆめさめめて。歡喜のおもひを生じつついそぎ壬生寺にまうで玉ふ。しかるところに。かの寺僧の中にも。又ふしぎの靈夢を感じられしかば。各奇異の想をなして。試に御厨子をひらいてこれを見るに。はたしてひとつのまつるものあり。あやしみてこれを披見するに。ゑかける地藏の尊像なり。ゆめの御告は。此御事にこそと各感嘆して。すなはちかの畫像をささげつつ。真阿上人のかたへおもむきしに。おもはずともみちにて行あひ奉しかば。夢想件のあらましをかたりて。これを上人にまいらせけるに。上人かの畫像をえて。よろこび感じ玉ふ事かぎりなく。常に敬礼し玉ふ事日ひさし。上人遷化の後すなはち十念寺の寶殿におさまりて。今さらむかしの名ごりをとどめたり。かくてあらかじめ臨終の期をしり玉ひて。沐浴剃髮し。威儀をととのへて佛前にむかひ。香を焼花を摘て。端坐合掌し。一心に念佛して。禪定に入が如くに化し玉ふ。時に永享十二年七月二日。御とし六十六なり。異香薫じ紫雲、霞等の瑞相。及平生の異跡、委くは誓願寺の緣起。及念仏功德集。緇白往生傳に見てたり。按ずるにむかし北條四郎時政の猶子行政に。壬生の地藏菩薩。凡僧と化し來て。自二銘二振の寶劍をあたへ給ひて。しかもその劍の因縁を具に示てうせ玉ひき。その後後鳥羽院の御宇にあたつて。此劍天地をひびかして。巽の方へ飛行せし事。載て當寺の緣起にあり。此ごろ或信尼常に此菩薩を信じて称名供養せられるが。或時御堂にまうでて。至心に恭礼し。寶號をとなへ居られりしに。心ねむれるがごとくになりて。菩薩自斗帳をおさせ玉ひ。軟言慰諭し玉ひつつ。ちいさき寶珠を賜と見て心さめぬ。現に手中に一顆の玉をもてり。又ひとりの信女これもひさしく此菩薩に帰して年ごろ歩を運けるが。何とぞ此御堂にころかたうおもひぬれど。女人といひしかも文仕の身なりければ。おもふにかなはぬ事をかこちて。むなしくすこしけ

るが。せめての事に。去年霜月はじめかた。壬生の堂にこもれるこちにて。ひとまなるところに。夜もすがらひとり坐して睡をしのびつつ寶号をくり居けり。すであかつきがたにいたれるころ。おぼえずすこし目睡ける夢に。地藏菩薩とおぼして。黒衣めしたる御僧のきたらせ玉ひ。我汝に舍利をあたへんとの玉ひて。手づから授させ玉ふと見て覺ぬ。まさしく受奉ぬとおぼへしが。手になきこそ本意なしとおもひながらも。ありがたくて。一心に称名しぬ。かくて程なく夜も明けるが。なをも心のこりぬれば。もしやと枕のほとりをたづね見しに。白色なる御舍利数粒。しりもそのひかりあざやかなるとぞおはしましけり。信女肝にそみつつかたじけなくよろこばしくて。その日まづ壬生寺へ参詣し。ふかく礼謝してかへりけり。此二事予まのあたり見聞し。ことにかの珠も舍利も。ことに拝見せしことなれなり。此に古今の例を合記て。今の現證をもつて。古伝の妄ならざる事をあかし。かの先例を挙て。今の靈感のうたがふべからざる事を決する耳。もし夫智者の心清ば。感應の月やどり。宿福の縁熟ば。照臨の日うつろふとのみ心得。又上代にはなをかくる事とあるべし。今末法の世にして。しかも凡愚の尼女身。いかでまのあたり。かく菩薩の示驗をかうふらんやといへるは。これ一應の言を執して。僻見に墮し。菩薩の本懷をしらずして。却これをひはうしおはる。あに其罪なからんや。そのゆへいかんとなれば。けだしおもんみるに。地藏菩薩の化は。偏に末法に應じて。機は専ら濁にある事。如来の遺囑。薩埵の悲願なり。料に栴檀の煙つきて凡二千六百四十餘年。正像の二千ははすでにすぎぬ。やうやく今末法に入り以来。六百四十餘年。しかも大集經にはゆる。愚癡堅固のはじめなり。されば延命地藏經に。帝釈無垢生。世尊にとひ玉はく。仏の滅後。法末の衆生をいかに拔すくふべしと。佛こたへたまはく。ひとりの菩薩あり。名て延命地藏菩薩といふ。毎日の晨朝にもろもろの定に入。六道に遊化して。苦をぬき樂をあたへ玉ふとうんぬん。これをもつて見る時は。釋迦如来の末法は。正に地藏菩薩の化儀のはじめなり。此理あるをもつてのゆへに。地藏菩薩の靈驗。今末法の時におほき事。經文と却符合す。あにうたがひをその間にいれんや。いかにいはんや今より後彌勒の出世にいたるまで。なをこれ五十六億七千萬歳。しかもその間の衆生をあつかり玉ふをや。今をだに末法なり。菩薩の靈驗あらじといはば。この後永々の月日又なにとはいはん。又佛むかし地藏菩薩に付囑し玉へるは。心の清智者と縁熟宿福人とのみをもつてするにはあらず。故に本願經に佛切利天上にして衆生を付囑し玉へる勅言にいはく。再人天諸々衆生等の。いまだ三界をいず。火宅の中にあるものをもつて。汝に付囑す。このもろもろの衆生をして。惡趣の中に墮せしむる事。一日一夜もする事なかれ。いかにいはんや。更に又無間及阿鼻地獄におとして。動ば千萬億劫をへて。いづる期ある事なきをやといへり。此文をもつて證するに。佛の付囑し玉ふは。所謂本には凡夫。兼には聖人をもつてするなり。又地藏菩薩佛にまうさく。唯願は世尊。慮をなし玉はされ。未來世の中。もしくは善男子善女人あつて。佛法の中にをいて。一念も恭敬せば。我また百千の方便をもつて。此人を度脱し。生死の中にをいて。速に解脱を得せしめん。いかにいはんや。諸の善事をきいて。念々に修行せば。自然に無上道にをいて。ながく退轉せしめじといへり。この語をもつて證す

るに。地藏菩薩の本願は。惣じて仏法の中に在いて。一念の恭敬をだに。なをなを捨玉はざる事かくのごとし。況前して至心に此尊を供養し。恭敬し。称念せんものをや。あに宿縁なしといつて。護念し玉はざらんや。もしそれ念じ奉といへども。寂爾として。感通なくは。木石となんぞ異ならん。しからば聖教もしるしとするにたらず。世尊の付嘱もいたづらる事となり。地藏の悲願もなきになりなん。もし又聖教の趣。及佛菩薩の嘱累・本誓のあるべき事を信ぜば。今時靈験のいちじるしき事。はたつくんぞあやしまんや。又身心不淨の凡夫たりといへども。一心に念じ奉に。その靈感をかうふる事其義いかんとなれば。夫地藏ぼさつの大悲願は。分て餘の菩薩に超させ玉ひつ。五濁の塵にまみれて。けがちはしきをもかへり見ず。三毒の焰に入。すこしの縁をももらし玉らず。所謂摩尼珠。これを濁水に入れば。その水忽に澄。牛頭栴檀これを伊蘭林に投ずるに。林すなはち薰ずるがごとく。地藏の寶號一たびも唱れば。濁悪の煩惱。頓に潔。菩薩の妙相。假にも観ずれば。散乱の妄想。忽に断ずべし。故に延命經にいはく。もしくは三途にあつて。此菩薩に在いて。躰に見名をきかば。人天に生じ。或は浄土に生ず。三善道にあつて。その名をきくものは。現の果報をえて。後には仏土に生ずと。又十輪經に。世尊地藏菩薩の功德を讃嘆して。曰。煩惱の垢を洗ことは。清浄の水のごとく。能臭穢を除ことは。疾風のごとく。衆の結縛を断ずる事は。利刀劔のごとし乃至諸の濁水の爲には。月愛珠となり玉ふと。此文をもつて證するに。地藏菩薩は只濁水にやどり玉ふのみにあらず。却濁水を澄しむ。これ末法濁染の凡夫の帰依し称念してはやく靈験をうるゆえんなり。就中壬生の尊像の殊に靈感多ことは。伏其所以を察するに。そのかみ快賢僧都。佛師定朝と心を合て。此尊像を造玉ふ時。僧都是一香三礼し。定朝は一刀三礼して。一千日に功を畢。如法信敬の薰ずるところ。全體靈なるゆえんなり。殊に持玉へる御錫杖は。むかし仏伽羅陀山に在いて。延命地藏經をとらせ玉ふ時。地藏菩薩地より涌出し玉ひしが。その折しも持玉へる御錫杖なりけらし。今この壬生の菩薩にゆづらせ玉ふ事。因縁委縁起及靈驗記に見えたり。例せばなを王子の位に即。治世の玉璽を握。禪者の法を嗣で。標信の塵尾を振がごとしこれ賞罰を天下に專にし。威慈を當世にかたふらしむる事誰かあえて間然せん。しかも此王城の南にあたつて自の浄土の方をしめて有縁の生をみちびけり。されば即穢恒淨の眼の前には。無垢世界ここにあり。一心法界の觀のうちには。伽羅陀山とをきにあらず。然ども信もつて入。縁もつて見る事。偽を容ざるゆへんなり。予にきく此菩薩の慈恩をかうふる事。ひそかに心肝に銘ず。たとひ骨をくだき。髓をくじくとも。いかなぞこれを報じたてまつらんや。今只靈驗の萬一を拾得て。聊謝徳のごろざしを表ずといふ。南無地藏大菩薩。哀愍し。證知し玉へ

予が知たる浄土宗の知識に。壬生の菩薩をふかく信ずる人ありけり。此人持病に頭痛・痔漏などありて。多年をかけてなやまれるうへに。近ごろはさしたへて。ひだりの手なんいたみて。もしは中氣にてもあらんと見ゆる程なれどうちすておかりけるが。いまは健になりて。ことに持病さへおこらずなりぬ。これひとへに弥陀如来・観音大士・地藏薩埵等の現益なりとて。慈恩を感じつともよろこばれけり。時に貞享四年十二月八日の夜の夢に。壬生寺の地藏堂へ参詣せられけるが。折ふし参詣の諸人も又六輩見えけり。かの僧御厨子の前さまに。かしこまりて。且念誦し居られける時に御厨子の戸の。自ひらける音のからりときこえければ。さてはもし地藏菩薩のおさせ玉ふにやと。ありがたうとくおもひて。まもりゐたるところにあんのごとく本尊御厨子の扉を。自ひらかせ玉ひつつ。錫杖をつきて壇上に歩出玉へり。時に此僧信感きもに銘じて。至心に三拝する時。菩薩御手にもたせ玉へる錫杖を御とりなをしありて。かの僧の頂にさしあて玉へり。此僧難遭のおもひを生じて。謹かの御錫杖を頂戴して。南無地藏大菩薩と。かの御寶号を称念するに。菩薩自南無阿弥陀佛と。高聲にただ一こととなへさせ玉へり。時にかの僧思惟すらく。我今菩薩の御前なりと思て。御宝号と称念するに。菩薩かへつて弥陀の名号をとなへ玉ふ事は。さだめて我に念佛せよとの御示なるべしとしければ。すなはち南無阿弥陀佛。南無阿弥陀仏と念ずれば。その時菩薩壇上より下させ玉ひて。かの僧の前人あゆみきたらせ玉へり。時にかの僧菩薩にむかつて。願は西方安養浄土の聖衆来迎をおがみたてこそ候へこのむね阿弥陀如来へ御申つたへあれかしと。願たてまつりければ。すなはちこれを受玉へる御かほばせなり。かの僧はいそぎいそぎと申上とおもへば。目さめぬと。此事をひそかに自しるしておさめおかれしと予いんえんあるをもつてこれを披見しぬ。そのふかくつつみ玉へるをかくあらはしぬるもはばかりなきにはあらねど。ただ一人のゆめを十万人の霊夢となやまほしくて。ここにのせ侍ぬ。又その記のおくに。自圓しおかれたることばにいはく。情このゆめを思合るに。我夢中にいて。地藏菩薩の御前なりと思て。かの薩埵の寶号を称念するに。菩薩かへつて南無阿弥陀仏とあらためとなへ玉ふ事は。これすなはち称名念仏は。阿弥陀仏の本願にして。末世時機相應の妙法なるがゆへなり。又唯一聲となへさせ玉ふ御事は。下至一声のころを教示し玉ふなるべし又案ずるに地藏菩薩は阿弥陀佛の因位なるがゆへに。果満の弥陀を念ぜよとの御事にや。其時我菩薩の寶号を改て念佛すれば。菩薩すなはち壇上よりをりて。我前へ来玉ふ事は。我弥陀の名号を称念する事。地藏大士の御ころにかなへるゆへにや。時に我菩薩にむかつて。聖衆来迎をねがひしに。これを受させ玉ふ事は。それ地藏菩薩は。六道の能化として。穢土の衆生を勧誘し玉ひ。十悪業を制して十善戒等を持しめ。浄土の正因を示て。西方へ導玉ふなる。深重の御悲願ましますによつてなりいはゆる浄土迎接曼陀羅に。この菩薩のいませる事。けだし此ころなるべし。又おもはかるに。以に阿弥陀如来は。本願經所説の一切諸佛の。一佛。極楽浄土は占察經所説の他方淨國の。一方。或は主となり伴となり。たがひにゆづり。たがひに導玉ふ事心を行て知べし。かへすがへすも弥陀本弘誓願の嘉名は。今時末法三学無分の時。安養浄土弥陀有縁の機に就て。慇懃にこれを勧讚し玉ふ事。ひとり地

蔵菩薩のみにあらず。果満の諸佛。困位の衆聖。日域の諸神。三國の衆祖。みなもつて同事なる事其證散在してはなはだおほし。ここに述にいとま  
あらず。おもふにこれ弥陀一教利物偏増の謂なるべし誰か仰奉ざらんやとうんぬん

### 三 地藏菩薩戒を授念佛を勸玉ふ事 付タリ種々靈驗の事

摂州大坂何がしの息女に。死靈生靈のあまたつきて。ひさしくなやましけるを。其身有縁の佛菩薩の夢中に屢あらはれさせ玉ひて。或は要文を示和  
歌を詠じ。或は怨靈を降し。聖境を見せしむるのたぐひ。日々種々の靈感・見聞耳目を驚。各希有の想を生じて。信敬の心を傾けり。分て地藏菩薩に  
宿縁あつく。其護念をかこふる事頗多。就中壬生の菩薩に深縁あつく。常隨影護し給ふ事。寔に有難御事なり。抑汝女子いまだねはりけれども。常に無常  
の理辨て。かねて出塵のころさしかく。三寶信敬の實あさからずぞありし。然ども先祖の靈の餘殃をうけて。日夜身心をくるしめり。はじめは靈病とも  
しらで。只醫療のみ数をつくせども。かつて其しるしもなかりき。ここにをいて親屬相はかりて。養生の爲にとて。京都へ上つ。薬餌品をうゆる  
といへども。やうやく廬扁が術つきて命棄すでにをちなんとす。此時にいたるまで。靈氣なを内に伏して。いまだ外にあらはれず。三寶又密に護して羣邪  
を押心内に入ずして。正念を失ざらしむ。其子細分明なれども。ここに述にいとまあらず。すでに怨靈分々解脱の時いたり。信女宿業消除の縁  
うめるにや。不思議の佛法力に激發せられて。物氣尽うきおぬれば。三寶の顯應もやうやくにあらはれぬ。時に元禄三年六月四日の日の刻ばかりに。か  
の信女うだうたとねいりける夢に。地藏菩薩のきたらせ給ひつ。我汝に縁ふかき事は。汝過去生にて我名号を又萬返づつ唱しその功德によつて。日夜はなれ  
ずして。汝をまもるなりとの給ひて。自甘露水をそそき玉ふ。信女又手をあげて。これをうくる事たびたびなり。菩薩又我汝に弥陀如来をおがますべしとの玉  
ひて。自御手をさして。をしへさせ玉ふを見あぐるに。忽虚空に弥陀の三尊現じさせ玉ひつ。白毫より大光明をはなち玉へり。時に勢至菩薩御手をのべて。  
かの女子の頂を摩。善哉善哉との玉ひ。又觀世音菩薩御手に輪寶のかたちなる花をささげて見せさせ給ひしが。これは汝が持物にはあらずとておさめ玉へ  
り。時に信女二菩薩にむかつて。我不淨なる頭を。勿躰なくもかく摩させ玉ひ。又信心もなき我を。かやうに護念あそばし候御事は。いかなるゆへにて侍やと申  
ければ。二尊汝地藏菩薩に宿縁ふるきがゆへに。我々もかく護念するなりとの玉ふ。時に地藏菩薩汝に父母なければ。家すなはち二親にかはりて哀慙すべし。汝  
今より後我を二親とおもふべしとの給ふ。其外愛染明王不動尊。弘法大師など種々の好相を見てゆめ覺たり。又同日の牛の刻の夢に。綿帽子三いただき給たる  
地藏菩薩きたらせ玉ひ。いろいろやまひをいたはらせ玉ひて。和讃を常にとなへよとの玉ふ。たれ人にならひ申べきやとうかがひ奉れば。ひたすれよめば。しぜん

口ずくなりとの玉ふ。又我汝に宿縁ふかければ。たえずまもるべきぞ。但我名号をとなへんよりは。ひとへに弥陀の名号をとなへよ。もはや壬生へかへるなりと仰かたる時に。信女御袈裟をひかへて尊躰諸方いく躰にもならせられ候御事はいかなるゆへにて候やと申ければ。我六道の苦を救が為に。十方に遍満次と仰られて。忽分身遍満の御形を現じ玉ひて。かの信女の身をなでさせ給へり。かくてかへらせ玉ふその御あとならずにほふ事半時ばかりとぞ。又同日申の上剋俄にねふり奉て。うだうだとしたるに。菩薩又来臨し玉ひて。曰。受戒の功德不可思議なり。汝に在家の戒を授べし。然ども汝三拝なるまじければ。汝にしたしきものを代拝させよ。これこれの佛乃至国王將軍に三拝いたさずべしと。ねんごろにをしへ玉ふ。信女ゆめながら。うつつのごとくに聲をあげて。身したしきそれがしをよびて。代拝を頼ければ。此人はやく心行て。手をあらひ心をあらためてきたりけり。時に信女申けるは。我にかはりてこれこれに三拝してたべといふ。此人やがてたつて拝をはじめしに。はや菩薩三帰五戒を授玉ふ。今一戒とて授玉へども信女戒の名をわすれぬ。菩薩又一戒あれどもこれはまづゆるすべしとの玉へり。いはゆる香油塗身戒にてありけるぞ。菩薩授玉ふことに。汝我弟子能持やいなやとの玉へば。女子能持とこたふ。此時一座僧俗。かの女子能持といふことを。一戒ごとにたしかにききて。おどろき感ず。菩薩の授玉へる羯磨の御聲は。外の人はすべてきかず。その後女子ねむりさめてかたりけるをきくに。一戒一戒分明に授させ玉へり。但つねの作法より御口ばやにして。理よくきこえけるとぞ。菩薩又曰。我戒師にたつうへは。いよいよ二親とおもはよりて。紙づみの上下に梵字のあるを御ふところのうちより出玉ひて頂戴せしめ玉ふ。かくてうへらせ玉ふとて。我今これへきたる事肉身におがむべきを汝いまだ業障あるゆへ睡眠のきたりて夢中におがむなり。随分信心おこたらす。時節をまちて菩提の願を成就せよ。さらばさらばとてかへらせ玉ふ。御名ををしきこといふはかりなかりとぞ。同五日卯の申刻の夢に又地藏菩薩きたらせ玉ひて。御うたを讀玉ふ

我たのむころをみだへうちかけて

なむあみだ仏といふぞうれしき

同日午の上剋に。まへ日忘たる一戒を思案してねふりける夢に。地藏菩薩来玉ひて。汝一戒の名をわすれたる事ふさたなり。殊に又今朝うたを詠じて。汝に告に。なにとて我名のみをとなへて。弥陀の名號をおこたるぞやとて御氣色かはりて。しからせ玉ひつつすなはち戒相は。歌舞作樂故往觀聽なり。いまあらためさづくるなり。もともと今よりひたすら弥陀の名号をとなへよ我瑠璃の玉のごとくに護念せんと作られて

弥陀仏をとなふる人はるりの玉

摂取のひかりつねにうせねば

と詠じ玉ふ。その時虚空に音樂の音又は称名のこゑすなり。その微妙和雅なる事いはんかたなし。信女たうときかぎりなくて。夢中に目をひらき見るに。丈六にすぎたる金色の弥陀如来。莊嚴美をつくし。寶幡天蓋空中にみちみちたり。時に信女菩薩にこふていはく。かやうに幡天蓋などのおほく見え候は。いかなる事に侍やと菩薩の曰汝が衣類をのこさず。三寶に供養いたさせし功德によつてかくはあるなりと。信女自かかるとけつかうなる衣類を供養いたせしおぼへいさふらはずと申せば。菩薩三寶に供養いたせしものは。みなりくけつかうに変わるなりとて。そのことはりをとききさせた玉ふ。かくて夢さめたり。又同十一午の上刻の夢に。地藏菩薩黄色の袈裟をかけ玉ひて来現ありぬ。信女なにとおぼしめ候て。御出候にやと申せば。汝くるしみまさん事ひとへに不便におもひて来れるなり。我随分これを防といへども。汝過去生にて。人にあたをなしたるゆへに。かくそのむくひをうるなり。たとひ人のことばについて。きこゑぬ事やおもふとも。かならず人なうらみそ。ただ過去よりのむくひなりとおもふべし。とかく汝がねがひ今は成就すべきぞ。菩提をつよくして時節をまつべしとの玉ひてかたちをば縁なきすみにそめずとも

こころをすみにそめよ我弟子

と詠じ玉へり。さて汝が足のいたみも。今八日のあいだなり。外邪は六人ありつれども。もはやみなみなさりたり。只一人の生靈のこりいて。汝をくるしめんとおもふなれば今一たびはくるしみきたるべし。とかく十八日までには此くるしみあるべきぞ。それすぎなは。足のいたみはすきとやむべし。然れども足はいまだ立つまじきなり。さうじて此月は汝大切なる月なり。よくよく慈悲心をおこして清浄の心を持べしなとまことに母の子をおしゆるがごとく慈愛のふかき御こころより。いとこまやかに示玉ひてかへらせ玉ひぬ。同十四日申の上刻の夢に。心も言も及がたき莊嚴清浄なる世界を見る。信女身心こころよくたうとおもふて。はるかにながめ入たるところに。地藏菩薩のきたらせ玉ひて。これは極樂の中品中生なりとの玉ひて

汝見よ中品だにあれなるぞ

上品上生おもひやるべし

と詠じ玉へり。信女願はあれへまいりたく候と申せば。有漏の身にては。中々まいる事はならぬなりとの玉ふ。時に信女あまりのありがたきに。日ごろうたよむ事をもしらざりしにふと口ずさみける

極樂は快樂の國とききぬれど

かほどにあるとおもはざりけり



とよみければ。菩薩さんだんし玉ふ事はなはだし。かくて夢さめぬ。同夜の夢に。花の帽子かづき玉ひし御僧の出玉ひて。念仏を申。善根をなして人は。極樂の花、次第次第によくさかゆるなり。悪をつくりて善をなさぬ人は。日々にその花しぼむなり。一首読きりせんとの玉ひて

みだ仏となふるたびに極樂の

花はさかへて見る事なりけり  
と詠じ玉へり。かくて十七日午の下刻の夢に。つねに見なれざる御僧きたり給ひて。けふは苦痛あるべし。さりなからもはや外邪のいとまごひぞ。ただ随分信をとりて。弥陀を頼奉れ。我より弥陀に縁ふかきぞと仰られて

たのめただ我より弥陀にえんふかき

真実心で弥陀をたのめよ

と詠じ給ひぬ。信女つるに見なれぬ。御うたなるが。いづくより。御こしなされかやととひ奉ば。ひがし山よりきたるなり。汝にもとより縁ふかきゆへ。なにがな縁にきたるべきとおもふところに。けふ汝代参をもつて。散錢をあげさせたるゆへにきたるぞ。過去よりの縁ふかければ。ただ三錢のころざしにてはや来しなり。晩までにくるしみあるべければよろしく信をとるべし。随分苦痛なきやうに。影身にそふてまもるべしとてかへらせ玉ふ。あんのごとく同日未の中刻より。外邪うき出て。くるしみきたり。俄に顔色かはりて口ばしるべき躰に見えけるが。自心をしづめて目をふさぎたるうちに。御符いたくと見てやがてしづまりけり。すでに十八日にもなりければ。かねてより外邪のかぎりもけふまでとこそ候られつれ。いかなるししかあるべきやと。各信をとりてまもり居たるに。巳の中刻にいたりて。ずるずるとねいりける夢に。地藏菩薩来臨し玉ふ。時に信女足のさきより箸のごとく成ほそきもので。そのあとより息のやうなるとの出たるを見る。其時菩薩のたまはく、あれ見よ外邪の残といふものなりと。かくて夢さめて。所々のいたみ悉平癒して。身心あらひたるごとし。其神験の虚ならざる事。各ふかく信をとりぬ。同午の下刻の夢に。菩薩又きたらせ玉ひて。躰口くたびれてさぞ迷惑にあるべし。それに心をむかはるな。諸仏のつねに護念し玉ふゆへ。あぶなき事はなきぞと仰られて

そちが身は諸佛の常に護念ある

我は影身にそふてまもるぞ

と詠じ玉ひて。かくあればとて。身をはうらつにをつべからず。我たのまずとも。護念ありとおもひて。ぶさたにいたすべからず。いよいよ信仰せよと仰られて。かへら

せ玉へり。同日未の下刻の夢に。その御かたちやつれ給ひたる御僧の白御衣をめし。ところどころ泥などにけがれ玉ふがきたり給ひて仰られけるは。我道のはたに居ものなるが見しりたまはずやと。信女いや見しり候はずと申す。僧の曰。外邪はことごとくきりて。今は本病になりたり。我うたよまんききたまへとて

けふよりは外邪はさりて本病ぞ

猶心にて信をとるべし

本病に薬のまではかなふまじ

壬生の地蔵で御くじとるべし

と詠じ玉ふ。信女本ぶくいたし候に。なをなを信をとれとはいかにととのひ奉れば。なんちが病氣も。過去の業障なるぞ。なに事も三寶の加護ならではかなひがたし。御くじにてさしづをうけ。その醫師にあふて。補のくすりを用べし。御くじの中へ。白紙を入べしとの給ひてかへらせ玉へり。これけだし道のはたにたち玉へる石地蔵にてこそおはすらめ。さだめてかりそめの縁に乗じてさませるならん。さればとほりがけにもこしをかがめ。手を合て。恭敬し。寶号をとなへなどして結縁し奉るべきものなり。此外病中に曼荼羅丸一粒服せしんえんによつて。夢に當麻にいたりて。中将姫にあひて詠歌を聞。以前結縁灌頂うちし善縁をもつて。夢中に大日如来を拝して。その教示を受の類すくながらず。所謂一滯一塵の善根結縁をも。心にかけてなすべき事ぞかし。或いはおぼへずして。つねに其冥應を得。又時にいたればかの顕益を受。其功德つねにむなしからざるなり。さて此信女かく三寶不思議の擁護によつて。靈病つめに本復し。元氣もとのごとくに補養して。七月十一日にふたたび故郷かへりけり。親類の輩枯木花さける心地して。各よろこびあへる事かぎりなく。見聞の道俗。因果を信じ。三宝をうやまふ心いやましに感涙の袖をぞしぼりける。所謂徳孤ならず。必隣ありとはこれをやいふべき。信女も故郷へかへりて後。うちつづきてつつがなく。ますます信を三寶に篤して。志菩提にかたしとぞ。凡仏菩薩の御うた。予が見聞するところだに。前後五十餘首。其靈感數十條。これみな看病のもののありのままひそかにしるしおきたりころなり。今ことごとくにしるさんも筆端かぎりなきのみにあらず。且は常世の事といひ。さのみまざまざしき靈驗を遂一分明に記列も。其憚を存ぜざるに似。又は時節因縁を告知せざる人の。あまり現なる靈驗の多を見ては。却うたがひをおこし。謗を生ぜん事をおそれて。わづかにこれを記耳。これだにそのかたさまの責をうくべきなれと。ただ菩薩の隨緣利生のふかき御慈悲を世にひろめて。自他の善願を成就せんがために。止事を得ずしてかくあらはし侍りぬ。見ん人冀は鑑宥し玉へかし。按ずるに。此記の中に。觀音勢至二菩薩の信女に汝地蔵ばさつに宿縁ふかきゆへに我々もかく護念するなりと仰られしは。おもんみるに。延命地藏經に。文殊普賢金剛藏。虚空藏。觀世音等の諸大菩薩異口同音にまうしてまうさく。世尊未來の衆生若此經此菩薩の

名をきかば。我等みなまさに此人に随順して心眼の明となり。もとむるところとして。圓滿せしむべし。もししからずば正覺をとらじと。人天衆会の前にして大誓願をたて玉へば。地藏菩薩に帰依結縁のともがらを。まもらせ玉ふと宜ならずや。就中觀音菩薩は。地藏のくどく及本願經をあまねく世に流通あるべしと。仏切利天にして。慇懃に付嘱し玉へり。まさにしるべし地藏菩薩に帰依し供養する人は。佛意に相應するのみにあらず。觀音隨喜しますと。しからば則觀音信仰の人は分而地藏のくどくをひろむべき事。たれかそれしからずといわんや。又地藏の和讃をつねにとなへよとをしえ玉ふ事。これ所謂解脫上人作玉へる地藏和讃ならし延命地藏經和談鈔の奥にしるせるがごとし。此ごろますます世におこなはれて。となふる人これおほし。文言殊勝にして能人を感じしめ。意旨哀切にして。信を發にたよりなり。今菩薩のかく自すすめさせ玉へる事。さだめてふかきゆへあるべし。菩薩又但我名号をとなへんよりは。弥陀の名号を唱よとの玉ひし事。つつしんでおもみるに夫阿弥陀仏の尊号は。萬徳合成の佳称にして。大願成就の果号なり。無上甚深の法鉢を具して不可思議の功德あり。ことに此信女彌陀尊に縁あるゆへん地藏菩薩よりも益ふかき事。此記の中に見えたるがごとし。これひとへにすすめ玉へるゆへなり。抑地藏菩薩は只弥陀の名号を唱事をすすめ給ふのみにあらず。もとより諸佛の名をとなふる事をすすめ玉ふ事。いはゆる本願經の稱佛名號品のごときこれなり。又極樂世界に往生せよとのみをしへ玉ふにはあらず。他方の淨土に生ずる因をとき玉ふ事は。占察經の欲生他方現在者以下の文のごとし。然に分別しておほくは弥陀の名号をすすめ。極樂淨土をねがはしめ給ふ事は蓋これ時に約し機に依なるべし。又地藏菩薩の寶号のみをとなふるは。ただ三惡趣を脱して。人天の果報を得のみにして淨土に往生し。佛道を成就する事かなひがたしと説は。これただ私の僻見にして。頗公論にあらず。いかんとなれば。延命經にとき玉ふ。若は三途にあつて此菩薩にをいて體を見名をきけば。人天に生じ。或は淨土に生ず。三善道にあつて。其名をきくものは。現の果報をえて。後には佛土に生ずと。見躰聞名の益すら。なをかくのごとし。いかにいはんや常に宝号をとなへて。一心にたのみてまつらんをいてをや。只死して往生するのみにあらず。地藏菩薩の大神通力をもつて。いける時に其魂を攝して。淨土を見せしむる事。古今其例すくなからず元亨釋書及地藏靈驗記等にしるすがごとし。今予が見聞するところも又すくなからず。もし淨土にみちびき玉はずといはば。なんの爲にか。淨土聖衆の枝に入て無邊身と現じ。無佛世界の中にをいて。能化導師と呼ばせ玉はんや。もしそれ因果相即し。眞假不二の妙境界を論ずるにいたつては。弥陀即地藏地藏即弥陀なり。所謂蓮の花と實と同時なるがごとく。金の色と躰と分べからざるに似たり。故に占察經に堅淨信菩薩。世尊に末法修行の要をとひ玉ふ時。佛自これを説玉はずして。すなはち地藏菩薩にゆづり玉へり。時に堅淨信。佛にまうさく。如来世尊は。無上の大智なるに。いかなる意にか説玉はずして。地藏菩薩をして。しかもこれを演說せしめんとするやと。時に仏堅淨信に告たまはく。汝高下の想を生ずる事なかれと。乃至ひろく地藏菩薩のくどくはすでに満じ玉べども。本願自在力によつて。かりに菩薩とあらはれ玉へる事をとき玉へり。智旭これを釋していはく。

衆生本跡さだまりなき事をしらざる時は必仏をもつて尊とし。菩薩を下とす。これ妄想分別なり。この分別あるによつて。堅信の法門に入がたしといへり。こをもつて占察經に。地藏自一切時一切処に。つとめて我寶号となふるによつて。一心の善根増長する事をえて。其意猛利ならば。地藏菩薩の法身と。一切諸佛の法身と。我自身と體性平等にして。二なく別なく。不生不滅にして常樂我淨の功德を圓滿す。これ帰依すべしと觀ぜよとすむ。これをもつて見る時は。地藏菩薩或は諸仏及弥陀の名號となふる事をすすめ。或はをしへて。自の寶号を稱ぜしめ。又機根成熟のものにいたりては上にしるすがごとくに。三平等觀を修せしむ。これ予がさきにいふ時により機によつて。八面に打開し。両手に分付するにあらずや。其自在無礙なる事。本一定の法なければなり。只願は修することのよろしく我機縁をかんがみつ。えらびてこれをとるべし。みだりに偏執の心を生じて。かろろしく高下得失を論ずべからず。夫阿弥陀如来と地藏菩薩と同異深秘の義は。ここに容易にあらはしがたし。もし其蹟をしらんとほつせば。事相に就さらにとへ

#### 四 壬生の地藏菩薩にいのりて両眼ひらく事

壬生寺のうち南の坊につかはれる徳安といへるもの。もとは伊豫の國のものなりけるが。主人にともなひて。ひさしく壬生村に居住しけり。かくて又具せられて。本國へくだりぬ。そののち眼病相わづらひけるが。いろいろ療治すれどもかなはずして。両目ともにつぶれけり。それゆへ扶持もはなれて流浪しければ。今は故郷にもたまりかねて。むかしのよしみをしたひつつ。都へのぼり壬生村へきたり。人のあはれみをもつて。月日をおくりけり。かくて大願をおこして。毎朝壬生寺南門の前なる川にて垢離をとり。夜は大床にこもり居て。今一度両眼ひらかせたび給へと。七十五日を限。丹誠をつくして祈けり。すでに七十五日の夜にあたりけるゆめに。地藏菩薩の御厨子の御うちより。貴僧一人と白張を着玉へる神官一人と出玉ひぬ。時にかの神官。あの盲目の。あまる目の盲たるを悲て。いのり侍に。治してとらせばやと存ずと仰らる時に。かの貴僧のたまはく。いやあの盲目をば我治してとらせ候べしとて。即御手づから薬を杓にくみて眼の中へ入させ玉ひぬ。徳安たうとくうれしき事かぎりなくて。尊重礼拝し奉とすと夢さめぬ。時に青雲といへる僧寺本願の坊より。毎日燈明をささげられけるが。きのふまでかつて見えざりし。眼の。其あかつきかの燈明のひかりのうすやかに見えければ。うれしきやるかたなくて。かの清雲へ申奉るは。こよひ地藏尊のそれがしが目をば治し給はり候つるが。きのふまですきと見えざりしその灯明の。はや見え候なりとてはなはだよろこびければ。清雲おどろいてそのゆへをとひけるに。徳安ゆめのやうをありのままに

ぞかたりけり。清雲あなふしぎやまづ我坊へきたれとていざなひゆき。よきにいたはりおきにけるがくて七日ばかりのうちに。両眼すきと明になりけり。そのはじめよりすこし細目にはなり侍れど。見ゆる事はむかしの時にかはらざるよし。その信心の勇猛なれば。かく感應もいちじるしきにこそと。僧俗ともにあはれみをくはへけり。その後南の坊澄印の扶持をえて。薪水の勞をつとめつつ。心やすく世をぞおくりけり。あまつさへ長命にして教導德應代々かはらず給仕して。つるに八十ばかりにてりんじゅうめでたく地蔵の宝号をとなへて。いきたえけり。いはゆる今世後世能引導の御悲願。徳安にをいて見つべし

##### 五 地蔵菩薩好相祈僧に灌頂をそそき玉ふ事

愚禪といへる沙門。本は武州江戸の人なりしが。雲水の僧となりて。縁にまかせて去住せられけり。天性世間の事にうとくて。佛法に親切なれば。人かへつてしたひあへり。さんぬるころ黄檗に掛搭せられける時因に地蔵十輪經を拜聞し。地蔵薩埵のことに餘の菩薩に超させ玉ひて。その功德の甚深なる事を感じし。それよりふかく地蔵菩薩に皈して。もつはら寶号をとなへられけり。つねに地蔵菩薩の陀羅尼をつたへ度思はれすれど。さりぬべき真言師のなくて。むなしく月日をすごされけるが。或夜の夢に地蔵菩薩の来らせ玉ひて。汝に我陀羅尼をさづくべしとて。即小咒をつたへ玉へり。さめて後これを思惟するに。記憶してわすれず。まことに希有の夢をも見つるものなど。ありがたきおもひて。ひそかに誦持せられけり。さるにてもこれなん世に流布する地蔵の真言にやと。又いぶかしきかたもありければ。本にもちなみふかき僧に密に此事をかたらる。此僧も地蔵の真言おぼえられざりけるが。なににてもあれ。地蔵菩薩の授玉へるとなれば。とかく信受してとなふるにてしかるべけれ。我もかかる事ききつるうへは。これ縁なきにしもあらず。いまよりともにとなふべしとて。それよりひたすら誦じられき。かくて清暇して出京し。ある真言律師のもとへ行て。法話の因に此事をかたりつつ。これなん地蔵菩薩の陀羅尼にて侍やと誦しおされけり。句言相違なく地蔵の小咒なりければ。律師もふかく感嘆せられき。かくて律師の證明をえて。ますます信じてとなへられけり。そののち去年元禄三載受菩薩戒の望ありて。則律師のをしへをうけ。三七日のあいた地蔵菩薩を本尊として。好相をいのられけり。時しも夏の事なるに。左右に腕香を焼。掌のうちは。燈を燃して。遍身汗水になりつつ。一心に祈請をられけり。其深信や通じけん。やうやく三七日にいたるころまひ。正阿弥陀如来の出現し玉へるを拜せられぬ。この僧はじめはひとへに阿弥陀如

来を信じられけるが。その行業の薰習をふけりければ。かく現じさせ玉ふならじ。さて此よしを律師にうかがはれけるに。師のいはく所謂諸佛同法身  
一身一智慧なりといへども。本尊地藏にして。却弥陀の現じ玉へる事。心境相違なれば。圓滿とはいひがたし。しかし今一たびあらため修せられん  
にはとありしに。此僧かつて疲退の心をおこさず。速に其命に應じて。ますます勇信を運かかねて四七日を期して。はじめよりもなを上げしく手香  
を焼。勇猛精進に祈求せられけるに。すでに四七日におよびぬころ。うつつに地藏菩薩の現じさせ玉ひて。柳の葉のごとく青やかに見ゆるを。水瓶  
の水にひたして。かの僧の頂上にそそぎ玉ひつつ。汝が罪ごとく滅すとぞ仰られけり。そのひややかにこころよき事いふはかりなし。はつとお  
もひて目をあき見るに。その長一丈あまりの地藏菩薩威儀端正にして前に屹と立玉へり。おどろき見るがうちに消がごとなり玉ひぬ此僧感涙をうかべ  
て律師にかくとかたられければ。律師ななめならず随喜讃嘆ありてつるに受戒のぞみを達しられぬ。まことに此人あれば此事あり。あに末世としもいはんや。我  
ともがら自の信心なきを愧ずして。却他の靈感ある事を徧するは。若嫉妬にあらずはぞも又我慢か。愚癡か。自いかんとかへり見るべきのみ

#### 六 地藏菩薩に祈て福人となる事 付地藏菩薩に福を願て利益をうる事

大和国布施郡今市といふところに。靈驗新なる石地藏ましませり。それより南五里ばかりをへだてて。下市といふ村あり。この村のなにがし。身上おちふれてせ  
んかたもなく所を立除ける時さい□い地藏菩薩の前をとほりけるが發願すらく。願は我菩薩の加被力によりて今たび富貴になし玉へ。然るにをいては。堂を  
建立しまいらせんと申て過ける。かくて大坂へ行けるが。不慮の仕合によりて。忽富貴になりけり。いまだ三年すぎざるに所願成就の礼まいりを遂。黄金十匁  
ばかりにて堂をたててまいらせき。我かつて此ところを通し時。まのあたり押しけるに右に雕付奉たる像にておはしましぬ。夫地藏菩薩十種の福の中に財寶盈溢の  
御願あれども。其れ感應をうる程の信をもえおこさず。多は自貧里にまよふぞかし。況相に著する凡夫なれば。貴げもなき石像を信敬する人は。いよいよ  
まれなり。然に此人一念の信願によつて。かく現の果報をえぬる事。一しほたうとし。又予がしりたる荒木氏のそれがし。夫婦子どもにいたるまで。つねに地藏菩薩  
を信仰しともに寶号をとなへて供養しけり。しかるにおとといの冬すでに師趨にせまりてはらひの銀不足してげれば。いかがはせんこれをゆかでは。自面をかくにこ  
そと思案をめぐらすといへども。いづべきたよりもなくて。心ぐるしく日をおくりけるに。妻なりける人。地藏菩薩の前にいでて。合掌發願して福をいのりけると  
ころに。その夜ゆめみらく。地藏菩薩の自佛壇の奥より。端のかたへで玉ひ。東の方を指さしてをしへ玉ふていなり。ゆめごころにかねの来べき方を告玉ふにこそ  
とおもふとさめぬ。ふしぎなる夢をも見つるものかなと。夜あくるをまちかねて。いそぎ佛壇にいたりて見しかば。地藏菩薩いつものところよりまへのかたへ出させ玉

ひておはしましけり。ますます希有の思をなして。此事を夫にかたりつともいたのもしき事におもひて。その日はものをまつやうにありしが。ひるすぎのころおもはざるかたより。合力をえてころのままに首尾相つくるひて。ゆたかにとしをとらせけり。しかもそのかねをこしかたは。地藏尊の指さし玉ふ方なるよし。此事したしく予にかたりて大士の深恩を感じられき

#### 七 梅ヶ畑真休寺の地藏菩薩に祈て病いゆる事

洛外高尾山のふもと梅ヶ畑といふところに真休寺といへる寺あり。此本尊地藏菩薩は。威靈におはしまして。感應もつともおほし。この本尊の前に念佛など申人の。もしくは。居ねふり居てむなく。時刻をすごす時は。大なる手をいだしてそのくびをおさへ。又はおそろしきすがたを現じて。おどろかしなどし玉へり。ちかきころ当村の喜兵衛といへるもの。利生記にしるし侍。豊後國畑中の地藏菩薩の靈驗を。真休寺の弟子智融房といへるが、かたりきかせら給けるをきき入て。さてはなに事にてもあれ。地藏尊にだにいのり奉れば。かなはざる事はなきにこそと。ふかく決定信をおこせり。その身つねにふく病とかやいふにわづらひありて。むねのつかへつよく。山坂などのぼるはいふにおよばず身をすこしあらくはたらく事さへいきどほしけりて難義しけるが。まづ此やまひをなほし。もちいんとて。やがてふしおがみてたのみとてまつりけるにまことに根ふかき難治のやまひにてありけるにたちまち平愈しけり。各現の感應に見驚て。信をおこすものおほかりしとぞ。いはゆる単直愚癡の機にしてかかる即効をもえたるにこそ。世の聡明慢の人。愚信をあざけりはらふは。実の聡明にあらざるをや。宜なるかな世尊のきびしく呵し玉ふ事や

#### 八 安井村の地藏菩薩の縁起 付靈驗の事

洛外楓野郡安井村地福寺地藏菩薩は。恵心僧都の刻玉へる御長三尺あたりの立像にておはします。慈相柔和におがまれさせ玉ひて。靈感ふしぎの薩埵なり。その縁起のやうをたづぬるに。人皇五十二代嵯峨の天皇の御宇にあたりて。此ところ仏法流布の靈地なりとて。精舎を建立しましたつ。阿弥陀如来を安置し玉へり。その後恵心の僧都。不思議の示驗をかうふらせ玉へる事あり。そのゆへは僧都台嶺に在時一乗止觀のまどのまへに晨朝のころ。すこしまだませ給ひけるゆめに。地藏菩薩のきたらえ玉ひて。我本師の付嘱をうけて。六趣の衆生を利益するにたえたり。いざさせ玉へ。我に縁あるところを見すべしとてすなはち僧都をいざなひ。山上より此安井村にくだらせ玉ひつ。僧都にむかつて。我此地に居をしめて。末世の衆生を済度し。王城をまもるべ

しとの玉ふとおぼしてゆめさめぬ。かくて僧都靈夢のいたづらなるべからざる事を思惟ましして。やがて一刀三札に地藏菩薩を造立し。すなはち夢の告にまかせて此寺に安置し玉へり。しりつつより此かた。靈驗あらたましまして。その利益をかうふるもの遠近にかずしらず。ここに中むかし此所に竹林長者といへる人あり。宿善の催にや。此地蔵菩薩を信仰し奉り。旦暮に歩をはこびて。至誠心に祈願しけり。かくて或夜の瑞夢に。此地蔵菩薩長者の枕上にたたせ玉ひ。正御聲にて。告曰。善哉善哉汝年来我に歩をはこぶ事。なんぞむなしからん。一たびけちえんのともがらをもすてず。いはんや汝功德の積をや。すなはち一の寶を得さすべければ。夙に参詣いたすべしとありて夢さめぬ。長者歡喜していそぎ翌朝参詣をいたすところに。たちまち此靈場にして閻浮團金の珠をひろひ得たり。その後やうやく家内富貴になりて。その名ほとんどかくれなし。つめに天聴に達して。寶珠山と勅號をたまはり。すなはち竹林長者といはれつつ。美名をあげて榮耀に樂けるも。ひとへに地藏の御利生なり。これによつてそのころよりいまにいたるまで。長者地藏とよばれさせ玉ひて。目出度例にならせ玉ふ。かくて年うつりてかはりて。有為のならひかなしさは。かかる伽藍の跡たえて。今はむかしの名のみなりざれども一字の小堂に地藏菩薩のみのこらせ玉ひていにしへの御願を捨て玉はず。しかれども今はしれる人さへまれにして。結縁の袖もましましなり。予はからざまにいんえんあつて此菩薩の縁起を拝見しぬ。これによつて。ころしも三月廿八日。花にしたがひ。霞を分て。ともなふ人もなくてひとり此地蔵堂にまうでつつ。尊容を拝するにも。むかしの事をおもひ出て感慨の情しきりなり。よしや富貴は風の前の塵。人の命は草上の露なにをかけたのみ。なにをかけたのしまん。むかしの長者も名のみして。かくれはてたるを見るにつけても盛者必衰の理。無常轉變のありさまをしめさせ玉ふなる。ふかき菩薩の法門にや。ただかへすかへすも我ともがらは。有為の諸願をやめて。浄土をねがひ菩提をいのらんとて本意ならめと。おもひかへしてかへりけり

### 九 京三条室町の地藏菩薩産婦の命をのべ給ふ事

洛陽三条室町東へ入町。ふしみや其のうちに。傳教大師の自雕刻し玉ふなり。三尺五寸の立像の地藏菩薩おはします。右の御手に錫杖。左の御手に寶珠をもたせ玉へる。このつね不休息の尊像にてわたらせ玉ふ。御面兒ふりさせ玉ひたれど。具足圓滿にましまして。いと殊勝におがまれさせ玉へり。むかし此ところに萬藏寺とかやいひて天台宗の寺ありしが。その時の本尊にておはしけるなり。其寺荒廢して後。此地蔵尊を叡山へ守のぼせ奉りしところに。もとのところへかへらせ玉ふべきとの御示驗ありて。今かく在家のころの。わづか一間四方なる小堂にたたらせ玉へり。まことに禅寂清淨なる山をおりて。穢に入塵にまじはり玉ふなる。深悲の程こそありがたけれ。よつて毎年七月廿四日のあしたより。其家の見世棚へ請じ出



し奉り。夜亥の刻の前後まで。諸人におがませ結縁せしむ。其靈感おほき中に。元禄二年六月のころ。此主の女房産日なりけるが十七日の夕がたに。端居して寐轉いたるに。心がたがとなりけるうちに。うつのごとくに堂内の地蔵菩薩のまのあたり来現し玉ふ。その御ありさま。右に錫杖をたづさへ。左に死したる赤子を居させ給ひて。汝此たび難産にて死すべけれども。つねに我につかふるをもつて業を轉じて。壽命をあたふるぞ。但誕ところの子は命なきなりとの玉ひてうせ玉ひぬ。かくてころはつきりとなりて。さても現なる御告をかうふりけるものかなとひとたびはよろこび。ひとたびはかなしめり。さて次の日十八日にやすらかに産したりけるに。子はして生きぬ。いよいよ示験のむなしからざるにおどろいて。我身のつがなき事ひとへに菩薩の御類なりと。ますます信をとりてありがたくおもひ侍よし。自かたりき。其女房いまもつてけんごにして。香華のつををなしけるとぞ。抑地蔵菩薩は。女人泰産の御願ましますにより。つねに帰依して寶号をとなへ。恭敬供養し奉る人は。決して難産あるべからず。凡難産のありさま。種々にして。或は数日のあいた。よるひるのさうひもなく。そのいたみたえがたく。そのくるしみつよくして。いのちあやうく正念をうしなふものこれおほし。さるからこれにて死するもの。りんじゅうをし損じて後世をとりはづすもの。其例あげてかぞふべからず。夫おもんみるに難産のいはれは只親子の宿業によるのみにあらず。經の所説のごときは。いはゆるこの不浄の氣に乗じて。百千の悪鬼きたりつつ。その便をうかがつつこの腥血をくらはんとし。又はかかる弱を見て。常にうらみをいだく生靈死靈等。妨をなさんとす。よつて非命におつるものすくなからず。然に地蔵菩薩を頼奉ともがらは。もとより大悲願ましますゆへ。其神力をもつて業障をくだす。その威力をあらはして。悪鬼をはらひ。怨霊を退玉ひ。冥に護し。頭にももつて。つゝに平産ならしむごにばさつの宿因聖女及光目女にして菩提の大願をおこし玉ひ。今かかる摩訶薩とならせ玉へば女人にをいては因縁ことにしたしく。機感相投するゆへなり。あにひとへにたのみたてまつらざらんや。ここに上京村上氏某の妻難産にして。苦痛逼迫し。眷属圍繞して事すてに危見えしところに。産婦常に佛壇に安置して恭敬し奉し。地蔵尊の壇の扉をひらいて。その上へきたり玉ふと見て。たちまちに安産して母子ともにつつがなかりき。又予がしりたる佛師の女房。つねに地蔵菩薩を信じて念じけるがある時産後に目まいきたりたちまち死して。くらくおそろしきところへをちいりしに。いづくともなく。地蔵ぼさつのきたらせ玉ひて。汝今こへきたるものにあらずまづかへりて信心をとれとの玉ふと見て。よみがへり。やがてあんおんになりぬ。これとともにちかき事にて予まのあたりきき侍ぬ。因にこにしるしていささか婦女の信をすすむといふ

地蔵菩薩利益集卷之第五

一 地蔵菩薩忍愚上人の臨終を護念し玉ふ事

泉州境法行寺忍愚上人は。もとより齋戒堅固にして。晝夜六時の礼懺。時をもたがへずつとめられけり。しかも日課の念仏三万返。中一万返は佛前にて高聲にとなへ玉ふ。其外なを世出の寺務等閑ならずぞありけり。然ところに。去年冬のはじめより。煩玉ひけるが。さのみとりしきりたる病氣にてもなかりしかば万のつとめもおこたりたまはず。又よのつね地藏菩薩に皈依して。かねて臨終の期をしらしめ玉へと祈願し玉ひつるが。此たび妹の尼をたのみて。七日の別行に入しめ。生死の實否をつけさせ玉へと。地藏菩薩にいのらせられ奉るに。七日満ずる夜上人の夢に地藏尊のきたらせ給ひて。此たひ汝金地に生ずとぞ告給ひけり。上人夢さめて。さては我願成就しぬと感喜して。すなはち十二月十八日の日没より。臨終の道場に入玉ひけり。かねて地藏の尊像を再興の為に。京都へ上おかれしに。此日しも莊嚴とのほりて。寺へかへり入せ給ひければ。上人をはじめて。各臨終の前瑞なりとぞよろこばれけり。かくて臨終の道場に入玉ひてより晝夜四度の知死期に。盥漱別々の香炉に一一焼香して衆僧とともに香讃をとなへ已。まづ十方の三寶礼する事三度次に

一心敬禮大恩教主南無大聖釋迦如來△三礼▽

一心敬禮南無西方極樂世界阿彌陀佛△一礼▽

一心敬禮南無西方極樂世界觀世音菩薩摩訶薩△一礼▽

一心敬禮南無西方極樂世界大勢至菩薩摩訶薩△一礼▽

一心敬禮南無西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆△一礼▽

一心敬禮南無大慈大悲廣大靈感地藏菩薩摩訶薩△一礼▽

衆僧相助てともに礼拝し。上人は身躰つかれあれば。居ながら頂礼し玉ふ。次に自唱ていはく。如來の本誓は。一毫もあやまりなし。願は佛決定して我を引摂し玉へ。十念。かくのごとくして念佛し玉ふ事。百聲。或は百五十聲。或は二百聲。次に引聲念佛一節了十念。又種廻向。次に又唱ていはく。如來の本誓は。一毫も謬なし。願は佛決定して我を引摂し玉へ。十念次は四弘誓願の文をとなへ。三拝して各退。上人休息し玉ふ。かかる儀式翌年正月七日臨終のあしたにいたるまで。一時の懈怠なくぞつとめられけり。其餘時は一切の世語をたつて。口に念仏たえずぞ申されける。かくて十二月二十五日の夜。專愚沙弥夢みらく。東西に各莊嚴微妙の宮殿あり。東の殿には釋迦如來。西の殿には阿彌陀如來の立玉ふ。兩堂の中間に又一の宮殿あり。上人東西の兩堂へまうで玉ひ。拝しおはつて後。中間の宮殿に入玉ふ。專愚したがつて入とするに。上人後をかへり見て。汝はこのところへ入ることなかれ。共に居よといひてこちへ入玉ひぬと見てゆめさめけり。同二十八日初夜の時上人かたつていはく。無始よりこのかたの業障なれば。何ほどつねに苦痛ありとても力及ざる事なるに。けふまではさのみしのびが

たき程の苦もなくして。念佛をつとむる事。ひとへに如来の御恩とおぼして。かたじけなくおもふなり。ただし痰おほくして。聲にさはり高聲に念佛申ことなりがたし。然ども憶念はたたざるなり。仏の相好光明にころをかけて居ば。夢やらん。うつやらん。殊勝なる事も見ゆるやうにおぼゆるなり。時に看病の僧随喜してそれはめでたき候事なり。これら及餘の念佛者の信を増しむるがために。すこし御かたあれかし。願はきき奉んと申ければ。いやそれには及ざる事なり。紫雲よりも。異香よりも念仏に過たる決定往生のしやはあるとおもへとてかたり玉はず。同廿九日の後夜過るころ上人かたり玉はく。我今夜地藏菩薩にまうしてまうさく。たとひ如来の御告こそおそくとも。地藏菩薩にはとしごろ此事をたのみ奉りしに。なにとて此たび我に死期を告しらしめ玉はぬぞとすこしうらみ奉る心にていたりけるに。菩薩示玉はく。ひたもの念佛申せよ。念仏のうちに直に仏の告知しめ玉はんと。よつてありがたく思て。こよひは一目も寝ずして。念佛したりきと。時に看病の僧。それは夢にておはしけるが。又はうつにて侍るにやとたづねければ。夢やらんうつなやらんわきまへざりきと。かくて当正月朔日の夜七時。專愚又ゆめみらく。地藏菩薩御手に宝珠を持玉ひ。上人に對してなにやらんかたり玉ふさまなんされどもその分はきこえず。かたりおはつて地藏菩薩起玉ふ。その御あとに衆僧十人ばかり相したがふて。念佛行道し玉ふと見てさめぬ。此よしを上人にかたりければ。念佛行道は葬礼の儀式なり。ころよしとてはなはだよろこび玉ひぬ。同一日の夜四つ半ごろに。半時はかり苦痛きたる時に。御舍利一粒拝服して。念仏百返斗となへ玉ふ内に苦痛すなはちやみぬ。しばらくあつく上人かたつていはく。只今又地藏菩薩来て我に告てのたまはく。この跡は知死期時に随分念仏申せとうんぬん。同六日のあさ四時に知死期の念佛畢て。上人左右に告ていはく。山より給かたる地藏尊の御舍利より光明をはなち玉ふを見るや。各見ずとこたえければ。あれあれ又筋の光時をはなち玉ふるはとて。すなはち合掌して拝せられき。同七日のあさ四半時に。知死期の念佛おはつて。しばらくあつて。さてもありがたやありがたやと三度高聲にの玉ひて。その後間もなく眠がごとくに往生し玉ひけり。茶毘の時けふりにまじはりて。各行道しけるに。臭気すこしもなく。かへつてあやしきにほひそらにかほりけるなり。或はそのかたち蓮葉のごとくなるむらさきの花ふるを見。或はそのけふりたかくあがりて五色のひかりあるを見又ははじめのおくりの時棺の四角より光明のいづるを見る。種々の奇瑞見るもの又おほかりしとぞ。其遺骨舍利となつて。五色にしてしるも堅固なるが。六七十粒もありしとなり。まことに自身のつとめといひ勝境の現前といひ。ただ自の願を遂のみにあらず。又他の信門を開玉ふ。いつつべし花実相應の往生人なりと。よつてたしかに其始終をしるして。世の同志の人の随喜にのこすといふ。吁それ阿弥陀如来の本願。地藏菩薩の護念。一は引導し玉ふ。かくのごとくに用心あらば誰か往生せざらんや。殊に浄土にいては。無邊身菩薩と現じ。弥陀の後にしたがひ玉ふ。或はおくり。或はむかふ分身自在者薩埵なり。されば恵心僧都の臨終の行儀に。地藏菩薩を加念せしめ玉ふ事。まことにゆへあるかな。いはんや上人は平生加念し玉ふをや。宜なるや志ば志ば其靈驗を得玉ふ事や。又地藏菩薩此上人の為に有縁の人のもとへ。ふしぎの感通ありしかども、今

時はじめあれば略してしるさず

## 二 念仏の行者臨終に地蔵の加護をかうふる事

江州守山宗巖居士は。三宝帰依の志厚して。十重禁を結縁し。六斎日にはかたく齋戒をたもち。心西方往生を期して。日課の念佛三萬返。毎日おこたらずぞつとめられけり。しかのみならずわきて観音地蔵の両大士に帰して。毎月十七〇八日には。大悲咒三十三遍。二十四日には延命地蔵經一卷づつ誦誦せられぬ。かくて元禄二年閏正月朔日より。痰喘のやまひにかかりて。坐臥やすからぬさまなり。されどもころざし撓ずして。痰火つよくさしおこる時は。ことに念仏をばげまれけり。病床のあたりへ女人をちかづけず。看病の人にも又辛酒肉をいましめつつ。身心いと清浄にして。死のきたるをまたれる。同九日に剃髪染衣して。臨終の式をはじめらる。すてに三時の念佛をつとめて。御手の糸をひき。ただ一すじに往生をぞまたれけり。同二十一日の夜の夢に地蔵菩薩きたり玉ひて。かたじけなくも病人の身ふしをながくさすりて。曰。その方事痰喘はすきといやすべし。熱は明日中あるべきぞ。その間誦經せよと。時に阿弥陀如来傍にいまして。水あびせよ水あびせよと。曰。地蔵尊すなはち水をそそき玉へり。これはゆる罪垢をきよむなる灌頂水なるべし。此人つねに慧心の僧都の作なる千鉢尊のうちの一尊を莊嚴し。本尊阿弥陀如来のかたはらに安置して。供養せられけるが。今は時かく現じさせ玉ひつつ。擁護の御手をたれて。病苦をのぞき玉ふるらじ。かくて夢さめ夜明てのち。一切の病苦ごとくくうし玉へるがごとし。餘熱はのこりて夕がたまでありける。かく瑞夢の相違せざるにぞ信感いやまして。行す□たのもしくぞおぼしけり。はじめやみつける時安養寺の戒山律師を頼奉るに。師すなわち悲愍心をもつて薬水を加持してあたへ玉へり。そのゆえひや廿二日の晩に御長三寸ばかりの業師の尊像。目前に現じ玉へりとて。かの人看病のものにあれを見ぬか。あれを見ぬかと。二三度申されけれども。外のものはすべて見ざりき。その時はねごとなどのごとくだいだいとしていはれるが。さめて後これをとふに。いかにもおぼしつるなりとかたられぬ。かくて同廿九日に正念に念仏して。ねむるがごとくおはられき。夫人かねて臨終の善知識をたのみおく事これかしきあかりことなり。さりながらそれをのみたのみとおもひおる事はこれ又おろかなり。いかんとなればもとより死の縁無量にして。しりもたがひの障おほかれれば。其期にのぞんで。相違する事おほかるべし。たとひ善知識にあふといふとも。生命すでに危にせまつて。身心悩亂し同盲のごとく。聲のごとくならば。其教化をうくるによしなからん。時に知識の方便ありとも。その魔縁を退。邪神を驅。怨結を解。惡業滅し。病苦を退。正念に住せしめ。観音の蓮臺に登て。弥陀の寶閣にあそばしむるがごときにいたつては。神通方便慈悲願力。あに此地蔵菩薩におよばんや。されば平生の時。かりそめにも此菩薩に縁をむすびしともがらは。たとひりんじうに業障の爲にてんぜられき。惡縁にひかれて顛倒迷妄

すといふとも。地藏の本誓むなしからずは。あに外に見のがし玉はんや。されば神昉の十輪經の疏に。地藏の二字を釋してはいく。地といふは。初なり。藏といふは終なり。所謂性徳の大地の中に衆生結縁の春のころ。はしめて一毛ばかりの種を下し。八識田中に含藏して。熟脱の秋の時。刈おさむをおはりとすと。かるがゆへに。本願經に世尊地藏菩薩を讚嘆して。見聞瞻礼一念の間もせば。人天を利益する事無量の事ならんとのたまへり。いはんやつねに菩薩に帰依せんものはたとひ野に死し山に亡とも。これこの菩薩。大神通の慈眼をたれ。能引導の方便をもつて。苦を拔衆。與玉ふ事。身より大士の悲願なり。ここをもつて延命經に仏偈をといて地藏菩薩を讀じて。曰。善哉善哉延命菩薩は有情の親友なり。衆生の生ずる時は。其身命となり。滅する時は導師となる。衆生しられれば短命にして福なしといへり。この文をもつて見つべし。地藏菩薩は只臨終の大善知識となるのみにあらず。常に隨順擁護して。不請の友となり玉ひ暗に其苦難を除て。其をして安樂ならしむ。たとひ惡業障にひかれて四惡趣に陷とも。地獄にをいて檀陀地蔵とあらはれて。鑊湯爐炭をうちくたき。餓鬼にあつては。寶珠地蔵と現じつ。飢渴の苦を脱しめ。畜生道に寶印地蔵となり。脩羅道に持地地蔵とあらはれて。大悲苦にかはり。神力魂をみちびきて。其所願に應じつ。人天淨土に生ぜしむ。このゆへに地藏菩薩不取正覺の十二大願をたて玉ふ。いはゆる第一に我もし眞を證じて後。地獄にをいて苦に代。代べきに代ずは。誓正覺をとらじ。第二に我もし眞を證じて後。餓鬼にをいて。食を施さん。ほどこすべきにはどこさずは。誓正覺をとらじ。第三に我もし眞を證じて後。畜生の嚙噉にをいて。赦べきをすくはずは。誓正覺をとらじ。第四に我もし眞を證じて後。脩羅の諍苦にをいて。和すべきを和せずは。誓正覺をとらじ。第五に我眞を證じて後有縁の衆生にをいて三昧に入ずは。誓正覺をとらじ。第六に我もし眞を證じて後。短命をおそれて。我を念ぜんに。長壽を得せしめずは誓て正覺をとらじ。第七に我もし眞を證じて後。病苦のために我を念ぜんに。除癒事をえずは。誓正覺をとらじ。第八に我もし眞を證じて後。王難を除として我を念ぜんに。恩赦を得せしめずは誓正覺をとらじ。第九に我もし眞を證じて後。怨賊をはなれんとして我を念ぜんに。速疾に遠離せしめずは誓正覺をとらじ。第十に我もし眞を證じて後。貧苦をいとひて我を念ぜんに。衣食ゆたかならしめずはちかつて正覺をとらじ。第十一に我もし眞を證じて後官位をもとめんとして我を念ぜんに。高官を得せしめずは誓正覺をとらじ。第十二に我もし眞を證じて後。臨終にをいて我を念ぜんに。其時身を現ぜずは誓正覺をとらじ。又次に我もし眞を證じて後六道の衆生の得度すべきにしたがつて。為に甘露の法を施とのたまへり。委は地藏菩薩發心因縁經に見えたり。抑此うち第五に有縁の衆生にをいて三昧に入ずは。誓て正覺を取じとの御願あるをもつて。念仏の行者。すみやかに三昧發得せんとならば。あに悲願を仰奉らざらんや。又我臨終の善知識にたのみ奉るべしといへる事。幸に第十二の御願に相當す。いはゆるかげの形にしたがふがごとく。ひびきの聲に應ずるがごとし。感應のむなしからざる事。上人と居士にをいて見つべし。悲願といひ。現證といひこれみづからかたがはずしてしりも又他をすすむるゆへなり。

三 壬生の地蔵菩薩真言加行の中の病難を除玉ふ事

予がしりたる僧去年真言四度の加行をつとめられけり。本より地蔵尊に帰して。ひとへに悉地圓滿をぞ祈られける。時に七月廿五日金剛界の開白して。修せられけるが。八月中旬のはじめより。咽いたみいでて。後には粥やうのものもとほりかね。やうやくおもほほどにて調養せられけり。然ども毎日の修法は。一座も懈怠なく勤られしが。日を逐疲おぬれば。ころしも八月十五日の初夜のころ。壬生寺の本堂にまうでて。我弱質不器の身をもつて。かく甚深の密法に入事。是併菩薩の護念し玉ふところなり。然に今この障難によつて中途に破壇せば。遺憾なんぞつきん。唯願は擁護の慈眼をたれて。我鄙誠を鑑玉へ。日歩を運て祈願し奉るもこにてこそ候へど。且はころみ且は嘆つ。敬礼をつくしてかへられぬ。かくてふしたりし夢に。面のいろ真黒にして。その身は焼ただれたるごとくにいときたなげなる法師の入来て。かの僧の両の手をとらへて申けるは。その方前生のありさまこれを見るべし。このゆへにかかる障もあるぞかし。必おこたる事なかれ。必おこたる事なかれと。三度いひてかの僧を引たて玉ふ御顔を見るに。はじめのくろき色変じて。忽しろくうるはしき相好となり玉ひて。端嚴殊勝に拜させ玉ふ。さては地蔵菩薩にこそと心つきぬるうちに。もち玉へる御手をはなして出玉ふ。御あとをしたひてゆくに。本堂のかたへおはしますと見て。夢さめぬ。時まさに中夜の過なり。あまりありがたくおもひつ。いぞきおきて本堂へまいり。至心に禮謝して小咒百返法施し奉り。それより本堂一返まいりてかへりぬ。かくて程なく後夜のつとめにかりけるに。いつもとちがひつ。のどのいたみもやはらぎて。陀羅尼もくりよくなりければ。いよいよいさみも来ぬ。すでに修法おはつて下座しつ。試に粥を用るに。咽のはれ引てやすかるにとなりけり。それより次第に食付て。修法退轉なく遂に護摩まで修しおはりけるも。ひとへに壬生の地蔵尊の守護力なりと。ひそかに予にかたりてよろこばれけり。まことに願に密に。道俗男女のへだてなく。いのれば應じ玉ふなる大悲の程こそありがたけれ

四 地蔵菩薩夢授經の縁起 付タリ高王觀音經の事

江州に誓深といへる信尼あり宿善の感ずるところにや。九のとしはじめて弥陀の三尊の空中に現じ玉へるを拝てより。三寶信敬の心ふかく。酒肉をいとひ。光明真言をつたへて。日々おこたらずぞとなへけり。そのち地蔵菩薩を信じて其寶号をとへ多年帰敬の誠をぞつくしけり。もとより出家の望ありけれども。父にははやくおくれひとりの母に具していたりければ。心にまかせずして日をおくりけり。しかれども齋戒しばしば持て。欲深の境にふれず。時に年すでに十六。貞享五年二月十四日の夜の夢に。としごろ十四五と見えたる僧の其躰温和なるが。黒衣を着玉ひて。右の御手に書物二巻もち玉ひ。ひだりの御手にはくろ

き念珠かけさせ玉ひ。かの信女の枕もとにたち玉ひて。汝はかく虚々とくらし居ものにあらず。はやく此書物を取りなほし候へと仰られしかば。これをうけと奉りて。すなはちおきあがりぬるとおもふに。その座に圓堂見えたり。其扉ごとく戸ざせり。時に堂の右のかたよりとしより玉ふ御僧の末廣のあふぎもち玉へるが。汝これよりて。此堂の戸をひらけと仰らる。いかがともだし居けるに。かさねて仰せらる旨ありければ。いなむにたたずして。其とびらをひらくに。ひろかるなる堂にて。正面には其御すがた廣大に見えさせ玉ふ。金色の坐像の如来まします。たうとさかぎりなくて合掌し居けるに。その座より一段下に白まくはりて。とりしつらひたる一間あり。時にそのうちよりとしごろ廿四五と見えぬる御僧の。すみぞめのころもにくろき袈裟かけ玉ひたるが出玉ひて仰せられけるは。汝此ところへはよくこそきたりたれ。此きざしをあがりて。よくよくおがめとの玉へば。仰にしたがひて。階を三だんあがるに。それより此御僧さきへあがらせ玉ひつとくとおがみ奉れ。これは汝前生にて常に念じ奉ぬる寶生如来なり。さてなんぢ女人なれども衆生済度の方便をおしへんとの玉ふ。時に如来のひだりのかたの座上に大なる白蓮華あり。その前へよび玉ひつ。これにしばらく待との玉ふうちに。その御長六尺ばかりなる千手観音来現し玉ふ。右の御方の下より。五目とおぼしえし御手に。瑠璃の壺のやうなるもの居させ玉ふぞ。そのうちよりそのいろしろく大さむくろじつぶ程なる物を取り出させ玉ひて。これを口にくむべしとの玉ひてたまはりけり。すなはち手にうけて口にいろに。その味たとふるにもなし。時に観世音ちかづけ玉ひて仰せらるるは。その方は地藏菩薩に有縁なれば。衆生済度の為に。菩薩の經を授べきぞとて。くりかへし二遍まで御つたへありけり。時に信女傍におはします黒衣の御僧にむかつて。ただいま御をしへあそばし候御經を御書候てたまはれとのぞみしかばかの僧間もなき事にてあれば。となりの浄入にうつさせよとの玉ふを。よくよく見奉れば。黒柄の御錫杖つかせ玉ふ地藏菩薩にておはします。かくて坐をたち玉ふとおもひしかば夢さめたり信女希有の靈感を歡喜して。あはれはやく浄入の来ませよかし。わすれざるさきにうつさせ侍りなんとおもふところへ浄入ふと入きたれり。何としてかは早朝よりきたらせ玉ふととふに。唯なにとなくしきりにまいり度ところのありてと申されしにこそ。菩薩の暗にもよまし玉ひけるなるべしとよろこびて。すなはち夢のとをりかたりて書寫せぬ。浄入も驚感じつつ。書寫しおはつて。予にしめ侍る其文に云

南無延命地藏菩薩。南無釋迦滅後。付囑地藏菩薩。南無西方極樂。大慈大悲阿彌陀佛。念仏一念發起。極樂往生。真實信心。念佛一念十萬通。南無佛。南無法。南無僧。真實信心。念佛十念。草木衆生。極樂成佛。南無大悲觀世音。脇士延命地藏菩薩。引導加葉尊者。阿難尊者。普賢菩薩。解脫菩薩。無盡意菩薩。地藏菩薩。惡事災難。毒藥消滅。願以衆生。極樂往生。南無般若波羅蜜と予つぶさに此事をきいて。再四頂戴し數遍讀誦して。かたく不思議の事なりと感ず。時に浄入とりあえず。まづ假名に書て見せられければ。謹これを文字に

なほし見るに。普賢菩薩をふんぎんぼさつとかきたり。ここにいたつて茫然として筆をさしおく。かかる菩薩の御名いまだきかざるところなり。これ予が見聞のひろからざるにこそ。若し普賢菩薩をききまどひけるにや。うつしあやまりたるにやと。又淨入をつかはしてとはしむるに。たしかにふんぎんぼさつとおぼえ侍よしきこえければ。こころえがたくてまづやみぬ。時にその夜かの信女の夢に。地藏菩薩のきたらせ玉ひて。ふんぎんにはあらず。普賢菩薩なりとの玉ひしとききにこそ。信感ますます骨に徹して。いよいよ此經の因縁。根ふかく蒂固して。一應あさはかなる好夢の類にはあらざる事をしりぬ。ことにそのころ予たまたま觀音夢授經を拜讀して以為。いづくぞ地藏菩薩にもかくのごときの小經あつて。普兒女に結縁して地藏菩薩の化益をひろめんと。かく心におもふのみにして。むなしく月日をおくりしに。はからざるに今この感得を聴て。歡喜踊躍する事。貧が寶を得たるがごとく。渡に船を得たるがごとし。因梓に銕て世にひろむる事。今にいたりて已八年。其時予を謗笑人あつていはく。子あだなる童女の夢を信じて漫にこれを板行す。是只汝が愚なるをあらはすのみにあらず。抑又偽經の廣罪に類せんかと。予時にすなはち夢授經の辨を述してこれを謝しぬ。漢字にしてしかも文ながければここにこれを載ず。今ほば其板行するゆへんをいふに。この經もし聖教量に相かなはずは。たとひ靈夢たちといふにとも又慮るなきにあらず。しかるに全篇百四十五字。一句一字としてあやしむべきころなし。所謂地藏菩薩。仏の付嘱を受けて。西方極樂に引導し玉ふところ。真實信心ならば。平生他念の行人も。臨終の一念十念も。共に極樂に往生せんと。意乃至十念の弥陀の本願を含。文有情非情悉皆成佛の直道を説。惣じては三寶に帰依せしめ。別しては菩薩羅漢の名をとなしむ。もしかくのごとくに信じて。これをよみこれを修せば。只極樂往生するのみにあらず。このくどくによつて現世一切惡事。災難毒藥等の祟なく。二世の安樂を得。畢竟般若波羅蜜に歸依すべしと。これ蓋此の經の大意なり。文相簡古にして連屬せざるに似て。しかも其意あまりある事。恰陀羅尼の對譯を見るがごとし。正に是地藏菩薩。今世後世能引導の本懷。究竟到彼岸の悲願。納この經にあるのみ。所謂仁宗皇帝の仁孝皇后の夢感大功德經の後序に。これを充ときは法界に周遍し。これを敎ときは芥須弥を納とりき玉ふ。此經も又併て按じつべきか。これ信受し讀誦せんもの。其功德斗べからざるゆへんなり。但童女の授をもつて。信受するにたらずといふ事。我見はしからず。若小才学あらん人のこれをさづかれりといはば。かへつて信受するとも速ならじ。しかるに假名文字にだにうとき童女の。かかる妙文を誦。殊に經中に列ところの。無盡意菩薩は地藏菩薩の因位の時。亡母の生処を告玉ひし羅漢の菩薩となり玉ひし名なり。又解脱菩薩は是又地藏菩薩會聖女たりし時の御母たりしが。地藏菩薩の孝心によつて。ついにかかる菩薩となり玉へるなり。因縁具に本願經に見えたり。かく深宿世の因縁ある事。童女の會聞しらざるところなり。しかるに此經に其名を列玉ふ事。これ我信するゆへんなり。涅槃經に法によつて人に依ざれ。義に依文依ざれと。あにこのいひにあらずや。曾聞世尊の昔は。羅刹の偈を唱を渴仰して身命を擲。帝釋のいにしへは。狐の法を説を重じて錦の茵を重玉ふ。これによつてこれを



見るに。たとひ童女自どうにょみづからとくとも其言理あるにをいては。あにそれ用もちぎらんや。いはゆる君子は芻蕘そうとうの言をも捨ずと。いかに況夢中たりといへども。寶生如来ほうしやうこれを證しやうみょう明し。観音直かんおんじきにこれを説玉とくふをや。経と名て流布るふする事又なんぞあやしまん。しかりといへども。もし先例せんれいなくは。いき侍るはばかりを存ぞんすべきか。しかるに今見聞けんもんの及およぶところを考かんがへ。或は夢に經を授まづけ。法を聞きく。咒しゆをつたふるのりい。或は夢中相承さうじやうの法門ほうもんのごとき。異域本朝いいきほんてう其例れいすくなからず。信しんじて世に傳布でんぷする事。最もおほし。釋書泰澄たいてうの傳の論にいへる事あり。其化の時けときいたるにあたつて。或はつたててきたり。或は感じて得うる。咸一なりと。今や地藏菩薩ぢざうぼさつの化縁えん時いたつて其機あるもの。かくのごときの經を感得かんとくする事めに信受しんじゆせざらんや。又其例證の中に就ついで。其能似事よくにたることの二事をあぐるに。一にはいはゆる古より和漢わかんに流布るふする観音夢授經かんおんむじゆきやうこれなり。抑そもこの観音夢授經といつは。南北朝の時なんぼくてう。宋の文帝元嘉二十七年ぶんでいげんか。彭城ほうじやうの太守しゆ。王玄謨わうげんぼといひしもの、軍にまけたる科とがによつて。主人蕭斌しゆじんしやうびんいかりをおして。帳中ちやうちゆうにしほりおき。すでにころさるべきにきはまりける前夜の夢に。ひとりの沙門しゃもん告つていはく。汝此観音經を千返讀誦べんどうじゆせば。このたびの難なんをまぬかるべしと。よつて授まづけていはく

觀世音。南無佛。與佛有因。與佛有緣。佛法相緣常。樂我淨。朝念觀世音。暮念觀世音。念々從心起。念佛不離心。八十句四十二字

玄謨げんぼ不思議の思おもひをなし。夢ゆめさめて。一心にこの經を誦じゆじて千返べんにみてしかば。沈慶之しんけいしといへるものの諫いさめによりて。蕭愍心しやうみんしんやはらぎつつ。これを助たすける。又もとのごとくに官かんをかさねて。開府儀同三司かいふぎどうさんしにいたり。南豫州なんよしゆうの刺史ししにうつり。八十二歳さいにて順次じゆんじの往生わうじやうとげにけり。これひとへに大慈大悲だいじだいひの利益りやくなり。その後東魏のちとうぎの孝靜帝こうせいだいの天平四年に。定州ていしゆうの孫敬德そんけいとくといひしもの。曾自かつもつちから大士だいしの尊像そんざうをつくりて。常に敬つね礼きやうらい信しん奉ほうしぬ。しかるに前業ぜんごうの感かんずるところか。おもはずも盜ぬすの同類どうるいにさされてとらへられうちたえけるに。そのいたみたえがたかりければかくからき目にあいんよりは。よしや命を果はさんにはしかじと思切おもひきつて。つねにおちにけり。其夜の夢に。ひとりの沙門しゃもんこの観音經をおして。これを唱となふる事千返せんべんせば。まぬかるべしと。敬德夢けいとくゆめさめてふかく信じてこれをよむすでに刑場けいじやうに趣おもむくにおよびて。千返べんにみてり。太刀取首たちとりくびをうつに刀段々かただんだんにおれたり。別の太刀にとりかへてこれをきるに。おるる事もとのごとし。三たびかゆるに三たび折おる。各大に驚おどろき。不思議の想そうをなして。このむねを丞相高歡せうしやうかうかんに訴うたふ。高歡これをききただして。其罪つみにあらざる事をしりぬ。因表よつてひやうをもつて奏聞そうもんするに。天子てんし歡感えいかんあさからずして。其死しをゆるし玉たまひけり。かくてこの經を書寫しやせしめて。ひろく天下に流布るふし玉たまへり。さて敬德希有けいとくきゆうの命を助たすけり。我家にかへり。常につかへ奉る観音の尊像そんざうを拜はいし奉に。御うなじに。三刀の跡ありけるなり。その後大宋の仁宗皇帝にしゆうかうていの嘉祐年中に龍學梅摯りやうがくはいしが妻盲目つままうもくとなり。悲かなひこれを上あにいのるに。一夕白衣ひやくゐの人きたつて。この經をおして誦じゆせしむ。ひとへに信じてこれを讀よめば。即すなはち両目りやうもくひらけたり。この經を世に高王かうわう観世音經とも。十句観世音經とも。救生きうしやう観世音經とも名づく。されば大宋の清獻公趙抃せいせんこうてうへん居士。此經を板行はんかうして。あまねく世にひろめ玉たまへり。この公は蔣山しやうざんの泉禪師せんぜんじ。天鉢てんぱちの元禪師げんぜんじに參まじて。狗子無佛性しゆにぶつじやうの話を提てい

撕して。或時 凡により雷を聞て。心地を發明す。かかる人なれども。利生の心のふかく。重法の信もあつうして。匹夫匹婦の夢授を輕ぜずして。かく天下に流布し玉へり。又夫孝靜帝は。萬機の政にいとまなく。一身の榮にまぎれさせ玉ふべき御身なれども。万民の離苦得樂を覺しめて。かく天下にひろめさせ玉ふぞかし。況我なまじひに沙門の名をけがし。弘法利生の員にそなはりながら。かく眼前三寶結縁の大なる。拔苦与樂のいちじるしきを見ながら發揮し流通せざらんや。もし又これを誹謗し。留礙せんにをいては。上は菩薩の善巧を失。中は王公の仁心にはぢ。下は童蒙の信路をふさぐにあらずや。觀音夢授經の事具に佛祖統記。佛祖通載。通鑑綱目。歴史綱鑑。南史。編年通論。萬姓統譜。氏族拜韻。法苑珠林大藏一覽。佛法金湯編。釋氏稽古略十八史。琅瑯代醉編等見えたり。今かく委これを引き事。只この例證とするのみにあらず。その出處正。靈驗のあらたなるを述。觀音有縁の男女。これを信誦せん事を欲。幸に伴てすむるゆへなり。二の例には。大明仁孝皇后夢感仏説第一希有大功德經是なり。上下二卷。經文十八紙。今現に藏經史の字の函にあり。この經は大明の成祖文皇帝の后仁孝皇后の夢に。觀世音の授玉ふところなり。今略して其自序の意をのぶるにいはく。洪武三十一年正月朔日に皇后しづかに閤中に坐し。香を焼讀經し玉ふ時。心禪定に入がごとくになり玉ひしところに。忽紫金の光ありて。夢のごとくに觀世音菩薩光の中に現じ玉ひ。足に千葉の寶蓮華を踏。手に七寶の數珠を持玉ふが。皇后いざなひて。普闍崛境にいたり玉ふ。其層樓墨閣の粧嚴。異葩奇草の穠艷なる皇后の述ところを見るに心を驚し目を悦む。一一しるすにいとまあらず。時に觀世音の曰。皇后まさに大難に遇とす。故に引接し來り。夫如來の常に説玉ふ第一希有大功德經は。諸經の冠として。もつて諸の災を消べし。誦持する事一年精意にしておたらすは。須陀洹果を得べし。二年に斯陀含果を得。三年に阿那含果を得。四年に阿羅漢果を得。五年に菩薩道を成じ。六年に佛果を成ずる事をえん。世人福德淺薄にして。歴劫いまだきかず。后妃まさに天下の母として。福器深厚にして覺性圓明妙湛なれば。付嘱してもつて生靈を拔濟せしむと。すなはち淨餅の甘露水をもつて。后妃の頂にそそぎ玉へば。后妃の心身清涼になりて。萬慮俱に寂なり。憶念明了にして。遺忘するところなし。遂に一卷の經を出てこれをつたへ玉ふ。即第一希有大功德經なり。后妃さづかり玉ふ事一偏にして大義あらまし通。二偏にして了然として開悟し。三偏にして記憶して遺ことなし。かくて人聲におどろかされて夢さめり。且は喜。且は異て。これを書しるすに一字をもわすれず。只口に異香ある事をおぼふ。よつて。これより日夜此經を持誦す。かくて其告のごとく次のとしの秋兵難おこれり。皇上外に防城卒内につかるといへども。我此經を誦するをもつて。恬然として怖畏する事なく。其後怨敵退散し。天下一統にとしるし玉ふ。かく此經弘通の爲に。皇后自具に其因縁を書し玉ひ。仁宗及漢王趙王各跋文をしるして。天下に流布し。一切經藏に入玉ふ。今本朝までたたる事。所謂小因縁にあらざるの。其經文の甚深なる。其來由の奇特なる拜読してしんぬべし。此等の例あるをもつて我この夢授經を刊行する事。庶幾は誤なからんか。そののちかの信女本意のごとくに。尼になり。地藏菩薩

薩の告つげによつて齋戒念仏さいがいねんぶつの行者となりけり。近ごろ又地藏菩薩より夢中に舍利を感得しぬ。其事そのこと委まづ舍利驗論ぜりけんろんにのすればここにあらはさず。ともかくにも利益衆生の悲願ひやくはんよりひろく結縁けつえんし玉ふなる。菩薩の御ごころぞありがたけれ。又地藏菩薩の御經を千手觀音の授さづさせ玉ふとの事。ふかき因縁いんえんあれども事なかければこれを略りやくす

##### 五 地藏菩薩夢授經利益の事

京油あぶらの小路七文字屋こうぢもんじ。何がしの子こに。乙之助といふありけりいとけなき時より。天性三寶てんせいさんぼうをうやまひ。しかも慈悲心ありて。殺生をこのまず。去さるころ長崎徳苑ながさきとくえん寺真常長老しんじやうちやうろうの上京の折ふし。因ちなみに地藏菩薩の功德を讃嘆し玉ふとききてますます信心をおこし。やうやく七歳の時みづからほうみやう自法名みづからほうみやうなどこひて。つねに地藏の寶号をとなへけり。御類から希有の靈夢など感じけるが。ひそかに徳苑寺長老にはかたりけれど。よの人にはふかくつつみていはざりけり。時に元禄二年閏正月四日の夜その家ちかきところに火事出来たり。家中あはてさはぎて。道具などとりおきぬ。しかるに此乙之助鴨かもを養やしなひおきけるが。兄あにのそれがし。此鴨の焼死事をおもひはかりて。古藏中へうち入て。戸びらをたてけるが。事急きうなりければ。その時あやまちてうちおりけるにや。すでに類火るいはをのがれ夜明て道具などとりおしぬる次に。これを見るに。かの鴨あしこちおかれてばたとしけるしきみいたり。乙之助のありさまを見て不便びんなりとてひたなきになく。親兄おやあにも汝さやうになきたりとて。かれがあしのなほるべきかは。さほどにかなしくは日ごろ汝が信じ奉る地藏菩薩にいのれかしと。かれが心をなぐさめんと。戯たはむながらいひけるを。乙之介えいけいげにもとおもひけるけしきにてなみだをおし拭ぬぐ。壬生寺のかたにむかつて申けるは願は地藏菩薩此鴨かものあしのおれたるをつぎるはれぞの御禮らいには。七日が間夢授經百巻よみてまいらせんとて。かの地藏菩薩夢授經をつねにおぼへて讀よめるが。それより毎日おこたらずぞよみけり。すでに七日にみてる夜夢うちおどろきて。母をおこしてかたりけるは。ただいま地藏菩薩のきたり玉ひて。さのみなげきそ。我鴨われのあしとなほしえさせんと仰られけるなり。あらとしれしやとこころふ事かぎりなし。母その地藏さまは。いかなる御すがたにてやありしとたづねければ。いや生いたる地藏さまなりとぞこたへける。夜明ておのおのおかしがりて。いかであのおれたる足のつがれんやなどいひしろひけるが。さるにてもかれがこのころの信願しんくわんよのつねならず。小兒こなればとて菩薩ぼさつあに賺すかし玉いんやとて。かの鴨を見るに。その足あしをはこびけるありさま。昨きのうるまでとは。様やうかはりていたみも和上下やはらみあげおしもころよく見ゆれば。各舌おののをまきぬ。かくて程なくもこのごとくになほりけるにぞ。ただかく真心まに信しんずれば。速すみやかに利益をうる事の虚きよならざるを信得して。面々めんめん邪智じやちの多事おほきをはちぬ。そのうち猫ねこのきたりかの鴨をおびやかし危事あやうきたびたびなれば。又乙之介一心に地藏尊へ立願りつげんしければ。そのくちは猫もふつにきたらずなりぬ。かくて兄あにのはからひにて。かの鴨を龍安寺の池へはなちけるとぞ。正予まさしくにか

たらせけり。所謂後世おそるべし。あに宿願によつて来ものか。前程はかりがたし。冀善縁を増長せん事を

#### 六 同夢授經を讀て地藏の加護をかうふり狂病愈ぬる事

一条千本のわたりにすめる古道具など商ものの女房去年の冬のすえに。いかがはしたりけん心そぞろになりぬ。さのみ物にくるふ程の事はなかりけるが。只時によりておこりさめありけり。そのおこりぬる時といふは。只そぞろことをのみいふなめり。了因といへる法師のつねにそのところへゆかれしがこれをあはれみつ。地藏菩薩の夢授經ををしへ授て。只ひたすらに此御經を讀。地藏の寶号をとなれば。そのしるしあるべしとてかへられぬ。狂女これを信じて。心正折ふしは夢授經寶号おこたりなくぞとなへける。かくて七月十五日のあさふと立おければ。夫あやしめておもひて。これはいづくへゆくぞとがめれば。紙川の万日寺へ詣なりといふ。とむれどもきかざれば。せひなくあとについてかくれゆくに。程なく萬日寺につきぬ。狂女地藏堂の前にいたりしばらくふしおがみて門をたちおぬ。かくて西のかたへ行は。夫おもはずの事におもひて。引とめんいそぎけるうちに。半丁ばかりにして。忽見うしなひけり。野ばれなるところにて。いづくへかけをかくすべきたりもなきに。かくにはかに見えざる事。いかさまた事にあらずと。むねうち御はぎて。先我屋へうへりぬ。かくていかがはせんと居たりしが。くれに及ぬるころ。其わたりの寺に吟居るよし告しらす人のありければ。いそぎむかへりぬ。かくてかの女かたりけるは。我はじめ紙川へゆかんといひしは。そのころ廣澤へ行て身を投とおもひけるなり。そのゆへに万日寺を出て。西のかたへころざしけるに。黒衣めしたる御僧のふと出玉ひて。御身はいづくへゆき玉ふやととひ玉ひければ。我はひろさわへまいるなりとこたふるに廣澤へならば我につきてきたり玉へ。我もさゆくとのなりとの玉へば。うれしく。おもひて御あとにつきてゆくとおもひしかば。程なくとある寺に着ぬ。ここにをいてころつきてよくよく見るに廣沢にはあらで壬生寺なり。かくて御僧はうちへ入玉ふ。それより堂へまいりけるが。あまり飢つかれければ。堂の縁に打ふしてやすみけるに。夢やらん幻やらん。又さきの僧の堂のうちより出させ玉ひて。これ給よとてめしのとりたるをたまはる。ありがたくうれしくてをしいただきつ用れば力つき心やすらかになりて。それより身をなげんとおもふ心もなくて。かくかへりけるが。すぐにもえかへらでまづ此にわたりにたちやすらひけるなり。これひとへに地藏菩薩の御利益なりとてよろこびけるが。程なく心地例さまになりてそぞろ言もやみにけるなり。まことにこれ地藏の寶号をとなへこの夢授經を信じて讀けるゆへに。かかる現益を得たるにこそ。一年我江州小松禪寺に居たりしころこの經をひろめけるが。折ふし疫痢のはやりて村々に病死せしもの多たりけるに。この經を信じて讀しものは尽まぬかれしなり。かかる事は衆生の業感にもよるべければかく事々しき書あらはさんも。強經の利益を賣に似たれども。そのころも人のかくいひしらふのみならず。地藏菩薩二十八種の利益の中の第六に。疾疫不臨の願おはしませば。所謂十手の

指<sup>ゆび</sup>と<sup>ところ</sup>厳<sup>げん</sup>として。一尊<sup>いそん</sup>の誓<sup>ちか</sup>と<sup>ころ</sup>確<sup>かく</sup>たれば。あえて私<sup>わたくし</sup>の判断<sup>はんぱん</sup>にはあらざるなり。又或<sup>ある</sup>は洛陽<sup>らくやう</sup>の信尼終<sup>しんにしゆう</sup>夜<sup>よ</sup>此經<sup>このきやう</sup>を讀<sup>よ</sup>て。夢<sup>さう</sup>に相好圓滿<sup>さうがうえんまん</sup>の弥陀尊<sup>みだつそん</sup>を拜<sup>はい</sup>し。或<sup>ある</sup>は大和<sup>だいわ</sup>の童子<sup>どうじ</sup>此經<sup>このきやう</sup>を讀<sup>よ</sup>て他の臨終<sup>りんしゆう</sup>人の信<sup>しん</sup>を起<sup>おこ</sup>さしひるの類況<sup>るいけい</sup>々として一ならず。惣<sup>さう</sup>じてこれをいはば滅罪生善<sup>めつざいしやうぜん</sup>。現利當益<sup>げんりとうやく</sup>のあらたなる事不可説<sup>ふせつ</sup>なるものか。然<sup>しか</sup>れば我<sup>われ</sup>この夢授經<sup>むじゆきやう</sup>をひろむる事。只例證<sup>れいじゆう</sup>あるのみにあらず。かくのごときの現益<sup>げんやく</sup>あるをもつてなり。僧祇律<sup>そうぎりつ</sup>に佛<sup>ぶつ</sup>のたまはく。たとひ我言<sup>われこと</sup>なりといへども。処<sup>ところ</sup>にをいて清<sup>しやうじやう</sup> 淨<sup>じやうじやう</sup>ならざるは。ひろめされ。たとひ我言<sup>われこと</sup>ならずともそのころにして清<sup>しやうじやう</sup> 淨<sup>じやうじやう</sup>ならば。これをひろむべしと。況<sup>しか</sup>この夢授經<sup>むじゆきやう</sup>は觀音直<sup>くわんおんぢき</sup>に授玉<sup>さづけ</sup>ひ。衆生<sup>しゆじやう</sup>の信縁<sup>しんえん</sup>時<sup>とき</sup>熟<sup>うめり</sup>。よつてこの利益<sup>りやく</sup>あるをや。あに清<sup>しやうじやう</sup> 淨<sup>じやうじやう</sup>ならずとせんや。謹<sup>つしん</sup> 疑者<sup>ぎしや</sup>に問<sup>と</sup>ふ。世尊<sup>せそん</sup>四十九年の説法<sup>せっぽう</sup>。夢説<sup>むせつ</sup>乎<sup>か</sup>。覺説<sup>かくせつ</sup>乎<sup>か</sup>。

#### 七 但州間瀬村ゆるぎの地藏菩薩の事

但州<sup>たんしゆう</sup>養父<sup>やぶ</sup>の郡<sup>こほり</sup>。小佐谷<sup>おさだに</sup>。間瀬村<sup>まぜむら</sup>地藏<sup>ぢざう</sup>菩薩<sup>ぼさつ</sup>のゆるぎ地藏菩薩<sup>ぢざうぼさつ</sup>は。行基菩薩<sup>ぎやうきぼさつ</sup>の作玉<sup>つくり</sup>なる御長<sup>みちか</sup>三尺餘<sup>さんさくよ</sup>の丸木造<sup>まるきづくり</sup>の靈像<sup>れいざう</sup>なり。そのむかしより慶長<sup>けいちやう</sup>年中<sup>なちゆう</sup>までにすでに三度<sup>さんど</sup>までゆるがせ玉<sup>たま</sup>ひしゆへに。これをゆるぎ地藏<sup>ぢざう</sup>と名付<sup>なづ</sup>奉<sup>ほう</sup>る。この菩薩<sup>ぼさつ</sup>のゆるがせ玉<sup>たま</sup>ふ其<sup>その</sup>のとしは。世間<sup>けん</sup>かならず豊年<sup>ほうねん</sup>なるよし縁起<sup>えんぎ</sup>に見えたり。靈驗<sup>れいげん</sup>あらたにましませども。たれ再興<sup>さいかう</sup>し奉<sup>ほう</sup>る事をなかりしかば座光<sup>ざくわう</sup>ともになくなり。御厨子<sup>みづし</sup>だにやぶれてかたばかりなり。心あるとのこれを見て。あに感慨<sup>かんがい</sup>をおこさざらんや。しかるに去年<sup>こぞ</sup>京都<sup>きやうと</sup>ある浄土<sup>じやうど</sup>の知識<sup>ちしき</sup>。此<sup>こ</sup>ところにえんあつて。くだられぬころ。この御ありさまを見奉<sup>みほう</sup>り。かなしみにたえずして。村<sup>むら</sup>の庄屋<sup>しやうや</sup>それがしに。相<sup>あい</sup>ばかりつつ村中<sup>むらぢゆう</sup>へ再興<sup>さいかう</sup>の事を申合<sup>まは</sup>されければ。各<sup>おの</sup>よろこび一同<sup>いどう</sup>して。ひかりふし京都<sup>きやうと</sup>より大藏<sup>だざう</sup>といへる佛師<sup>ぶつし</sup>の當国<sup>たうこく</sup>にくだり居<sup>ゐ</sup>たりしをかたらひて。臺座<sup>たいざ</sup>後光<sup>ごくわう</sup>。ならびに御厨子<sup>みづし</sup>までも。莊嚴<sup>しやうげん</sup>あたらしく出<sup>しゆつ</sup>来<sup>らい</sup>せり。かくて慶長<sup>けいちやう</sup>以後<sup>いご</sup>つねにゆるがせ玉<sup>たま</sup>はざるに。この再興<sup>さいかう</sup>事<sup>こと</sup>おはりて。去秋<sup>きしゆう</sup>のはじめより九月<sup>くがつ</sup>のころまでゆるがせ玉<sup>たま</sup>へり。國中<sup>こくぢゆう</sup>の貴賤<sup>きせん</sup>きつたへ昼夜<sup>ちやうや</sup>参詣<sup>さんぎ</sup>し。希有<sup>けう</sup>の思<sup>おもひ</sup>を生<sup>しやう</sup>じつ。結縁<sup>けつえん</sup>の誠<sup>まこと</sup>を注<sup>そそ</sup>ける。かねてしるしおきしたたがはず。去年<sup>こぞ</sup>は但州<sup>たんしゆう</sup>豊饒<sup>ぶけう</sup>にありけるとぞ。たえて久しくゆるがせ玉<sup>たま</sup>ひぬに。去年<sup>こぞ</sup>しも。かくゆるぎいでさせ玉<sup>たま</sup>ひしは。いかさまにも太平<sup>たいへい</sup>の時<sup>とき</sup>いたり。佛法<sup>ぶつぽう</sup>繁昌<sup>はんじやう</sup>の縁<sup>えん</sup>うめるにや。大論<sup>だろん</sup>に須弥山王<sup>しゆみせんわう</sup>の因縁<sup>いんえん</sup>なうして。動搖<sup>どうやう</sup>せざるがごとく。諸佛<sup>しよぶつ</sup>の法<sup>ほう</sup>もかくのごとくと例<sup>れい</sup>して見<sup>み</sup>つべし。

#### 八 薩州京泊吹上山地蔵菩薩の事

薩州<sup>さつしゆう</sup>京泊<sup>きやうはく</sup>といふところは相<sup>あひ</sup>つたふそのうみは異國<sup>いこく</sup>着船<sup>ちやくせん</sup>の湊<sup>みなと</sup>にして商賈<sup>しやうが</sup>便<sup>べん</sup>をうるごと。今の肥州<sup>ひしゆう</sup>長崎<sup>ながさき</sup>のごとくにありけるとぞしかるに陵谷<sup>りやうこく</sup>變遷<sup>へんせん</sup>するならひなれば。いつの時<sup>とき</sup>よりか事<sup>こと</sup>かはりて。むかしの寺<sup>てら</sup>のあとなんいふところは。海<sup>うみ</sup>より細砂<sup>こすな</sup>を吹<sup>ふ</sup>上<sup>あ</sup>て。年月<sup>としつき</sup>つもりけるにしたがひて。そのたかさ數十丈<sup>すぢう</sup>の山<sup>やま</sup>となりぬ。かく

て又下へふきおろしける程に。次第にひきくなりもてゆきて。いまはむかしの平地も見ゆるまでなり。むかしの寺のあとと見えて。香炉茶碗などのわれたるぞおほくありけり。しかるところに去年二月の末に。寺田氏それがし。網津村へとほととて。人焼場などおぼしきあたりを見めぐりけるに。御長四五寸ばかりの立像の土佛一鉢見出し奉りぬ。よくよくこれを見るにまさしく。地藏菩薩にてましませり。あれども御くしの損じさせ玉ふゆへ。まづそのわたりなる浄鏡寺の仏壇にあづけおき奉りぬ。そのち卯月のはじめにやありけん。肘黒氏のそれがし。もとより三寶に帰依し殊に地藏菩薩に有縁なりけるが。かの寺にまうでて。本尊を礼拝せし因に。かの塑像を見奉り。委来由をたづねききて。かく損じさせ玉へる塑像を再興するは。功德をすぐるところききし。いそぎ上がたのばらせ奉りて。御くしくろひまいらすべきよし浄鏡寺に相談ありて。やがて上がたへのぼせ奉りぬ。そのち仏師御くしくろひ莊嚴しておくり奉るとて。是は。むかし鳥佛師といへるの権作なり。大和法隆寺に此作ありて。三国の土をもつて。つくり奉りしと申つたへ侍りぬ。世にまれなる塑像にてましませば。随分信仰し玉へと申おこせたりければ。ますますよろこび信をとりて供養し奉りぬ。時に福山氏それがしも。常に地藏菩薩を信敬せられけるが。この塑像をおがみ奉りて。渴仰のころ切にして。あはれ我もかかる塑像を感得して。供養し奉らばやとねがはれけるが。たやすく得つべきとおもはれざりければ。同年九月廿九日にちかひをおこして。ねがはくは惣じて三寶。別しては地藏ぼさつの加被力によりて。かかる塑像一鉢あたへさせ給へと。至心に百八禮して後。かの人焼場のわたり東。西とたづねめぐるに。すべて見え玉はず。もしやと古塚の石をのけ。ほりうがちてさがしけるに。かの像にすこしもたがはせ玉はぬと一鉢もとめえぬ。うれしくありがたき事いふはかりなくて。いそぎもりかへりて。まづ仏壇に安置し奉り。日ごろの願望満足しぬとて。信敬のかうべをかたふけられける。しかれどもこれも御くしのおはせねば。上がたへのぼせ奉りつくりつがせてこそ。いよいよくやうし奉らんとしかるべきたよりをまち居らせけるに。肘黒氏又この感得をききて。いそぎかの家に入来。こふて塑像を拝見する折ふし。佛壇のわきにふるき厨子あり。よくよくその中をのぞき見るに。いたくふるびさせ玉ふ佛の見くしとおぼしきぞおはしけり。まづとり出し奉りて。こころにかの塑像の上にのせ奉るに。色相次目にいたるまで。うたがひもなき同作の地藏のみくしにてぞおはしけり。人々立よりてこれを見奉り。各感涙を催て未曾有の事なりと嘆ず。これをききつたへ見おどろひて。信心をおこすものおほく。所々にあまた地藏講をむすびて。毎月廿四日には精進清浄にして。縁々各相あつまり。延命經。夢授經。おもひおもひに讀誦し。禮拜唱名たがひに相つとめ。其間は地藏菩薩の靈驗集し書などよみて。ともに信をはけまし。行をすすむるよし。或し人のもとよりくはしくいひおこされたるにぞ。きく耳もすずしく。塵垢をあらふ心地して。隨喜のあまり。かくこのせ侍りぬ。まづここにおもんに。濱の真砂のつもりてひさしき大山の。又いつとなく吹おろされて。むかしのごとく陸地となり。その下よりかかる塑像のなをくづれさせ玉はで。願に應じて出玉ふだにふしきなるに。その御くしのしりも感得の人のもとにましませるや。因縁の會遇。不可思議なる事。言論をいるべからず。此一事をもつてだに。地藏出化

の時いたり。衆生得益の縁うめる事。しりぬべき事ぞかし。ことにいはんや近年地藏經の註釋。驗記等相ついで出。所謂智旭占察經の義。及玄義。同懺願儀。眞常本願經の手鑑。良助座首の秘記。亮汰閣梨延命經の鈔。及靈驗記。感應錄和談鈔利生記のたぐひこれなり。此中にたとひ作は昔にあるも。板行して世に流布する事は僅十年を出す。中について最希有なるは。唐の實叉難陀。地藏菩薩本願經を譯し玉ひしよりこのかた。殆千有餘載。其間つねに註する人なかりしに。本朝天和三年に當。皇清天台の青蓮大師。この經の科註七卷を撰ず。遙のはたうをへて。わづかに一部。肥前長崎にわたされぬるに。幸去年板行あつて。世にひろまりぬ。陳鏞が跋にいへらく。一たび釋迦涅槃し玉ひてより後。この經今はじめて知己をえたり。莫大のくどく後頭にあらんと。まことにしかるな。つたへき此師今異朝にをいて。あまねく道俗をすすめつ。地藏菩薩の功德をひろめ玉ふと。あに機運時いたりて。千里風を同するにあらずや。近年本朝諸國の僧侶これ此菩薩を讚嘆皈依する人ますますおほく。その靈驗をかふるもの勝かずふからず。ここにをいて処々の靈像修飾を加。新造の莊嚴都鄙にさかんに。龕室の建立往々にあらたなり。此時にあたつて。心より出。地より現じ。或は動搖し。或は奮起するの類。これみな時に乗じ機に應じて。興起感發し玉ふにあらずや。たとへば廣苑遼谷。皆一様の春なるがごとし。芟根なくんば已。いやしくも夢花根あらばいかんぞ芽を抽葩を吐ざらんや。世尊已に威儀を撰。寂滅の根を掃し玉ひてよりこのかた。法運循環して。今地藏當化の春いたれり。因縁なきをば論ぜず。わづかに善種信根あらば。あに菩提の芽を生じて。利樂の花をひらかざらんや。時をば失べからず。いはゆる周易六十四卦。三百八十四爻。其要只時の一字にあり。故にいふ時に隨の義大なる哉と。夫古人の時を待て動。良に故ある哉。ことに況我佛法をや。時をしらざるばあるべからず。故に成實論に云。語は是實なりといへども。時に非してしかも説は。亦綺語にをつと。このゆへに佛の説法し玉ふ言虚發せず。只時節因縁をまち玉ふ。此ゆへに諸經の首に一時と置。正に此ころなり。故に肇師の一時を釋するにいはく。法王運を啓嘉會の時なりと。又天台智者大師の釋に。衆生法を感じ。佛の慈悲をしへに趣機應の時なりといへり。これに例して見つべし今地藏菩薩末法化益の運をひらき。衆生得樂の縁うめり。あに引導の順風に任て。慈悲の順船に乗ざらんや。孟子のいはゆる。智慧ありといへども。勢に乗にはしかじ。鑑基ありといへども。時を待にはしかりとまさにしるべし佛法世法時に相應せざれば。勞して功すくなきゆへなりと。然れども人人見分。分分縁異なれば。或は弥陀機感の時刻と思ひ。或は觀音機感の時いたると見るあるべしもとより各各三昧なれば。たがひに相妨礙せず。各そのこのむところに隨て。而其願を成ずべし。今旦我所見を述て謹同志の人に告といふ

九 地藏菩薩夢に三寶靈驗の聞書を勸たまふ事

江州彦根に信士それがし法名智雲とて。三寶を信敬し利益をこのめる人有けるが。奚疑といへる人に三寶靈驗の聞書をうつし給はれかしとたのまれて。去年卯月廿五日より書始られしに。自思惟すらく。かくのごときの事も。もしに善根とやならん。さりながらこれ我發起の事にもあらず。只書写にあづかる耳。往生の業とするにたらずと思ひつつも。いねたる夜の夢に。此聞書のならば見てたるをもちて。是を奚疑に見せて。悦なん。さだめて例を所依とするなる。侍盡庵にこそいますらめと。やがてかの庵にいたりて枝折戸のもとより。その名をよふにさらにこたふる人なし。うちに入つつ中の間にいたりて見るに。奚疑ただひとり衣着。袈裟かけて座禪のさまなれば。ものいひさままたげんもよしなし。まづ佛を拝せんとおもひて。仏壇をうかがひ見るにむらさきの斗帳かかりて。三尺ばかりの座像の阿弥陀如来。ならびに立像の観音。勢至。莊嚴殊勝に見えさせ玉ふがいませり。かくて南のえんより佛間へ入とするに佛壇の前に。御僧の繩床の上にひがしにむかつて座し玉ふを見る。ねずみいろの御衣に。金欄の御袈裟をかけ玉ひ。御手につぼめる蓮華二莖をもち玉へり。智雲おそれつつしむところを生じて。やや退てよくかの御僧を見奉るに。御面見は木像の地藏尊にして。御身はつねの衣類なり。ここにをいて三拝して。いまだ頭をあげざるに。佛壇のうちより。誰となくくすれる聲にて

筆にうきころにおもひとなふるも

みな妙なりや我法の道

ときこえければ。あやし誰の吟ずるならんと見めぐらすに。かの地藏尊たえなる御こえにてよくおぼへたるにやとのたまへば。時に奚疑もそこになんつね居て。ともに頭をたれたるに。その時地藏菩薩。かさねて右のかたを誦し玉ひ。御手にもさせ玉へる二莖のはちすを御前なる机の上にさしおき玉ひつつ。奚疑にいかん汝聞書をたのまば。是をもちゆべしとのたまへば。奚疑これを頂戴して。智雲に授ていはく。これにてはやくうき給はれと。時に智雲二莖の蓮をうけとつてつらつら見るに。忒本の筆なり。時に奚疑云いまのうたよくおぼえ玉へるやと。智雲のいはく。うたの中にたえなりとあるは。妙の字にてあるべきやと。その時地藏菩薩仰けるは。三業に通ずるがゆへに。玄の字を扁にしたる妙の字よしと。かくて兩人相ともに拝し奉ると、おもへば夢覺たり。ふしぎの事をも見つるものかな。夜あけるなば奚疑もさだめてきたるべければ。かたりていよいよ信をとりなん。もしわすれをやせんずらんとて。夜中にまづかの御うたをかきつけおきぬ。かくて妙の字の事をあんなるに女扁より外におぼえず。いかなるゆへにかとおもひつづくるに程なく夜もあけぬ。さてなにごころなくかたはらにありける書をひらき見るに玄扁の妙の字ありけり。いよいよ感嘆して居たるに奚疑日たけて入きたれり。やがてかの夢の事をかたりおはらざるに。奚疑袖より筆二本を出して。幸に今朝これをえたり。



すなはち此書を書給らんとために持参しぬとて。智雲にあたふ。ここに知ぬ。この筆は夢中の二蓮に合する事を。又妙の字義三業に通ずと仰られしは。さだめてふるきゆへあるにや。且又夢想の御うたのころは。智雲宵に此業往生の行にたらず口出としおもへる心をさとしたらましめんが為に。本尊如来の示玉ふなるべし。かの侍盡席安置の佛は。慧心の御作にして。座像の尊軀なり。むかしよりの靈験あげてかぞふべからず。もつともたうとくわたらせ玉ふとなん。かかる瑞夢をきくにつけても。信感肝にそみてありがたくおもひ侍りぬ。かの周之夔のいはゆる凡禪に参。咒を誦し。戒を持。福を修すると。治生の雑務と。皆往生の資糧なり。凡一聲を勸念せしめ。静に閱事一刻。一字を演説し。一处に流通するも。皆功德壽命の無量なるなりとうんぬん誠なる哉や此言。況三寶靈験の書。しかも。利益衆生の意樂にして。往生浄土の廻向ならんをや。伏願は。今我此述するところも。三寶地藏の冥感にかなひて哀納をたれ。覆護を加し玉へかし。又願は此功德をもつて一切衆生に廻向し奉る。共に諸の罪障を滅し。同一切の善願を成じ。臨終正念にして。浄土に往生し。頓に普賢の行願を圓滿し。長地藏の眷属となつて。法界一切衆生とともに。齊佛道を成ぜん事を。又願は此書の中にをいて。若は随喜し讃嘆し。或は嘲笑し誹謗せん願。逆結縁の人ともに地藏菩薩平等の大悲願に乗じて。同無戲論場に遊ものなり。南無十方盡虚空界三世一切三寶。南無六道能化願金剛地藏菩薩。哀憐し摂取し玉へ

地藏菩薩利益集卷之五

元禄四 入辛未V年

七月吉日

洛陽 書肆 永田調兵衛

平樂寺小兵衛

淺見吉兵衛

「路傍の地藏」の宗教史的考察

(課題番号 22520060)

2010 年度~2013 年度科学研究補助金 基盤研究 (C) (一般)

研究成果報告書・翻刻編 I

『地藏菩薩利益集』翻刻

研究代表者 清水邦彦 (金沢大学人間科学系准教授)

2014 年 3 月発行